

216.2

216.2-To43ウ



1200500730419

京都の維新史蹟

京都市文化課編



始



967

86

京都の維新史蹟

京都市文化課

216.2  
T043



徳重淺吉

京都の維新史蹟

京都市文化課



はしがき

明治維新の鴻業は其の構想の雄壯にして、其の規模の偉大なること前古に比なく、實に國史上未曾有の盛事である。殊に尙ぶべきは其の精神であつて、肇國以來皇室を中心とし、悠遠なる歴史と傳統、風土等の渾然たる融合によつて培はれ、育まれながら、幕末、内憂外患、國事多端の秋を迎へた我國民が、強烈なる國家的意識の自覺と共に、尊嚴なる我國體擁護の爲に蹶然起つた、かの維新回天の運動は、茲に國民熱血の流露となつて展開し、曠古の大業の完成となつて結實したのである。従つて之が實現の爲に率先挺身した勤皇烈士等の期してゐた所も、一天壤無窮の皇運を扶翼し奉り、皇威の振張を圖るにあつた。

本市が皇都として此の運動の中心舞臺であり、其の遺蹟の數ふるに違ない事は既に周知の通りであるが、東亞の運命を双肩に、更に雄渾なる昭和維新到來の爲、

967

86

大東亞戰の完遂に邁進しつゝある現下の我國民として、かの七十餘年前、先人達によつて發揮せられた燃ゆるが如き勤皇報國の精神と其の事蹟を偲ぶは、戦時下特に國民精神の昂揚に資する所極めて大なるものあるを思ひ、茲に此の方面の研究家として知らるゝ大谷大學教授徳重淺吉氏に執筆を委嘱して本冊子を編し、「京都の維新史蹟」と題して上梓の上、廣く一般に頒布せんとする次第である。

尙本冊子はもとより京都の維新史蹟全部を網羅するものに非ず、他日改版に際し、筆者の御協力を得て増補完璧を期し度いと思ふ。

昭和十八年六月

京都市教育局文化課

凡そ京都の山川すべてこれ皇氣の漂ふ所にして、一木一石、國民の忠誠志士の丹心を宿さざるもの莫し。されど之を約して傳ふるに於ては、必ずやその事件の簇叢を、維新回天の偉業展開の一道に綜べ、中心を皇居宸廷の一天に措きて簡擇し、以て史蹟に因む皇國正氣發華の大道を明かすを先づ志すべきものと信ず。巨多の勤皇事蹟、或は興味津津たる逸話の類、固より之を藐視せんとには非ず。たゞ敘述の順序、且らく之を後日に譲らんとする而已。

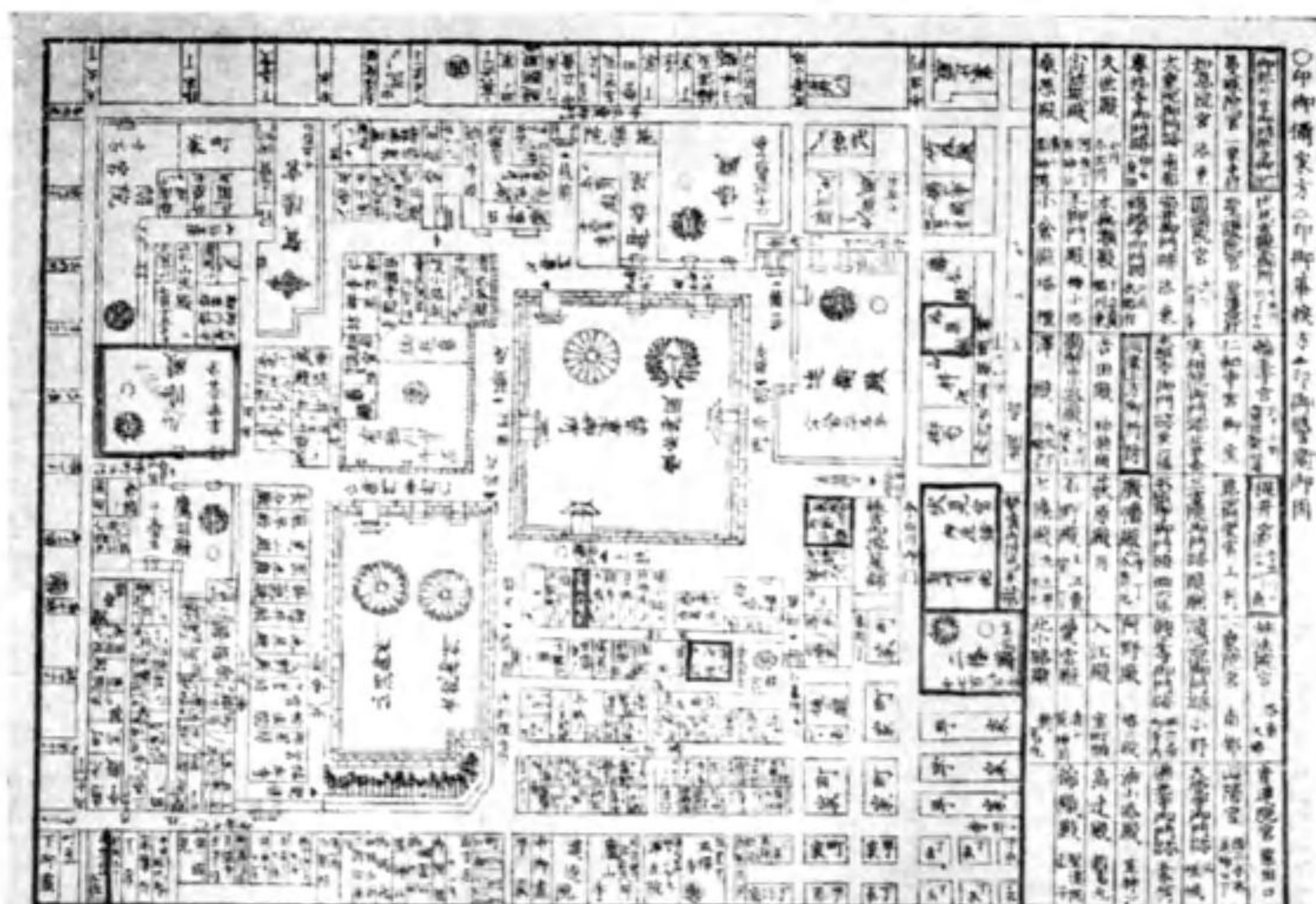
昭和十八年春

徳重吉

## 京都の維新史蹟

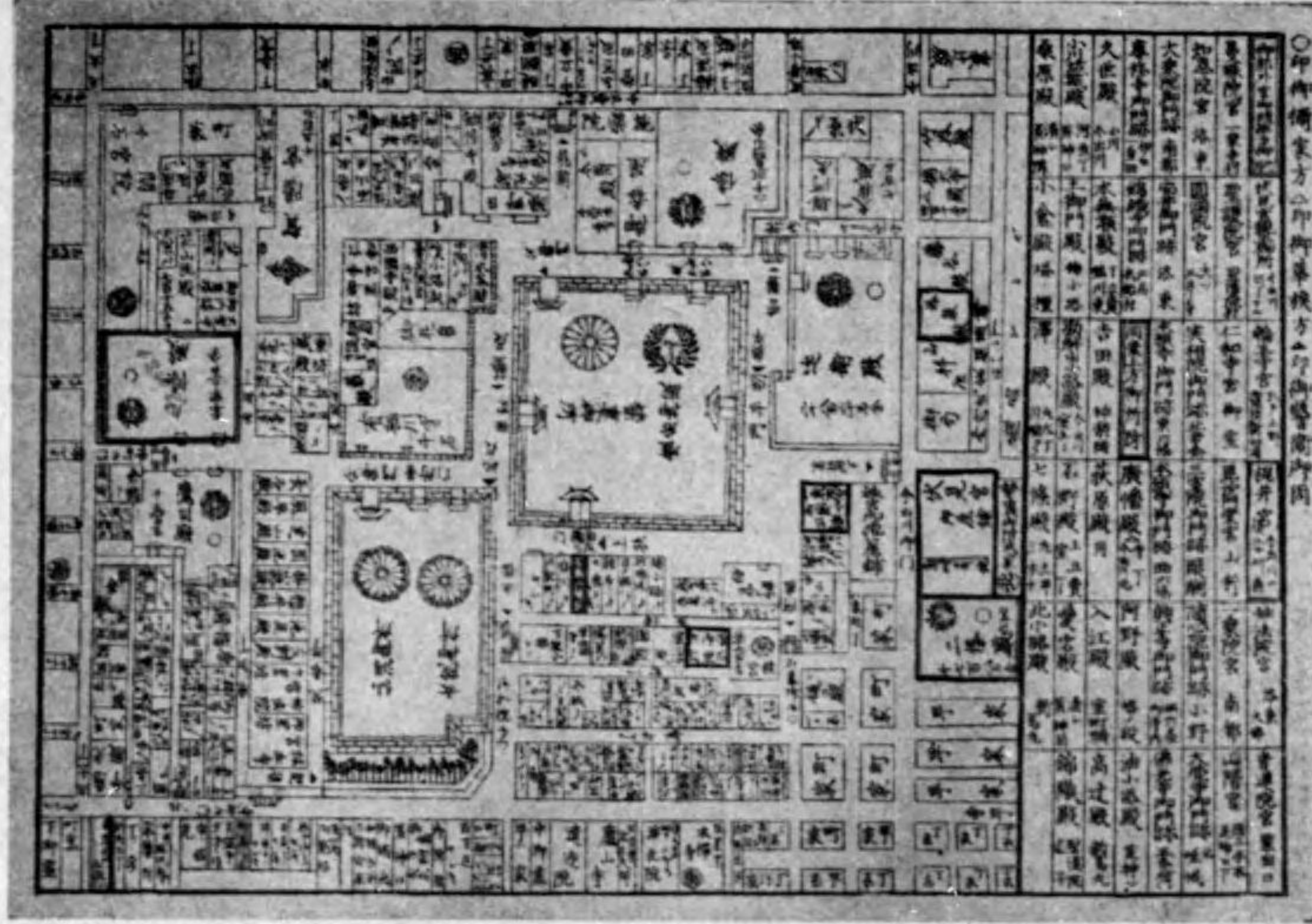
### 目次

一、總	說	一
二、御	苑	五
三、皇	居	二一
四、恩賜元離宮二條城		二六
五、別格官弊社梨木神社		一九
六、靈山護國神社		三三
七、城東練兵場跡・梁川星巖邸址		三五
八、一橋中納言館址東本願寺		三一
九、妙法院		三六
一〇、日限地藏		四〇



京都御所平面圖 (源仁定喜)口繪より

- 一一、清水寺・清閑寺……………四
- 一二、青蓮院……………四七
- 一三、翠紅館址……………五〇
- 一四、池田屋騒動の跡……………五二
- 一五、坂本・中岡二十終焉の地……………五三
- 一六、大久保利通寓居の跡……………五九
- 一七、相國寺林光院……………六二
- 一八、藤井九成邸址……………六三
- 一九、尊攘堂……………六九
- 二〇、岩倉公隱栖の跡……………七〇
- 二一、飯田忠彦隱栖の跡……………七三
- 二二、寺田屋騒動の跡……………八二
- 二三、天王山……………八六
- 二四、淀城址……………九〇

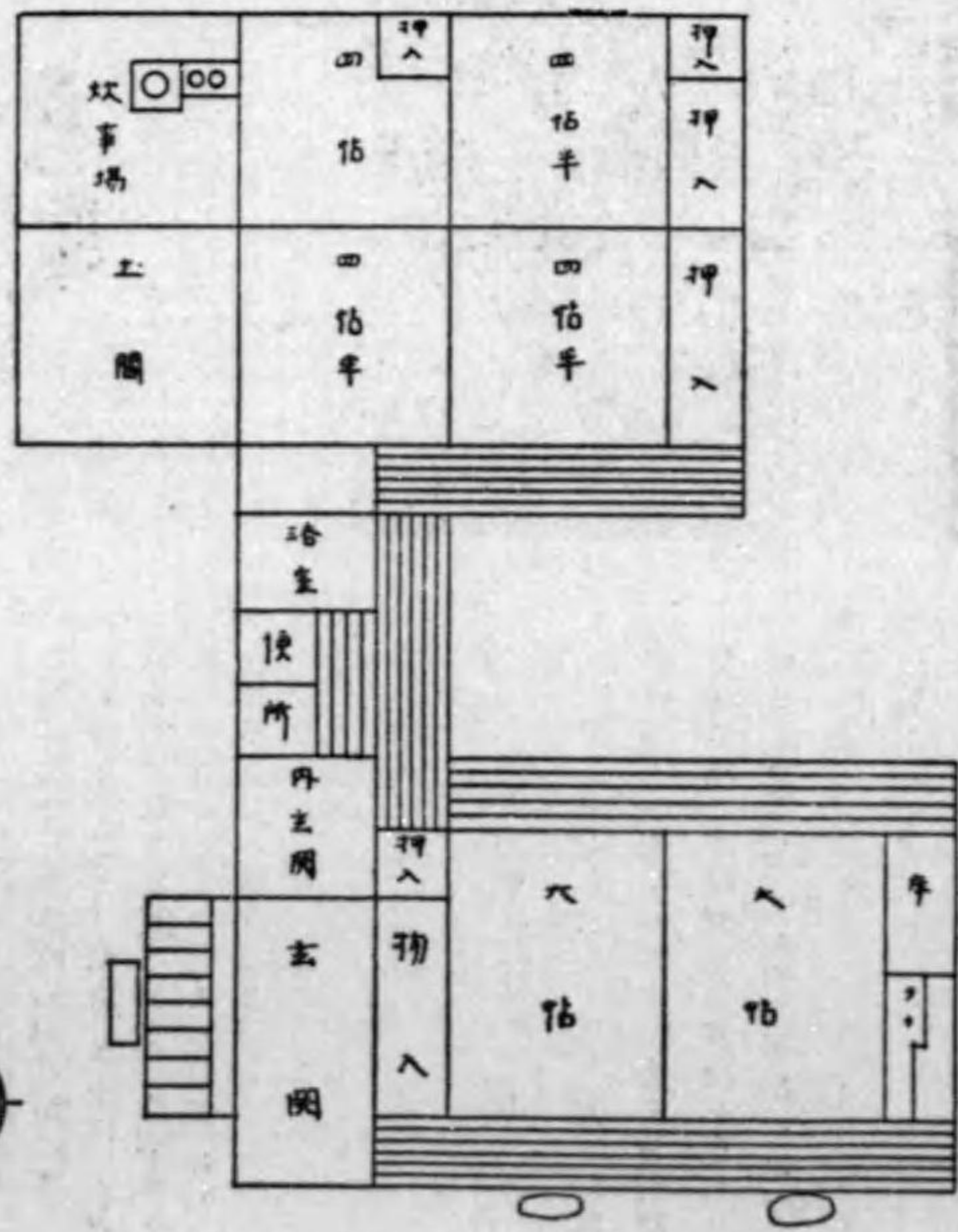


京都御所平面圖 (都仁志喜)口繪より

- 一一、清水寺・清閑寺……………四
- 一二、青蓮院……………七
- 一三、翠紅館址……………五〇
- 一四、池田屋騒動の跡……………三
- 一五、坂本・中岡二十士終焉の地……………壹
- 一六、大久保利通寓居の跡……………天
- 一七、相國寺林光院……………三
- 一八、藤井九成邸址……………壹
- 一九、尊攘堂……………九
- 二〇、岩倉公隠栖の跡……………三
- 二一、飯田忠彦隠栖の跡……………七
- 二二、寺田屋騒動の跡……………三
- 二三、天王山……………六
- 二四、淀城址……………七



三條大橋古圖



岩倉公幽居建物平面圖



(二) 天王山勇士訣別之圖

藤原玉雲畫



(一) 德川慶勝皇居跪拜之圖

石川信守畫

(一) 德川慶勝皇居跪拜之圖  
 文久三年正月八日、德川慶勝は朝命に依つて將軍家茂に先んじ、成瀬正肥、田宮如雲等を従へて入洛するや、旅装をも解かず、直ちに皇居南門（建禮門）の前に至つて跪坐遙拜し、夫より近衛家の河原邸に入り、衣冠に改めた上參内し、天顏に咫尺し奉つたといふ。筆者（號不成）は當時扈從の藩臣畫家にして、御溝水を以つて描いたものである、贊（和歌）は成瀬正肥の筆になる。

(二) 天王山勇士訣別之圖  
 元治元年七月二十一日、眞木和泉守以下十七烈士が自刃に先だち最後の宴を開いて訣別する實況を寫したものと、圖中上方に左手にて杯を舉げ、右手に白扇を持ち、短冊を前にせるは眞木和泉である。

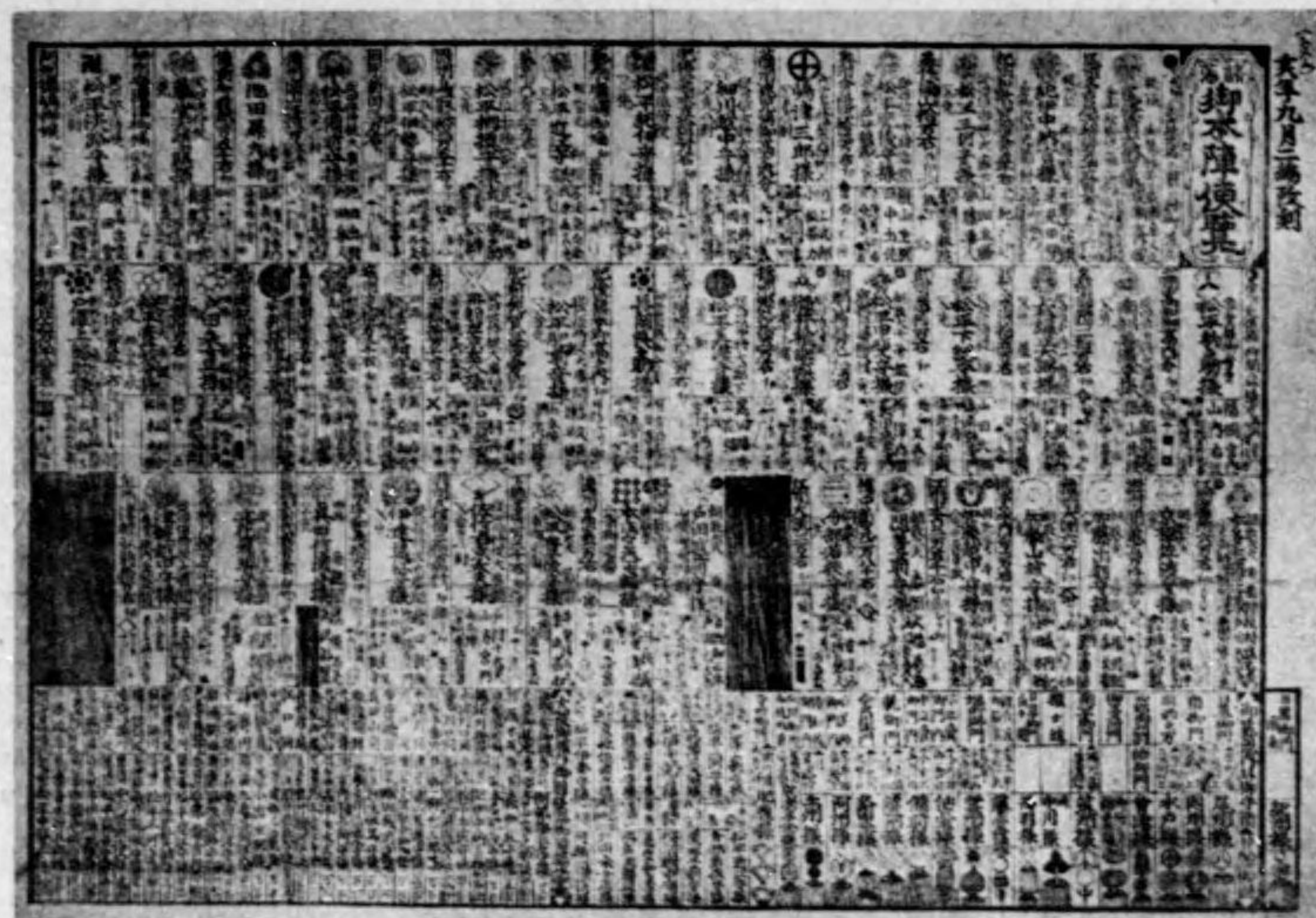


# 京都の維新史蹟

## 一、總 說

京都は古く 神武天皇御肇國の際に、その御先導を申上げた鴨建角身命土着の聖地であり、ついで聖德太子が皇道弘張世界的文化興隆のために建てられた蜂岡寺のあつたところ、そして次には 桓武天皇が文物燦然たる大日本國の永久の皇都たるべく集められた平安京の故地である。山河襟帯自然に城をなし、四神相應の靈地であるとは、此時の大御詔に仰せられしところであつて、山紫に水清く、而も西南は淀川の水路を以て浪華より山陽、西海に至り半島大陸に通じ、東は逢坂山を越えて東海東山二道に、北は龍華越から北陸に、丹波路から山陰に出て朝鮮東岸に連絡してゐたし、南は木津川を渡つて畿國の要地大和が近く控へてゐたのである。だから遠い神代の昔から夙に文化の開けたところであつて、桓武天皇がこゝを選び給ひしも、この地の持てる過去の力と將來の望みとが、全くその遠大なる御計畫に相應し、皇祖肇國の御遺業であるせられる八紘一宇の大理想を實現するに適してゐたからである。即ち此の都は最初からかゝる現御神と天下を知ろしめす我が天皇の大官所としての特別な精神に生き、世界の中心たるべき運命を擔つてゐたのであつて、天つ日の曇りない光に照らされて生長して來たのである。

だからその後の平安の都の發展には凄じいものがあつた。朱門披庭のほとり、瑞氣都大路を罩めて、百官臣僚が太平



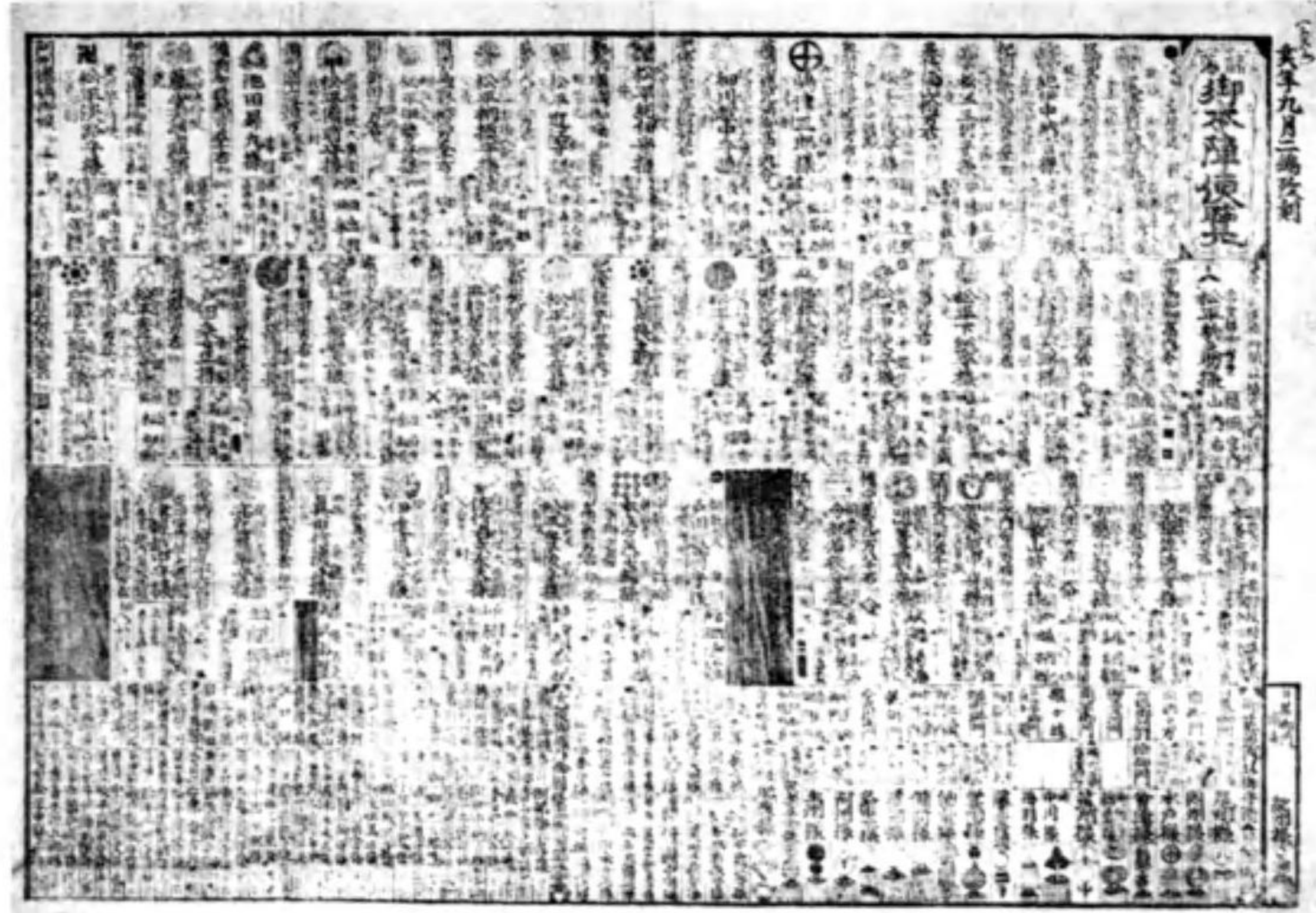
諸藩御本陣便覽圖

# 京都の維新史蹟

## 一、總 說

京都は古く 神武天皇御肇國の際に、その御先導を申上げた鴨建角身命土着の聖地であり、ついで聖德太子が皇道弘張世界的文化興隆のために建てられた峰岡寺のあつたところ、そして次には 桓武天皇が文物燦然たる大日本國の永久の皇都たるべく爰めました平安京の故地である。山河襟帯自然に城をなし、四神相應の靈地であるとは、此時の大御詔に仰せられしところであつて、山紫に水清く、而も西南は淀川の水路を以て浪華より山陽、西海に至り半島大陸に通じ、東は逢坂山を越えて東海東山二道に、北は龍華越から北陸に、丹波路から山陰に出て朝鮮東岸に連絡してゐたし、南は木津川を渡つて肇國の要地大和が近く控へてゐたのである。だから遠い神代の昔から夙に文化の開けたところであつて、桓武天皇がこゝを選び給ひしも、この地の持てる過去の力と將來の望みとが、全くその遠大なる御計畫に相應し、皇祖肇國の御遺業であらせられる八紘一字の大理想を實現するに適してゐたからである。即ち此の都は最初からかゝる現御神と天下を知ろしめす我が天皇の大官所としての特別な精神に生き、世界の中心たるべき運命を擔つてゐたのであつて、天つ日の曇りない光に照らされて生長して來たのである。

だからその後の平安の都の發展には凄じいものがあつた。朱門掖庭のほとり、瑞氣都大路を罩めて、百官臣僚が太平



諸藩御本陣便覽圖

を壽ぐところには、慶ばしきかも迦羅天竺は勿論、遠く月氏、大秦の文化までも採蒐合採したる優雅清白、高尚温和な一大文明が創り出され、これが日本七道全部を快くまとめて率ゐるたのである。勿論長い國家の歴史の間には朝家政力の顯現にも動靜あり、またそれに隨伴したるが如くこの都の繁榮にも消長があつた。特に文治建久以後は鎌倉、江戸の覇府時代を通じて、實際政治の中心はこゝになつたのである。而も京都は依然として日本文化の中心地、國民精神の故郷たる地位を失はなかつた。いま、之を治世産業とか、規模戸口とか言ふ方面から見ても、殆どそれに影響せられずして來た。近時の研究によると此の都府の人口は、江戸時代末葉の最も京都が魅力を失つた時でも三十萬近くあり、これは幕初は論なし、平安時代最盛期のそれとも殆ど上下ない數字であるといふ。

平安の都はかくして皇道文化の象徴たる如き意味を持つてゐる。手近い話が三十六峰に鴨の清流を配し、寢殿造りの勾欄に凭る十二單の人物を描けば、それが直ちに日本文化の豐艶な表象を喚び起す。又この地を足場として生れ育つて來た國民的藝術、たとへば文學、繪畫、染織、遊藝などを取り出して考へて見るときには、何一として強い日本の風韻を感受せぬものはない。隨つて元來が日本國道の歩みを、その曲つた道筋から正しきものに引き反さんとした國民的大努力事であつた維新の運動の如きにあつては、殆んど況てが此地を舞臺として遂行されたといふ事、これ全くその自然なる進行形態なりしとも云ふべく、換言すれば、日本國家再生の聖業は、實に京都を足場として行はるべき運命を擔つて居たのである。

而して此の運命は京都が萬代不易の帝都たりしこと、今日でも猶ほ即位大嘗の御大禮は此の地に於て擧げさせられる皇居のましまし、そこに於て具體的に仰ぎ見得る御稜威の本源、御仁慈の本據として拜せらるゝものがあるに因るのである。即ちすべては皇都たることを中心として發展して來たのである。尤も江戸時代にありては、現實政治上の中心機關は江戸にあつたのであるが、それでも朝廷に於ける攝關以下八省百官の制度が非常な魅力を以て國民精神の歸向する所として、國家生命の中心に坐してゐた事は言ふ迄もないのである。そしては平安京といふ都の一部にある御所といふ特定の一區域に於いて見られるのであり、此の御所は勿論平安奠都當時の大内裏と比すべくもなく、僅かに所謂里内裏の一たりし東洞院土御門御殿(後醍醐天皇御踐祚あり、後小松天皇より累代の皇居と定まる)の御跡であらせらるゝのであるが、この中に紫宸殿、清涼殿、神嘉殿、内侍所を初め御常御殿等の宮居が有り、その東南には仙洞御所があり、此の兩御所の周圍に公家町があつて凡そ百四十位の邸宅に分れてゐた。そして此の御所の出入は堺町、寺町、清和院、石薬師、今出川、乾、中立賣、新在家、下立賣の九つの門があつて不慮に備へてあつた。尤も此の新在家御門は寛文元年正月十五日の御焼亡後頂妙寺を河原町に移し凝華洞を造らせらるゝについて出來た門故、下世話に蛤御門と稱したのが現在にも通稱となつてゐるのである。

此の御所は日本國家生命の中樞地であつたから、之を莊嚴するものとして、外周には鬼門の鎮守たる延曆寺を初め、澤山の寺々がある。又山城の一宮たる賀茂神社を始め、八坂、石清水、稻荷等の諸大社もあり、京都は此の點全く社寺の都であつた。又江戸幕府の出張所とも言ふべき二條城があり、その北に所司代、役所、東西町奉行所があつて、民政施行の場所になつてををつた。加之幕末國事多端となつてからは、國民の精神自ら皇室に歸向し、その爲めに政治の中心が自ら京都に移らざるを得なくなつたので、幕府は皇居を守護しこの地を鎮撫する必要上新たに守護代を新町下立賣即ち今の府廳の所に置いて、禁闕守護と市中保安の任に當らしめた。別に新撰組なるものが置かれたのもこれと同じ時分

である。而してその頃の市内即ち洛中は上京と下京の兩大組に分れ、其處に町年寄、町代、五人組等があつて自治的の行政事務に關係してゐた。そして京都は全體に地子免除の恩典に浴してゐたのであつて、勿論御手傳、冥加金、運上等いふ不時の強制的出金が屢々課せられたのは事實であるが、それでも全國の他の都市よりは遙かに有利な條件に恵まれてゐたのである。

上述の如く京都の繁榮は御所と之にながつて存在してゐる古社寺と、そしてこれ等に關聯して發生進歩してゐる美術工藝によつて維持されてゐるのであつて、勿論かの江戸、難波に比すべくもなかつたとはいへ、猶且つ本朝第三の大都として、非常な魅力を國民の胸裡に強く印してゐたのである。即ち彼の政權久しく江戸にあつた時でも、苟も志ある人は三條橋を渡り皇居を拜して、以て天壤無窮の皇運を偲び奉る事を一生の念願としてゐたのであり、禁裏様の御稜威は全く神聖無爲の大徳として三千萬國民を風化煦育してゐたのである。

斯くて京都は、舊幕時代にも矢張り日本文明の中心地として鮮かな生命を有つて居り、國內交通の一中心地であつた。そして安政六年の統計によると上京が八百五十三町、下京五百九十八町、合せて千四百五十一町、その總軒約数は四萬八千八十一軒二分であつたが、之は表向の數なので實際は戸數約五萬五、六千、人口約三十萬と云ふところが江戸時代中期以後の大數であつたと見てよい。然し其が文久年間以後海内鼎沸し、朝威再び輝き初めて政治の中心が京都に移りかけて來ると幕府、諸侯の兵士が駐屯するもの、志士浪人の上京するもの等が夥しく、爲に戸數一萬を増し人口も俄に増加した。

京都は地理的にも全國の中央にあつて、西海より入るには山崎街道、鳥羽街道、伏見街道があり、淀川の三十石船も

亦非常に利用せられてゐた。尤も之は伏見迄で、其からは角倉了以が開鑿した高瀬川を利用するのであり、その運河は東は二條木屋町から七條内濱を経て伏見に至つて居り、西は嵯峨から山の内を過ぎて三條千本に出で、南して淀に通じて居た。此の後者は大堰川の切通しを以つて丹波に至る水路に連絡するので、山陰、北陸を控へる重要な物資供給路である。それと東は三條栗田口から日岡、山科を経て大津に至る東海道があつて、當年の最も大切な路線である。然し之は日岡の所が山腹を走つて居り、赤粘土の爲に泥濘深く車の轍が數尺も落ち込むといふ困難な悪路となつてゐたので、屢々改修したのであるが、特に慶應二年には幕府に於て大改修を行ひ、今の切通を穿つた。又文久年間には瀬田から宇治に至る水路を開鑿して一朝事有る時の京都の防備と、物資供給の通路としようとしたが之は測量のみで實行に至らなかつた。同じ頃嵯峨より三條に至る西高瀬川上部も改修したのであつて、いかに幕府が京都の兵站、補給路に意を注ぎ以つて西南諸藩の反幕勢力に備へんとしてゐたかが察せられるのである。此等も京都が再び政治上の中心となり、此の地に於て勢力を持つ事が全國に號令する事になつた形勢の變化に伴ふ施設の行はれたことであつて、幕末維新に於ける京都の關した一断面と見てよい。

## 二、御苑

皇居は、現つ御神と天下治しめす吾が大君のとゞまりました所で、一たび御東幸になつても、矢張り皇居としての御意味を失はしめられず、ありし日の結構をそのまゝに保存せられてましますのであつて、従つて凡そ京都に遊ばん者は、先づこゝに參遊してしたしく御正門たる建禮門前に額づき、臣子の至情を申上ぐるのである。此の點曾て寛政の昔

上州の青年高山彦九郎が、三條橋上からでも草莽の微臣正之と聞え上げ奉りしころ、或は安政元年十月長州の青年吉田松陰が建禮門前に拜伏して、「今朝盥嗽して風闕を拜し、野人悲泣して行く能はず」と血涙滂沱たりしころは、常にひとしくこれ我々日本國民全ての心持なのである。

實に皇室に對し奉る時にあつては、吾々日本國民の心には、數千年の年月がない、唯神代そのまゝのまことの心が働くのみであつて、かくして、御所は常に吾が國民の精神的中心として魂の故郷たるの力をもつて、國民團結の中心であり、國力振張の根據地であつたのである。だから維新當時の如き尊皇思想の特に目覺めた時には、一層此所を仰ぐ事は強いものがあつて、それは吾が當面の色々な系累或は地位名譽財産等も擲ち、父母妻子をも離れて馳せ參じて來た所謂志士なるものが多かつた事等に於ても了解し得られるのである。即ち彼等は、全く皇運を啓き奉らんための犠牲となり、王政復古、萬里御拓開の御先鋒たらんことを念願としてゐたのである。そして之は御召しによつて上つて來た諸大名にあつても同様であつた。その一例證として、口繪に示したのは名古屋六十二萬石の藩主徳川大納言慶勝皇居拜禮の圖で、當時扈從した石川信守が描きそれに老臉成瀬正肥が賛したものである。文久三年正月八日、慶勝は朝命により將軍家茂の上洛に先んじて入京するや旅裝をも解かず直ちに皇居建禮門前に到つてかくの如く跪坐遙拜し、それより近衛家の河原邸に入り、衣冠に改めた上參内して天顏に咫尺し奉つたのである。即ち前面にあつて伏拜してゐるのが慶勝で、後方は成瀬正肥、田宮如雲などの近臣であり、如何にも當年上洛した武人の心事をよく思はしめるものである。

建禮門は皇居の正門であらせられるが、その南側には有栖川宮の御邸があつた。當時は今のやうに正南の道路はなく、大宮御所の御前が櫻町といつて道路であつたのである。そして皇居の東側の御道は日の御門通といつた。日の御門は建春門を俗に稱し奉るのである。こゝが皇居東北の角即ち猿ヶ辻まで随分長くて廣いので、文久三年七月三十日も、同八月五日にも、また慶應三年十二月二十七日にも諸隊の訓練を天覽あらせられたところである。即ち第一回のときは孝明天皇が會津藩の馬揃を御覽になり、第二回のときは守護職たる會津藩主松平容保を總大將とし、鳥取、岡山、水戸、津、久留米、宇和島、津山、米澤、福岡、山口、姫路、弘前、松江、豊岡、松山、熊本、廣島、大垣、淀、白川、郡山、庄内、徳島、高松、岡、福山、小田原、佐倉等の諸藩隊が、甲冑、陣羽織といふ扮裝で、半鐘、法螺貝、太鼓の合圖、繰懸け、突貫などいふ動作を演じたのである。第三回は鹿兒島、廣島、山口、高知の四藩の兵隊、それには薩摩の砲隊も加つて、明治天皇の御親覽を忝くしたのである。前二回は文久三年八月十八日の改變の、後一回は鳥羽伏見の戦の直前であることに注意すべきである。

尙この日の御門通りの東側南の端は神祇伯たる白川家の邸宅があつたところ、その北隣は學習院で、弘化四年三月八日開講式が行はれてより以來、公家の學問所として儒書、國典の講義、輪讀、詩文和歌の稽古が行はれたところである。殊に文久二年冬から同三年秋に至る間は、國事掛の政務を執られる役所に充てられたので、眞木保臣、平野國臣、久坂玄瑞等の志士が學習院出仕といふものに任用せられて、晝夜政務について獻替し、かの賀茂、石清水の行幸より、大和行幸の御計畫を中心とした尊皇攘夷運動大車輪の經緯を輔翼し奉つたところである。維新には、こゝに金穀出納所が置かれて、三岡八郎等が鳥羽伏見の砲煙猶消えやらぬ頃から、新政府の財政建設をはじめた苦心の歴史をもつてゐる。

それから北に橋本家、姉小路家等があつたが、橋本家は孝明天皇の御妹、和宮親子内親王が御幼時生母觀行院御方と共に御寄寓あらせられし所であり、姉小路家は公知卿が少壯英發の資を以て國事掛中に重きをなしてゐたが、文久三

年五月二十日の夜、廷議を終りての歸途猿ヶ辻で暴漢に襲はれ、歸宅絶命せられしところ、卿が聰明にして内外の事情にも通曉し居られしこと、且つ 孝明天皇の御信任厚かりしこと、或はその遭難が亦幾多の波瀾を招きたることなどは維新史の重要な一齣をなしてゐるのである。

猿ヶ辻の西から南にかけてはもと御築地がもつと西に連つてゐたのを慶應二年春幕府が御擴張を請ひ奉つて眞直ぐにしたところである。それ以前は姉小路家の北側に有栖川宮の御邸があらせられたのである。また猿ヶ辻北側には南都興福寺一乗院宮の御里坊があり、維新には一時參與役所が置かれた。乃ち草創の諸大事が發案吟味されしところである。その東の方に中山家舊地があり、明治天皇が嘉永五年九月二十二日御降誕、安政三年九月まで御生育遊ばされしことは縷説を要しない。現今猶平屋建の御産屋を保存せられあり、その東にある祐の井は、嘉永六年の大旱に邸内の諸井が涸れたので、朝廷より掘らしめられたもので深さ三丈八尺、清冽混々として湧くので、孝明天皇が 明治天皇の御宮號に因み御命名あらせられしゆかり深き堅井である。

この南側を東にぬける道が石薬師通で、昔は石薬師御門があり、その門外には大久保利通の隠れ屋があつたし、そこから少し西南の寺町通西側には實相院門跡の里坊があつて、岩倉公が慶應三年十二月九日早朝、髻をつけての参内もこゝで装束をしてせられたといふゆかりのところである。寺町通の西にこれも御門外の梨木町があつて東側には大乘院、三寶院の御里坊があつたが西側には南によつて三條家があつた。今別格官幣社梨木神社の鎮座ましますところで御祭神三條實萬公、同實美公御父子の住はせられし邸宅といふだけで足りよう。

さて御苑の北側には今出川御門があるが、その東側は桂御所であつて安政元年の皇居炎上後こゝを假皇居に定めさせ

られて四月十五日聖護院から遷御あらせられ、翌二年十一月十五日、新造内裏に還幸あらせられるまで御駐驛になつたところである。尤も境内御手狭きために西向側の近衛家の寢殿を紫宸殿代として嚴儀には假用あらせられた。

桂御所の西向ひは近衛家の邸址である。攝家の筆頭として采領も二千八百六十石、現公府の曾祖父忠顯公は 孝明天皇の御信任篤かりし方で、御宸翰も夥しく戴いて居られる。中にも安政二年二月十四日、假皇居から内々渡御あらせられて、折節満開の絲櫻を觀そなはしつゝ、御筆を染めさせられた長卷の御和歌や、安政大獄前後國事に關して密かに御下け遊ばされた御消息の如きは讚嘆景仰措く能はざるもののみである。今も幽邃な泉石は昔のまゝの布置で存してゐるし、數株の絲櫻は當年の春を偲ばせて年々匂うてゐる。

この近衛殿の正門は皇居の西北隅の北側にあつた。そしてその西側に乾御門があり、鹿兒島藩が警衛申し上げてゐたのである。

乾御門の南隣、皇居の西向側には一條家邸があり、昭憲皇太后の御生家であらせられる。若江薫子といふ女丈夫が御幼時奉仕申上げたこともよく知れわたつたこと、その南、烏丸通に面したところに施薬院があつて、將軍が参内の節服装を整へたところである。

皇居の西側の御通りには北から御清所御門、公家門がある。公家門は宜秋門と申し上げ公卿武家等が参内のとき出入したところ、その少し北から西、烏丸通に中立賣御門があつた。

皇居南西隅の外に大きな樟の樹があるが、もと清水谷家の邸内にあつたものと聞く。その西に蛤御門、これはもと新在家門と申上げ平常は開いてゐなかつたが、寛文の御火災以後あくやうになつたので蛤御門の名が起つたといふ。元治

元年七月十九日の騷擾で激戦のあつたところである。

清水谷家の西側を南に新在家通があり、西園寺家も之に面してゐた。その南の突き當りは後院であらせられたが文久三年以來中川宮の御殿があらせられた。もとの青蓮院宮、後の久邇宮であらせられる。

その南は下立竇御門、更に南して御苑西南の角は閑院宮様の御邸であらせられた。それから曲つて丸太町を東すると堺町御門があり、その内側に西は九條殿、東は鷹司殿と攝家が相對してあつた。九條家は尙忠公が安政より文久にかけての關白であり、英照皇太后の御生家でもあらせられるので思出が深い。鷹司家は政通公が文政六年三月から安政三年八月まで三十三年間も關白をつとめたといふ英傑であり、その子輔瀨公と共につねに尊攘硬派の中心として獻替された。元治甲子の變には堺町御門も激戦のあつたところで久坂玄瑞なども鷹司邸の湯殿で切腹してゐたのである。

丸太町を東すれば富小路の北突當り西側小路に岩倉邸の門があり、曾て高山彦九郎を庇愛せられし尙具卿、維新の元勳具視公、その御曹子で東山道先鋒總督たられし具定公などを想ふのである。

堺町御門の通りを北すれば、日御門通りに出るのであるが、その通りの皇居に近きあたりを櫻町と言ひ、東側には仙洞御所と大宮御所があられる。寛永年中、後水尾上皇と東福門院の御殿として造營せられ、仙洞の御林泉は一木一石に至るまで意をとめて寄せ奉つたものである。御殿は天明の火災に罹り、寛政二年再造せられたが、天保十一年十一月光格上皇崩御の後は空院となつてゐた處、安政の火災後は造營あらせられぬ。大宮御所も弘化三年六月、光格天皇中宮新清和門院の崩御後は空院で、假に敏宮淑子内親王御所に充てられたこともあるが、安政の火災後は仙洞と同じく外垣の修治をなされるのみであつた。然るに慶應三年には英照皇太后の宮殿を營み奉ることになり、幕府その業を勗めたの

を新政府で引繼がれて、明治二年二月竣工、即ち移御あらせられ、明治五年四月の御東遷に及ばせ給うたのである。今でこそ御苑内は廣い芝生と植木の園になつてゐるが、明治十六七年頃までは尙昔のまゝに公家町が縦横に通じて居り、百餘の邸舎が薨を並べてゐたのである。その門構へ、玄關式臺、間取りの様式、さては庭先き植込まで、すべて特殊の構造をもつた維新前の有様は、今日からはなかく想像しにくいのであるが、然し、それをなさない限り志士の行動も如實に想察することは出来ないのである。

### 三、皇居

皇居は普通御所と申し奉つてゐる御苑内の中央を少し北西に寄つたところに在り、御周圍東西百三十餘間、南北二百四十餘間、南の御正門を建禮門、東に建春門、西に宜秋門、北を朔平門と申す。その御内は紫宸殿、清涼殿、小御所、御學問所、御常御殿等があつて、これで歴代天皇が現御神として天ヶ下を知ろしめし、所、全く尊貴な宮域、神嚴な聖居である。吉野時代以來幾度か御造營の事あらせられたのであるが、永祿十二年の織田信長の修理、天正十八年の豊臣秀吉の造營、慶長十一年の徳川家康の造營、寛政元年の徳川家齊の造營等を経、現在の御規模は安政元年四月六日の災害の後をうけて將軍徳川家定が老中阿部正弘を總裁とし、所司代脇坂安宅、勘定奉行石河政平、川路聖謨、京町奉行淺野長祚を督し、前大納言橋本實久、大納言徳大寺公純、中納言萬里小路正房等を顧問としつゝ、造營し奉り、同二年十一月廿三日遷幸を仰いだところである。其の間に要した工匠の延人員は、百四十萬八千五百五十人、費用は金二十七萬六千二百十三兩三分銀八千五百二十八貫百五十五匁、及び米二萬一千三百九石八斗七升であつた。全體の構造が寢殿造りの

壯重優雅なものであり、高層層々として相連る所如何にも源遠き國體を象徴してゐる。言はゞ文化と精神と歴史と三ツながら包攝發現してゐる建築である。誠にかういふ精神的なものに於て、他の比倫を絶した尊いものがあるものであつて、之を廣袤、堅否、輪奐、裝飾等の點より將軍の居所たる江戸城或はその京都の別館たる二條城と比べると、恐多き事ながら憤慨に堪へぬとして、無限の感懐を含んでゐた國民は累代數知れずあつたのであるけれども、然しながら、また事實に於ては却つてこの質朴古雅な構造と、そこに纏綿する尊貴無比なる傳統とに、金錢威武を絶した崇高なるものが、深く籠りましてあつたのであつて、到底彼れ東瀛等の及ぶところではなかつたのである。そしてこの形を超えた尊榮の瑞雲こそ實に金甌無缺の我が國體に特異なもの具現であることは忘れてはならないのである。

惟ふに、斯の如き超絶無比の精神的あるものこそ日本國體の中核をなすものであり、爰に皇國の元氣、日本の正氣が在るのである。斯る正氣は大和魂と稱すべきものであるが、それは實にこの皇居の御主 孝明天皇に最も鮮かに具體的な顯現をして居られた。かの維新前後國難輻湊上下困惑の最中であつて、我が 孝明天皇のみが前後を見透され、左右を達觀して自ら高く堅座したまひ、以て萬民を率ゐて皇國の進路を正しく御保ち遊ばされたのは、實に斯かる神域に於て神聖の生活をなし給ひ、神智の明境に徹して在したが故であつて、全く歴史の奇蹟である。

孝明天皇は天保二年六月十四日の御降誕で在らせられるから、明治の功臣西郷隆盛には四つ、大久保利通、吉田矩方には一つ、岩倉具視には七つ御年下、木戸孝允には二つ、三條實美には六つ御年上に御座します。天保十一年三月十四日皇太子に立ち給うたが、この年はイギリスの横暴なる東洋侵略によつて阿片戦争が起つた年であり、その前三年即ち天保八年には諸國大饑饉の爲餓李野に満ち、大阪には大鹽平八郎の亂があり、而も支那廣東にあつた米國ヘドソン灣毛皮

會社の汽船モリソン號が、我が港灣開放請願の爲に漂流の同胞七人を連れて我が海邊に來て何處でも打ち攘はれた迄は良いとして、その後になつてさりとら知らず、斯かる船を砲撃する事の不可を論じた渡邊華山、高野長英等の先覺者が幕譴に觸れて御尋者になつた年である。そして越えて四年弘化元年三月 天皇陛下御元服遊ばした年の十二月には學習院が初めて開かれたのであるが、此の頃から外國船の我が邊海に來る度數が急に増え、同三年正月 仁孝天皇崩御によつて 天皇が踐祚遊ばした年の五月には、佛國軍艦が琉球に來て開國を迫り、閏二月には米國東洋艦隊が浦賀に來たのである。この事件は兩ながら今迄に無い重大なものがあつて、當時幕府の祕密外交の際なるに拘らず、天皇は海防の事の重大性と幕府の之に對する善處方とを特に注意する勅諭を賜つたのである。是洵に江戸幕府開設以來例のない事で、其處に御年僅かに十六歳の御幼き 孝明天皇の御政治を窺ひ奉るべき頼母しいものがある。

爾來嘉永、安政、萬延、文久、元治、慶應と御治世二十一年間を通じて、天皇の御宇はまさに困難なる外交問題の連續繼起した時であり、加ふるに内政方面に於ても、徳川幕府の基礎ゆるぎ、その統制力の衰頽に伴つて諸藩先覺者の間に熱烈なる政治運動が起つた。所謂尊皇攘夷のそれであつて一面には幕府を倒して政權を皇室に復し奉り、一面には外國の侮を禦いで皇威を四海に輝かさうといふ目的を以て數百年來の誤れる傳統に對し獅子奮迅の活動をなしたのである。即ちその結果が戊午の大獄より戊辰の戰亂に至るまでの幾多の事件を繼起し、幾百千の有爲な人材が非運に斃る、といふ不幸を見たけれども、之を外國に於ける國家の政治及び社會、經濟等の根本的機構の變改に於ける騷亂と犠牲との甚しきに比すれば殆ど言ふに足らざる少數量を以て果遂し、且つ彼等に就て見る如き大破壊なく、實に驚嘆すべき美しき成果をいたし得たのである。そして此の萬邦無比なる歴史的の經過こそ、申すまでもなく、御踐祚のはじめより國



體の本義に則り、新時代に對處すべき國策について御適切なる皇權の發動をなし給ひし 孝明天皇の御統理、御指導の下に行はれ來つたのである。見よ、嘉永安永以後十數年間に於ける波瀾萬丈、急旋迅回、複雑困難なりし天下の狀勢を。その板蕩の間には一身を處するにさへ人みなが困惑低迷しぬいたときなのである。それに畏い事ながら、直接輦下には尺寸の地、一個の兵戎も帯びさせ給はざりし 天皇が、自らにして、次々に政權兵權を收めたまひ、輦轂の下が事實上に於て現實國政の中心となり、開府以來二百數十年江戸に蟠居し、上洛拜任もなさざりし將軍が、殆ど此地に常在するやうになつたこと、偏にこれ 天皇の御稜威の然らしめるところと仰ぎ奉る外、その解釋をたづぬるに由ないのである。徳富蘇峰氏は、天皇の御聖德を嘆稱して列聖の皇謨を恢弘し、維新中興の大業を開發すと記されたが、まことに然りと仰ぎ奉る次第である。

かくの如くして、京都御所こそは弘化四年九月二十三日には御即位の大禮を擧げさせ給ひしところ、その翌日には御調度陳列のまゝ、一般民庶に紫宸殿御庭の拜觀をゆるされしところ、其後は恒例臨時大小の御儀を行はせられしところとして、我が 孝明天皇が日夜御心を碎きつゝ、大八洲國治らしめし、その御事しけき御苦辛のために御聖躬さへ害はせたまひ、終に慶應二年十二月二十五日には、三十六歳の御壯年を以て神去りましたところである。當時民草は全く天日を失ひたる如き感をいたし、夢の如く現の如き思ひで慟哭悲泣、みあと慕つてやまないものであつた。翌年正月二十七日洛東泉涌寺のうしろなる後月輪東陵に御葬送あらせられたが、爾來參拜の國民日として絶えないのも、偏に御恩德を景仰し奉つてのことである。孝明天皇の御後を御繼ぎ遊ばされたのは 皇太子睦仁親王であらせられた。申すまでもなく明治天皇であらせられる。嘉永五年九月廿二日石薬師御門内北側なる中山殿の御邸で御降誕あらせられたのであるが、

安政三年六月以來宮城に御還啓あらせられて御父 孝明天皇の御膝下に於て御成育遊ばされたのである。洩れ承ると東山御文庫の御中に 明治天皇御幼少の時の御詠草に 孝明天皇が御自ら朱批を加へさせられたのがあらせられるといふ事であるが、洵に 明治天皇は 孝明天皇の御鍾愛措かせられなかつたと承るのであつて、かの偉大な御聖德は全く御父天皇の御氣質を承けさせられ、その御愛育のいたされる所であると洩れ聞くのである。かくて 孝明天皇崩御の後には直に天日嗣の御位を御繼ぎ遊ばされたのであるが、これが御寶算十六歳であらせられて、恰かも父天皇と同じき御年齢で以て御代を繼がせられた事不思議の御縁りとも仰ぎ奉るのである。そして翌慶應三年十月十四日には、將軍徳川慶喜が大政返上の上表を奉り、翌十五日には、是を御嘉納遊ばされ、續いて十二月九日は御學問所に於て復古の大號令を御示し遊ばされ、遠上世以來千有餘年間の久しい歴史がある攝政關白以下を廢し、新に總裁議仗、參與等いふ職任を御設け遊ばされて明治新政の端緒を御開きになつたのである。それから不幸にして翌年正月三日には、城南鳥羽及び伏見方面に於て戰禍を見るに至つたが、御稜威のいたす所、是によつて愈々效驗明かに稜威天下を蔽ふ事になつたのであつて、是が云ふ迄もなく維新運動の完成といふ事になつたのである。そして三月廿一日には關東親征の爲大阪に行幸あらせられ、閏四月七日に御凱旋、越えて八月廿七日には紫宸殿に於て即位の大禮を行はせられたのであるが、この時には親しく億兆と俱に御世を壽ぎ給ふ御志から執翳の女嬪を廢し又厚く皇祖天神に御告げ遊ばされる意味で、神祇官、知事をして御幣を奉らしめ、又國風を學び給ふ御志より帛の御衣を服御まし、四神の旗を幣旗とし壽詞を奏せしめ、且新しく四海に君臨し天の壁立極み、國の退立つ限り治しめす御意味で地象儀を大庭に置かせられたる等、まことに御代革まれる目出度き時に相應はしき尊儀を行はせられた事である。かくて翌九月八日には改元して明治元年とし一世一元

の制を仰せ出された。そして東西一視、萬民撫育の御意味から、同二十日には、御東幸遊ばされ、十月十三日着御、更に十二月廿二日には御還幸あらせられて、廿五日 孝明天皇御一年忌祭を行はせられ、廿八日には一條忠香の第三女藤原美子を皇后に立て給ひ、次いで三月七日には再び御東幸の爲御發轅あらせられ爾來東京に御留まり遊ばしたのであるけれども、尙京都御所は御都であらせられるといふ思召を易へさせられなかつた。かくて維新の功業はこの御所を中心として初めから終りまで推し進め給うたのである。

#### 四、恩賜元離宮二條城

二條城は元離宮であらせられたのを、昭和十四年十月二十五日特別の思召しを以て京都市に下賜あらせられたものである。それ以前は明治六年正月鳥羽伏見の役後朝廷に於て御修工あらせられ、同二十七日には此處を太政官廳代となし給ひ、二月三日には 明治天皇行幸あらせられて關東御親征の大號令を發せしめ給うた。次いで四月には太政官代が、宮中に移されたので兵部省の管轄となつたのであるが、車駕東幸後は留守官の管轄になり、次いで明治四年三月から京都府に引き渡され同年六月二十六日には京都府が此處に移つた。六年二月には、陸軍省の所管となつたが、府廳はそのまゝ、此處にあつたが、十七年七月宮内省の管轄に移され、二條離宮と改稱せられたので、翌年六月には府廳を元の軍務官の舊地に建てられた京都府中學校に移したので、爾來専ら宮内省に於て管理して居られたのである。

この二條城は元々織田信長が造營した二條城の故地であるが慶長七年五月、徳川家康が板倉勝重を奉行として造營に着手し、翌八年三月には家康此處に入つて征夷大將軍拜賀の禮を行つた。爾來將軍の上洛毎に滞在する所となり、中に

も寛永三年九月將軍家光が上洛した際には 後水尾天皇の行幸を仰ぎ奉り、御駐蹕五日に互らせられ、公卿諸侯その儀に陪して、その儀容盛大を極めたものである。又同十一年七月には家光が再度の上洛をしたのであるが、その時には、諸大名に命じて多數の兵士を従へしめ、その數三十萬餘人といふ大勢であつたのでその威容都人士を驚かせ、その盛儀を見んとて近國の士庶群集し、膳所より京迄立錫の餘地なき有様であつたと言はれる。是を最後として爾來將軍の上洛と云ふ事が無くなつたので當城には大番頭四人、番士五十人を置いて留守せしめた。が不要の建物は段々、諸所に移築したのであつたが、その上寛延三年八月二十六日の夜には雷火の爲本丸の天主閣が焼失し、又天明八年正月晦日の所謂團栗火事には本丸の殿舎が焼失したので、爾來二之丸の殿舎のみが當初の豪華な建築を残して徳川家の威光を示して居つたのである。然るにその後時世の一變により京都が政治の中心となるに及んで、文久二年には、勅使を遣はして將軍の上洛を命じ給ふ事あり、その御旨を奉じて、翌文久三年三月には、十四代將軍家茂が、二百二十九年振りを以て上洛参内したのである。即ち將軍は二月十三日、老中水野和泉守以下多數の扈從を従へて江戸を出發、三月四日入洛して當城に入り二之丸に館したのである。そして七日には、是より先入京して居つた後見職一橋中納言以下在京の諸侯を隨へて参内し、傳奏の案内によりて麝香間に入り更に小御所に於て 孝明天皇に拜謁、黄金百枚、白銀三千枚、大和錦五十卷、綿千把、その他の献上をなし、次いで拜謁を給はり且つ是迄の通り征夷將軍の御委任を蒙ると共に君臣の名分を正し、人心の歸向を一にして攘夷の成功を期すべき勅諭を下され、その上天益を賜つたのである。かくて將軍は退下したのであるが、先例により洛中の町總代を奉行所に招かしめ西町奉行瀧川播磨守、東町奉行永井主水正、大目付伊澤美作守等をして、士民一般に銀五千貫目、外に金千兩を送る旨を通達せしめたので總代は有難く拜受し、是を洛中の人家

三萬七千六百四軒に頒つたのである。即ち一戸の割當が一兩五十七文宛であつたといふ事である。

最初將軍の在京は十日の豫定であつたが、御内勅によつて轡下にあつて、攘夷の事を督すべき責任があつたので、歸東の事が出来ず、その間三月十一日には賀茂の行幸、四月十一日には、石清水の行幸があらせられた事は皆人の知る如くである。かくて將軍は四月二十一日には、大阪に下つて攝海の防備を視察し、翌五月二十一日更に上洛、當城に入り十八日參朝奏聞したのであるが、關東に於て老中格小笠原圖書頭が生麥事件償金支拂一件あり、その罪を訊さんとて同二十四日東歸の暇を給はつたのである。是に依つても文久三年は全く朝暮の關係が正しきに復る軌道に於いた時である事が了解出来るのである。

爾來政局の中心は京都に移り、それに隨つて元治元年にも慶應元年にも、即ち毎年將軍は上洛しこの城と大阪城とを去來して朝旨を奉じ攘夷の事に執掌してゐたのである。而も慶應二年七月二十日、家茂將軍が大阪城に於て薨去した後は一橋中納言が徳川宗家を繼いで徳川中納言となり、次いで十五代將軍に任ぜられたのであるが、間もなく、孝明天皇が崩御まじく、爾來政局の逼迫に連れて、殆ど將軍はこの二條城から出る事がなかつたのである。そして慶應三年十月には土佐前藩主山内容堂の勸告により、大政を返上する事になつたのであるが、その事は實に十月四日當城の第二殿老中の間に於いて後藤象次郎が板倉伊賀守に會見した事により、同十三日將軍より在京五十餘藩の重臣を當城の第三殿大廣間に召して親しく意見を徴した事によつて決したのである。そしてこの翌十四日高家大澤右京大夫をして、かの有名な政權奉還の上表を奉る使としてこの城より參内せしめたのである。かつて家康が征夷大將軍に任ぜられたのもこの城であり、今又その子孫が之を拜辭したのもこの城である事に於て特に意味深長なるものを覚えるのである。而してその

翌十五日、かの上表は御嘉納あらせられるが、朝廷に於てその御準備が整はせられる迄、尙前將軍に於て、政務を見るべき事を命ぜられたので、慶喜は引續いてこゝで政治を執り、善後の政務の御諮詢に與つて居つた。併しこの時には、已に討幕の密勅が薩長二藩に下されてゐた時でもあり、是は一旦御停止になつたとはいへ、薩長派ではその議討幕に一決してゐるので、兩者の間の意見は、合すべくもあらず、二條攝政はこの間にあつて、色々苦心されたのであるが、その案も實現すべくもなく、遂に十二月九日に至つて岩倉公を中心とする、薩長討幕派の勢力を背景とする復古大號令の御發布と是による新政府の組織とが出現したのであり、これよりして慶喜は前將軍と稱し、官位を全部拜辭し、且つ、その采邑をも獻上すべき事を命ぜられる事になり、それが色々紛糾して十二日には大阪城に退く事になり、爾來兩者の間に色々な交渉が続いたが、遂に翌年十二月四日から鳥羽伏見の戦となり、賊名を負うて敗走し、次いで征討の軍師を向けられる事になつた事は、こゝに言ふ迄もない。兎角さういふ維新運動の中心的な事件がこの城に於て進行したといふ事に特別な意味を見るべきである。若し夫れ、この殿舎の壯麗、調度の華美、屏障、欄間の彫刻、繪畫、或は林泉の結構等に至つては優に桃山藝術の粹を傳ふるものとして、日本古美術の淵藪の一つである事は更にこの城の價値を高めるものである。

## 五、別格官幣社梨木神社

維新の功臣で別格官幣社に祀られてゐるのは、梨木神社の三條實萬、實美兩公、常盤神社の徳川齊昭、照國神社の島津齊彬、野田神社の毛利敬親、佐賀神社の鍋島直正、山内神社の山内豊信であるが、この中三條兩公は公卿中唯一の御

祭神である。實萬公は實に 孝明天皇の股肱の臣で安政の大獄の前後、内大臣として非常な苦心をなされた方である。大體當時 孝明天皇の御信任の厚かつた卿相は、青蓮院宮尊融法親王と、前關白鷹司政通公、關白九條尙忠公、左大臣近衛忠顯公と公とであつたが、中にも公は、その高邁な識見と深き學殖と圓滿な人格と清廉な節操と兼備はつて朝野一般にも、非常な信用があり、全く以て、當年困難な政局の中心にあり輿論の指導者であつたのである。安政五年二月九日橋本左内が主君春嶽公に送つた報告書の中に、此の頃三條家の者に無二膏の廣告を貼り付け、傍に公家の大出來物と書き付けある由の雜説ある事を傳へてあるが、まことにそれ程立派な方であつたのである。

この貼紙だけでも、公が如何に優れた見識を持つて、輔弼の責に任じ、國民の指導者として、堂々正しき道を歩まれたかが察せられるのであるが、さればこそ、當年の幕府にとつては公の存在は烟たいもの、一つであつた。随つて、安政五年九月から、旋風の如く巻き起つた大疑獄の騒ぎには、公は到底免がれる餘地はなく、只一つに 孝明天皇の申上げるだにも長い御庇護の下にあられたけれども、それも關東の風當りが餘りに強くて同年十二月の二十一日には辭官落飾を請はれて同二十三日には洛南綴喜郡上津屋村に退隱され、翌年五月三日にはここに落飾して淡空と號せられたのである。この上津屋は三條家の采邑で、その郷士伊佐頼母は公の實母の里方の當主であり、且この村の庄屋であつた。今も同家は、儼として存し公の御在した座敷、公より贈られた四足門、公遺愛の老松等があり、室内よりの抜け穴もその儘に残つてある。公は此處にあつても、常に北の方を向いて皇居を拜し、且、眞近なる石清水八幡にも祈請を籠めて、皇運の隆昌と國家の繁榮とを念ぜられた。この幽居中御子の實美公は屢々書を寄せて御父君を慰問すると共に京都及び關東の狀勢を巨細報告して居られたが、中にも、三月三日の書中には此頃段々公卿の作法の研究を致し居る事を陳べら

れ、それについては、孝悌忠信、修身積徳は根本の行であつて、特に摺紳家としては有職學が第一であつて、これには家風を墜さざる様心掛ける事と、第二には文學、これには、菅公を手本として、作文に力を注ぐ事、第三は和歌、第四は筆道、この外、諸作法、管絃等にも及ぶ積りであるが、如何にあるべきやと批判を求めてゐられる。まことに、御父子の間、羨ましき程の尊き、御なからひであつた。

然るに、この上津屋は當時木津川の氾濫改修が出来てないので、巨椋池廣く潤し、その爲め土地低濕にして健康に良くないところから、將來の出水を慮り、三月二十七日には、洛北愛宕郡一乗寺村なる曼殊院の寺侍渡部仲助の家を借りて移られた。渡部家は先祖宮内大輔唱が、足利將軍義晴に仕へ爾來一乗寺城を主として慶長に及んだが、關ヶ原役に西軍に與してから、逼塞して農に歸してゐたのである。公はこの家の六疊二間に住まはれ只管謹愼して居られたが八月十二日になつて、腹瀉を患はれた。當時、コレリ病流行の際とて、早速醫師伊佐左右二を呼んで、格別な事は無く食當りといふ事であつた。かくてこの病は一應良くなされたやうである。所が渡部家の系圖によると、仲助はこの年九月一日に歿して居る。尙又、俗間傳ふる所では、九月二十六日になつて公が隣家の渡部喜左衛門の來訪を受け、平常の如く世間話をして居られると、いづれよりか、菓子を送られて來たので、喜左衛門にも分たれた。同人は歸宅後之を喫して間もなく中毒を起して死んだが、公も同夜二時頃から、下痢を患はれて、六時頃迄に五六度あり、それより十二時頃迄に四五度、六時頃粥を半椀上られたのみで、彌々午後八時頃には、その夜が六ヶ敷く見えた。當時、御典醫中山攝津守、高橋安藝守等が診察してゐたので、直ちに本宅に知らせ御簾中様、實美公達も二十七日には馳せ付けて、看護せられた。然るに病狀思はしくなく、十月三日には醫師上田玄仲の勧めによつて、本邸に歸られる事になり、同夜丑の刻、近習兩人

醫師一人附添うて歸邸された。十月六日午前六時、五十八歳を以て薨去、曉雲院と謚されたといふ事になつてゐるけれども、實はかの時すでに大切の場合にあられたと思はれる。孝明天皇は公の病篤き事を聞召され、寢食も安んぜられず、十月四日には、三條西季知卿を遣はされて、謹慎を解くの内旨を傳へられ、更に五日には中御門經之卿を遣はして従一位宣下の仰せ出されあり、殊にその計を聞召さるるや三日間の廢朝を仰せ出されたのである。まことに忠誠の志、深く天意にかけさせ給ひし御事と仰ぐだに畏れ多く感じ奉る次第である。

## 六、靈山護國神社

現下の時勢は全く第二維新の進行中である。それは外に大東亞の興隆建設、世界の新秩序確立といふ世界史的大事業に努力奮闘し居ること、内には之に即應する新體制の建設を着々成しつゝあるのもわかるが、同時にそれに在りてゐる我々國民同胞の心持から、必然的に靈山招魂社が京都靈山護國神社と改稱せられ、社殿が新に成り新參道が出来たことは、いかにも此の國民思想興隆期を彩る一史事としてよろこばしい事である。明治の初め今井似幽はこゝに往年の知己であつた志士達の墓を展し、

嬉しやと暑さ忘れて手向水

と衷情を歌つたが、我等亦この新らしき社殿に頼つき、その後の山なる墓石の苔を掃ふ毎に、新たなる感激を覚え感謝報效の志をいよく堅ふする次第である。

靈山は三十六峯の中央に位し、山容秀美眺望絶佳で、靈鷲山になぞらへる迄もなく、神氣充滿せる所である。夙に

宇多天皇勅願の正法寺があり、後時宗國阿派の本山として餘り振ひもせずにつづいてゐるが、文久の頃その境内に靈明社なる神道講社の齋場あり、文久二年長藩の志士船越清藏をこゝに葬つてから段々志士の墳墓の地となり、慶應三年十一月十六日坂本龍馬・中岡慎太郎二士が非命に斃れたのを、同志集つてこゝに葬り、木戸孝允が涙を揮つて墓表に題してから一層志士と離れられぬ所になつた。回天の偉業成つた明治元年五月十日には、太政官から御布告があつて、その一は、大政御一新之折柄、賞罰を正し節義を表し、人心を興起遊ばされたく、既に豊太閣楠中將の精忠を御追賞仰せ出されたが、癸丑(嘉永六年)以來唱義盡忠天下に魁して國事に斃れ候諸士及び草莽有志の輩は、親子の恩愛を捨て、世襲の祿に離れ掃風沐雨四方に潜行して、而も冤枉罹禍、且つ湮滅の悲運に沈んでゐる者少からざる次第で、甚に嘆き思食される次第である。仍てその志操を天下に表し、忠魂を慰められたく、東山の佳域に祠宇を設け、右等の靈魂を合祠あらせられるから、天下の衆庶も益々節義を尙び奮勵致すやうにせよ。

といふ思召であり、その二は、

當春伏見戰爭以來引續き東征各地の討伐に於て忠奮戦死したる者は、日夜山川を跋涉し、風雨に暴露し、千辛萬苦邦家のため殞命したものであるから深く不便に思召される。最も其の忠敢義烈は士道の標準であるから、此度東山に新に一社を御建立、永くその靈魂を祭るやうに仰出された。尙向後王事に身を殲し候輩も、速に合祠あらせらるゝから、天下一同此旨を奉戴して、益々忠勤を抽てよ。且又戦死の者等、その藩主に於ても厚く御趣意を影認し奉るべし。

といふ御教旨であつた。鴻恩まことに畏い次第と申すべく、更に同月二十四日には、戊午(安政五年)以來國難に殉じ候靈魂

の祭祀をあらせらるべく兼て仰せ出されてあるが、今般差掛り當正月以來朝命を奉じ戦死した者の祭奠を仰出されたから、藩々に於て一々取調べ来る六月十日までに死亡の月日姓名を神祇官に差出せといふ御達があつた。之と並んで江戸なる鎮將府では六月二日巳刻、千代田城内大廣間に於て兩野、房總、甲武、奥州諸國にて戦死した英靈の招魂祭を行つてゐる。

京都では御聖旨に基き七月に山口藩が招魂社を建てたのを手始めに福岡、高知、熊本、鳥取、久留米藩等も次ぎ／＼に靈山に招魂社を建設し、鹿兒島藩は東福寺即成院の墓地、相國寺林光院墓地に、佐土原藩は大雲院に戦死者墓碑を建て、祭典を營んだ。二年六月には東京に靖國神社を造營になつたので京都に於ける神祇官の祭典は實現せらるゝに至らずして終つたが、然し明治九年には木戸内閣顧問首唱の下に横村京都府知事、谷鐵臣、山中献などが幹旋して、養正社を起し、資金を募つて境域を擴め戊午以來殉難志士の墓も修理し、且つ社殿も改築して大政返上の記念日たる十月十四日を卜して一大祭典を行つた。爾來官祭招魂社として、明治十三年七月には御内帑金も下し賜ひ、且つ有栖川宮殿下額、三條太政大臣撰文の表忠碑をも建設せしめ給うた。昭和四年に至り御大典の御建物であつた大嘗宮齋庫を下賜あらせられたが、十二年には前記鹿兒島藩士等の英靈と、明治七年佐賀役以後國難に殉せし英靈とを合祀して京都靈山護國神社を造營することとなり、官民一致赤誠を捧げた結果十四年四月三十日にはその合祀祭が執り行はれたのである。維新の鴻業を翼賛し奉つた精神はかくして永久に新しく生きて國家の元氣として發現して行くのである。

### 七、城東練兵場跡・梁川星巖邸址

御所から東に向ふと清和門を出でて府立病院に突き當る。舊幕時代輪王寺宮の御里坊のあつたところを大部の敷地とし、南方の一部分は正親町家の屋敷などであつた。この正親町邸に於て天保二年六月十四日 孝明天皇が御降誕あらせられたのである。これから南にゆき、東に折れると荒神橋を渡る。この橋は一に勤王橋とも云ひ、慶應元年閏五月から同三年十月迄三年の月日を費して西本願寺が架けたものであつて、今にもその橋欄の擬寶珠には西本願寺前大僧正光澤が勅を奉じて新に架したといふ旨が彫り込んである。蓋し元治甲子の兵戦は、一旦宮闕に事ある際に鳳輦を河東に移し奉る可き道がないことが分つて、その必要を感じらるゝの餘り、賀陽宮朝彦親王から西本願寺に勤めて勤皇の誠を盡させられたものであつて、當時三條大橋以北に於ける唯一の橋らしい橋であつた。西本願寺も進んでこれに努め、日々工匠六百餘人を使役し、五萬兩の大金を費し、慶應三年十月十五日渡初の式を擧げた。而も、その後も修繕管理など皆その負擔であつたので、番所を置いてゐたのであるが、明治三年正月官に於てこれを引繼いだ。

この橋の東詰に今京都織物會社があるが、これは明治二十年に建つた歴史のもの、然しその前明治五年にはこれから南、今の大學病院眼科病室の敷地にかけて京都府が牧畜場を開き、アメリカから乳牛四十餘頭、豚、緬羊などを輸入して牛乳を搾つたりバターを造つたりしたものである。勿論成功はしなかつた。だがその又以前には會津藩の訓練場があつたのであつて、ダンブクロの異様な輕裝に獨逸から買入れた銃をかついでピーヒョロドン／＼と洋式の練兵をして居つた。鳥羽伏見の戦争後は勿論朝廷に御取上げになり、軍務官の御操練場と云つてをつた。その明治政府は吉野朝の

忠臣楠木正成公の英靈を慰むることが第一に必要と思つてゐたので、何にも先づて四月二十一日には神號の追諡と社壇の造營を御沙汰あらせられたが、五月二十五日の戦死忌日には、盛大な追悼の祭典を行はれた。當日は假に設けられた神座で辰刻より祭典が執行はれたが、諸官員は申刻迄に参拜せよ諸人も拜禮を許す、且つ有志の輩は詩歌を獻供すべく、諸兵隊の操練も神覽に供へてよろしいといふことであつたから、諸藩の兵隊がその技を競ふたのであつた。この日福井碩人は伊勢神戸藩の公議人として参拜したのであるが、その追薦の詩が鹿川詩鈔にある。

勤王唱義草莽起 誓不靖難死何已  
湊川杳々去不還 闔門空爲忠義鬼  
五月念五鴨水東 特詔賜祭中將公  
諸臣拜謁賜福酒 淬礪滿朝報國忠  
四海多難未收戰 或恐將士惑順逆  
以公標準示人臣 卽是方今第一策

之によつて當時の國內狀勢と此祭典を仰せ出された御趣意をも察し奉ることが出来る。

かく順逆の道理を明にし、忠臣を表旌することは御新政當初の急務であつた。同七月二十三日またこゝで行はせられた護良親王の御祭典も同様なことであり、この時も各官より諸人に至る迄参拜し、諸藩の練兵、詩歌の獻供も許されたのである。同じく、福井鹿川の恭賦、

忍見皇道日陵夷 起抛袈裟換鐵衣

大慾授首何容易 鑿與再還舊禁闈  
恢復雖成鬼豈在 眼光射鬼々膽潰  
鬼毒先機却中人 身墜黯々土窟中  
浮雲蔽日不通光 取此忠良饒豺狼  
熱血未冷世又亂 竟令志士蓄憾長  
慶應四稔七月秋 勅祭慰勲薦庶羞  
嗚呼英靈有知目應嘆 皇風吹遍大八洲

なか／＼よく出来てゐて玉韻心懐に迫る感があるが、これはやはり鹿川が青春慷慨の義氣に燃えてゐたからであらう。戊辰の時勢に活動したらん者はすべてこんな頼母しい心根と氣分とを持つてゐた。

これから南すると左側に梁川星巖の寓址があり、頼山陽の山紫水明處と京都府教育會の建物を越し鴨川を隔て、相對してゐる。山陽がその椽大の筆を以て天下の正氣を鼓舞し、尊皇の思想澎湃として興起する世運を啓くに功績のあつたことは言ふまでもない。彼は天保三年九月、五十三歳を以て歿したけれども、その心血を傾けた日本外史、日本政記、山陽詩鈔等は、後年尊皇運動に従事した青年達に金科玉條として愛誦されたものである。また彼の遺子三樹三郎(字は子春、鴨崖と號す)は最もよく父の性質を稟け、儒敏顯剛、夙に詩書を以て一家をなし、兄支峰と共に山紫水明處で塾生に教へてゐる傍ら文林に締交し容易に人に下らなかつた。早くから國家を以て念とし、特に海防に關心して足跡天下に普く、曾て蝦夷松前で松浦武四郎と邂逅したときには、一日一百韻の戲遊を試み、詞林の佳話として傳へられた。

嘉永六年以後、海内騷然となり出してからは星巖、雲濱等の先輩と往來し、青蓮院宮の知を辱ふして大にはたらい。殊に當時物價日に騰貴し京都は消費地なるを以て、先づ同志豪商等に謀り、貯米三萬石を蓄へて緩急に備ふべしとの意見を出し、奔走畫策したが、雲濱が物産開き方云々を以て遠く長州までも出掛けたこと、言ひ、蓋し此等の人々の間には深く考へるところがあつたのであらう。

而してさういふ志士運動の中心人物は梁川星巖であつた。彼は濃州大垣在會根村の出身、寛政元年の生れであるから安政五年は七十歳、その詩壇に於ける實力と聲望、卓犖高邁な識見と悲歎慷慨の氣象、そしてまた夙に頼山陽、藤田東湖、佐久間象山、春日潜庵等の志士先覺者と交り、知恩院宮尊超法親王、青蓮院宮尊融法親王、水戸侯齊昭等の知遇を得てゐた威重とで、自らにして當年尊皇運動の中心者たる位置に推され、梅田雲濱、頼鴨匡、宇田栗園、鶴飼吉左衛門、吉田松陰などみなその周圍に集つて畫策したのである。

彼は元來江湖に風詠する騷人である。その半生は遊歴の裡に過したといつてよい。江戸王池吟社時代の十五年については最後の京都住ひが十二年で長かつた。その十二年間にも五ヶ所宅をかへたが、嘉永二年九月から安政四年十月までは川端丸太町上ル處に居り鴨沂小隱と扁し、次には水西三本木に移つて老龍庵と名づけてゐた。此の二ヶ所が神州正氣の叢窟、横井小楠は嘉永四年に、吉田松陰は同六年に訪問したのであるが、安政年間になると齋藤拙堂、僧月性、西郷隆盛、宮部鼎藏、久坂玄瑞、藤森天山、藤本鐵石なども訪ねたのである。安政四年二月十一日と思はれるが、彼が大垣藩老小原鐵心に贈つた書翰の一節に、「扱比來八方騷然、九州四國の士人往來の次に皆々立寄り、風説も承り候に、諸藩共に人物稀少に候、肥、薩及佐賀、柳川、長州萩、越前福井、小藩ながら大野、綾部等は何分籌策豫め備具候と。尊

藩の火器西洋法に決定の趣承り先々安堵仕候」とあり、彼が全國諸藩の情報を詳にし居れることと、その外寇に心を勞し居れる姿を髣髴することが出来る。まことに彼は單なる尊皇家ではない。愛國の至情に燃え、その方策については開明せる見識を持つ丈夫であつた。即ち安政三年秋、齋藤拙堂が來たときには、之を京都所司代脇坂淡路守の役宅に誘行して、一夕大に海防談をやらせたのである。

さういふところに安政五年の騷ぎである。彼が如何に重要な存在であつたか。それは同年五月十六日には長州萩に幽居中の吉田松陰が、憂憤やみ難く、その門弟を上げて、對策、愚論を、續いて六月七日には續愚論を送り、「何卒密に青雲遼廓之上に達し候様御處置被下間敷哉」とたのんだこと、而して此事の叶ひしを聞くや、松陰感激の餘り、たゞに死して悔なきとのみ言はんや、兒何ぞ死することの晩きと記した一事のみでもわかる。

かくの如き高貴なるあたりに辱くせる彼の信用はその藝苑に於ける長き教導生活より來たものであつて、之は幕府方にも同様なものがあつた。彼の水戸への密勅の如きも信州松本生れの畫家山本貞一郎が浮田一蕙と知あることに最初の關涉はるのであるが、此の山本は水戸侯齊昭の知遇を得て居り、星巖とも容易に志氣相許せるものであつたがためにあんな大事業を實現に至らしめ得たのである。之と異り、その效はなかつたとは言へ、間部下總守が京都壓迫に上洛する由を聞き、星巖憂憤にたへず漫言二十五篇に詩二十首を副へて諷したといふのも矢張りその實録を示すことである。

小籌大策漫紛々 一舉誰能掃海氛

聖慮焦思無晝夜 微臣爭不效忠勤

莫援承久元弘例 事體方今迥不同



皇上只要殲海怪 未嘗一刻外關東  
 當年乃祖氣憑陵 叱咤風雲捲地興  
 今日不能除外讐 征夷二字是虛稱  
 まことや、彼は全心全靈國家の禍害を念とし、聖躬の安泰をこれ祈つてゐたのである。此頃恰もその七十誕辰にあたる。門弟等古稀を壽せんことを圖りしに、「爲憶大君宵肝勞」云々といふ詩を示して之を斷つたが、そこにいよく忠魂の呈露せるを見るのである。

ところがその間部がまだ中山道を上りつゝある時に彼は流行のコロリにかゝつて九月二日には奄かに歿した。そしてその葬式をはからんため七日諸門弟が集つてゐると雲濱が捕へられたといふ噂が傳はつたのである。

雲濱の逮捕を手始めに關東の暴虐は逞しくなる。同十六日には鴨崖も捕へられた。つゞいて鶴飼幸吉、小林良典、兼田伊織、池内大學、宇喜田一蕙、三國大學、六物空滿など數十人六角の牢屋敷に入れられ、十二月五日には地下官人は網乗物にて、處士は鴨籠にて十一人、數十人の與力同心に警固され江戸に下つたのである。此行辛酸を嘗めたるが、志士の意氣屈せず、函嶺を越ゆる時鴨崖の高らかに吟ずるを聞く。

當年意氣欲凌雲 快馬東馳不見山  
 今日危途春雨冷 檻車搖夢度函嶺

十九日江戸につくと榊原家、阿部家、前田家等にあづけられ、翌安政六年十月裁斷があつて、三樹三郎は同七日斬られたのである。年三十五、絶命の詩あり、涙なくしては誦せられぬ。

排空手欲掃妖熒 失脚墮來江戸城  
 井底痴蛙過憂慮 天邊大月缺高明  
 身隨湯鏝家無信 夢斬鯨鯢劍有聲  
 風雨他年苔石面 誰題日本古狂生

### 八、一橋中納言館址東本願寺

今日我々は鐵路又は電車によつて京都に遣入るが、京阪電車は大正年間以來の事であり、鐵道も亦京都大阪間に營業を初めたのが明治九年九月五日、神戸間の開通式は十年二月五日行幸を仰いで擧げられた。その以前は、今の京都驛邊一面の大根島で、南の端には天正の昔、豊太閤が造つた都の外廓即ち御土居が所々壞されながら殘骸を存してをつた。そして先にも述べし如く、京に入るには東は三條街道から、西山陰街道は桂の大橋からし、南は西國街道といふのが山崎から久世の大橋を渡り四ツ塚で御土居を越え、大阪街道は八幡から淀の大橋小橋を渡つて納所、下鳥羽、上鳥羽を経て同じく四ツ塚に入る。四ツ塚は古平安京の南大門であつた羅城門の故址である。勿論朱雀大路の遺れた後世では、それから東して八十餘尺の五重の塔で名高い東寺の練塀に沿うて北に曲つて西本願寺のある七條大宮に出て山陰街道と合するのである。この邊が御一新前の西の京で矢張り畑の中に御土居の跡が斷續してゐたもの、大宮通を北し、三條で少し西に折れて今一つ西の千本通即ち古の朱雀大路の筋を北すれば、二條城の西側を経て所司代屋敷に續く。まことに徳川氏は京の正面通の奥座敷に本店を持つてゐたのである。

然しそれだけ此の道は凡そ朝廷に心を運ぶ人達には、思入れの悪いものであつた。それで御所に直通するもつと東の道を好むのであつたが、それは淀から伏見の南邊三栖から北して東竹田を經、勸進橋を渡つて東本願寺の傍東洞院通に出る竹田街道と、宇治から六地藏、深草を通る大和大路を三條大橋の東詰まで上る二徑路によるのであつた。そして所謂伏見の三十石船が盛に用ひられた當時には最もこの二つが繁昌したのである。尙貨物類は三栖から高瀬川を廻り七條大橋の西詰近くから御土居の東側を北して木屋町二條の角倉屋敷まで溯つて居つた。現在内濱停留場の邊は、此の高瀬川の溜りがあつて舟や筏が並び居り、町名も材木屋町といふのであつた。

さて停車場に降りると、こゝは烏丸通の南端で、北すれば因幡薬師を經て御所の西側に直通する。今日は京都の中央大通で行幸啓以下の大事な道であるから幅員も廣く、店舗も宏壯なものが連つてゐるが、鐵道開通以前は寺町、新町、大宮通に及ばぬ通りであつたのである。

その京都驛に近く烏丸通に沿つてゐるのが東本願寺、あれは安政五年六月四日、元治元年七月二十日と幕末に二度も焼亡し、現在のは明治廿二年に出来上つた大伽藍である。その東本願寺は傳統的に徳川氏と好いと云ふので、明治元年正月にも誤解を受け、將に砲火に暴されんとしたのを山階宮見親王の御注意があつて勤皇の素心を申開きした爲、事無きを得たといふ歴史をもつ。一體京都の諸大寺は幕末には諸大名屯所に借られたり、志士の庇護をしたりして勤皇運動に貢献し、維新には献金米の勳獎、さては征東軍に附屬して關東、北越、奥羽地方の民心の誘導、乃至は政府の御趣意の普及貫徹に懸命の御奉公をしたのであるが、その内に東本願寺内庭が文久三年春と秋とに將軍後見職一橋中納言慶喜の旅館となり、その東方の高倉學寮が將軍後見職松平大藏大輔慶永の旅館となつてゐた事は、當年の政局の進行の上に

巨大な足跡を した事になるのである。

それは特に文久三年二月十一日深更攘夷の期限を即答せよと命ぜられた勅使一件であり、之は幕閣が已むなく、只今上洛途上にある將軍が、着京参内して歸東した後、二十日を限つて實行仕ると奉答した爲に、徳川氏の運命が窮まるに至る大事件の原因をなしたといふ意義ある出来事なのである。

今それを説明すると文久二年四月、島津久光が上洛し、五月廿二日勅使を奉じて關東に下つてから、天下の形勢全く一變して朝廷が非常な鋭幕を以て關東に臨む形勢が開けた。而もこの薩藩の活動に刺戟された長州藩が、八月には長州藩世嗣定廣が追加の勅使を奉じて更に江戸に下るといふのみならず、十月には従來の慣例である年頭の御祝儀が延びくゞであつたのと、去年御成婚の大禮を濟ませられた和宮親子内親王の御祝儀の爲に勅使として坊城大納言が下る事に定つて居つたのを、九月廿五日には急にその出發の事を止めて攘夷の事を督促する爲轉法輪三位中將と、姉小路侍従とを遣すといふ別勅使の仰出されがあつた翌十月十二日には、土佐藩主山内豊範護衛の下に京都を出發して同廿八日江戸に着いた。この使非常な強硬な態度で幕府に臨み、先づその待遇の問題から従來の勅使と色々異つた優遇の方法を講ぜしめ、以て君臣本來の分を正し、朝威を回復した事に於て有名である。之からといふものは全く朝廷が幕府の上に位して天下政權の中心になつたといふ點に於てこの年は大いに意味がある。

將軍の上洛は大原勅使の達した使命に依つて幕府が御請けしたのであるが、今度は彌々是を催促し、従つて將軍は翌年暮には早々入洛する事に定つた。依つて幕府はその準備として色々な事、例へば先づ京都の治安を確立し、幕威を立てる爲、ル司代の上に守護職を置く事にして松平容保を之に任じ、肥後守は十二月九日澤山の部下を隨へて江戸を發せ

四日着京し、翌文久三年正月二日には初めて参内したのである。又將軍の後見職一橋慶喜は、同五日入朝し、十日に参内した。つゞいて幕府の總裁職たる福井の松平慶永も二月四日入京した。而もこの頃は朝廷に於ても、幕府を通じてではあるが強藩を御召しになつてゐたので、熊本、宇和島、徳島、岡山、鳥取、津和野、名古屋、米澤、松江、久保田の藩主等が京都に集つて居つた。

だから京都の寺々は大方之等諸藩主に借りられ、市内の借家は馳せ集つた志士、浪人、神官、國學者等の借りる所となり、京都は時ならぬ繁榮を來して賑やかな事であつた。併しこの志士、浪人等は、朝議を一變させて幕府に高壓的に臨ませる原動となつただけであつて、非常な劍幕で直接行動に出で、一面には弱腰の公卿を督勵し、一面には奸物の稱ある公卿、或はその諸大夫、雜掌等を誅戮し、又市内の幕府方に通ずる御用商人、或は目明し、同心等を捕へて盛に攘夷の空氣を作る事に狂奔して居つたので、京都の町は毎日磔付が絶えず、物騒千萬な事であつた。然しこれ等尊攘運動の中心となつて居たのは殆ど土佐、長州及び肥後の武士である。久坂義助、伊藤俊輔、武市半平太、小南五郎衛門、土方楠右衛門、轟武兵衛はその中心者であり、是等の人々が表口からは鷹司關白、三條正親町實愛、姉小路公知等の長州派の公卿に遊説して朝議を尊皇攘夷の方に引き付けんとし、非常な成功ををさめて居つた。従つて朝廷の態度も非常に強硬になつてゐたのであるが、將軍の上洛に就いて京都に上つてゐる有力なる諸侯からいへば、何としても天下を靜謐にし、以て關東を安全に保つ事が第一なのであつて、かゝる過激粗暴な事には苦り切つて居つた。而も正月廿二日大阪に於て池内大學が殺されたのであるが、廿四日にはその左右の耳を正親町三條大納言と中山大納言の邸に投げ入れて、兩卿が岩倉、千種二卿と同心して朝威を傷けた罪を擧げ、直ちに議奏の職を辭すべしと脅迫したので、廿七日には兩卿は

この職を罷めた。その翌廿八日には千種家の雜掌賀川肇の屋敷を襲つて之を切り、二月一日の夜にはその兩腕を千種家と岩倉家とに投げ込んだ。且又賀川の首は後見職たる慶喜公の館した東本願寺内庭の前に曝し、之には小笠原圖書頭等に宛てたる一書を添へてあつた。かくして志士浪人の眼中には更に幕威無く、遂には將軍の上洛を途中に邀撃して是を暗殺せんとする謀計迄廻らし、その事が出来ないと、二月廿二日の夜には等持院にある足利三代の首を切つて來て三條河原に曝し、それには、この者共名分をあまり政治を紊した張本であるから今天誅を加へるが、現今之よりも甚しき者があるから、是を同様の罪に問ふのであるといふ意味の貼紙をする迄に到つた。正に天下の政治は此等の人達の主張する通に動かざるを得ないといふやうな時勢であつた。

然しかういふ朝議確立の爲の直接行動は、幕威が尙三百年の餘光未だ消えぬ際であるから一般民衆は先づ眉をひそめたものである。従つて幕府も攘夷は成算なきものとして反對であり、公武一和の方針の下に穩和方針を執つてゐたので、志士浪人の人等は之を切崩す爲に非常な運動をやつたのである。二月七日土佐藩士武市半平太等が容堂侯の館前に橋村惣助の首を風呂敷に包んで投入した如き此であり、これによつて後見職一橋中納言は松平容保、山内容堂と總裁職松平慶永の居つた高倉學寮に鳩つて緊急會議を開いたのである。この日正親町實徳、姉小路公知以下十二人の少壯公卿等が突如參朝して鷹司關白に幕府が攘夷の勅命を奉ずるといひ乍ら未だ實行せざるを責めて速にその期限を定むべき事を要求したので、鷹司關白は急に使を遣して速に攘夷の期限を定めて奏聞せよと命じたからである。

この會議の結果、後見職からは近く將軍上洛するを以つてその歸東後これを決行すべき事を答へたのであるが、翌八日には更に關白から將軍歸東の日を定めても、若し之が延引せばその日不定なりと云ふ故を以て、確實に何月何日と定

むべしと告げしめたのである。そして二月十一日の夕方になると急に三條實美、姉小路公知等九人の公卿が駕を連ねて東本願寺内庭なる一橋中納言の館に到り、即刻攘夷の期限を定むべしといふ勅命を傳宣した。まことに異例の御重命である。従つて後見職は急騎を馳せて總裁職、守護職及び山内顧問を招いて協議し、時日を確定奉答する事は將軍來着の後にあらずれば出来難しと申出たが、勅使の態度甚だ強硬にして遁るゝに由なく、遂に將軍の在京を十日とし、その東下は海路によつて十日を要すと見、従つて將軍上洛より廿日後には必ず攘夷を斷行すべしと云ふ事を奉答して事おさまつた。この間の密議應接實に十餘時間、勅使の退出は翌十二日の曉に及んで居たのである。

これ實に轟武兵衛、久坂義助、寺島忠三郎が前日關白卿に攘夷即行を建白する爲に推參し、その議容れられずんば、恐れながら此の席を汚さんと熱心に嘆願したのに基いたことであり、かくして志士、浪人の意見が直接に朝議を動かすそれが又後見職の速答を求めて天下の形勢を導いて行つたのである。そしてこの東本願寺の旅館に於ける幕府の攘夷速行の奉答は實に之から後の國政の方向を決定し、其が將軍の上洛と共に賀茂、石清水の行幸、攘夷の發令となつて色々な事件の基となるのである。それ程色々な意味をもつ政局展開の一要機をなす事件である。

## 九、妙 法 院

京都驛から北し、烏丸七條を東すれば七條大橋に出る。此の七條通りも近年取り擴げたのであり、橋も亦昔はあんなものではなかつた。ことに以前は橋から南は紀伊郡、東は愛宕郡で共に洛外となつてゐた。然し法性寺や清水寺、祇園、大谷など古來その山容水態は十分に利用されてゐたのであつて、むしろ京都文化の淵藪であつたのである。

さて此の東山史蹟帯の踏出しは三十三間堂であるが、之は遠く鳥羽法皇の得長壽院に起り、後白河法皇の仙洞なりし法住寺殿中の蓮華王院の俗稱である。三十三間といつてもそれは柱の間の數で實際は六十六間餘の長さ、そして國寶の諸佛が千餘體安置せられてあるが、近世の武人にはその裏庭の弓場や、或は前側にある養源院の血天井が聞えて居り、通矢を射る者も多かつたのである。

そして之は大體次の様な理由に基くのである。即ち維新前後の士人には、凡そ豐臣氏の悲惨な最後は、全く特殊な感情を伴つて悲憤慷慨されてゐたといふ一事である。だからこの邊一帯が豐國廟の廓内であつたといふことが、維新史の進行に特別の關係を持つたのである。尤も、當時は、今の智積院と妙法院の間から登る太閤墓所への參道はなく、また西隣の豐國神社もなく、阿彌陀ヶ峯の西麓は太閤垣といふ叢、博物館からその北隣は大佛境内の荒地であつたのである。その由來を見んに、秀吉は生前その長男の棄君が亡くなつた時に、阿彌陀ヶ峯の西の麓に祥雲寺を營み、妙心寺の南化玄興を請じて住せしめた。その祥雲寺は殿堂の壯麗、什物の豊富、まことに太閤の心願を髣髴させたもので、今日國寶となつてゐる智積院の襖繪などもその遺品でないかと思はれるのである。

その以前秀吉は方廣寺大佛を營み、その境内は今の方廣寺から博物館の處に及んで居つた。また太閤薨去後には遺命によつて奥津城を阿彌陀ヶ峯に定め、その麓に豐國神社の造營を願ひ奉つて吉田家出の神龍院梵昇を神宮寺の社僧に萩原兼從を祠官にして大和大路以東一帯三十萬坪の大神苑をなして居つた。だから此邊は太閤恩顧の諸將が拜禮懷舊の情を寄せてゐたところで、毎年八月十八日の祭禮には勅使の參向があつて盛大を極めたものである。然しこの地所に非常な變動が來た。先づ大阪冬夏の陣が此の方廣寺の鐘の銘をきつかけにしたことは言ふまでもない事。そして豐臣氏が亡

びると豊國廟は破却し、神職はすべて放つた。神宮寺も取毀つ方針であつたが、折から家康によつて紀州から京都に移つてゐた根來衆徒の請によつて、かの祥雲寺を興へ智積院と改稱せしめたのである。尤も勅願による正一位豊國大明神の御神體はさすがに棄てかねて大佛廻廊裏に小祠をたて、方廣寺の鎮守とした。そして妙法院門跡に千石を加増して方廣寺の住持を兼ねしめたが大佛も寛文二年には壞ちて銅錢とし、鐘は懸けさせなかつた有様では、勿論かの祠も壞廢に任せてあつたのである。

かゝる壓迫はまだ廣く及んで、終には妙法院をして阿彌陀ヶ峯の通路を塞がしめ、且つ太閤墓所へ詣る僧侶大名等には非常な迫害を加へたが、後にはもつと進んで、當時智積院の東南今の美術學校の所にあつた新日吉神社を、阿彌陀ヶ峯西麓の正面に移して、太閤墓所が全く見えないやうにしてつたのである。だから墓所は荒れ、廟址は狐狸の栖處となつて、曼陀羅泉といふ關伽井や諸堂址の敗礎破瓦が、密林深叢の中に徒らに當年の宏壯を偲ばせるのみであつたのである。

徳川幕府はかうして國民の感情を曲げ矯めようとしたが、そんなことは終には成功すべきものでない。否かへつて豊公追慕の心を増さしめた傾があつて、現に御所の中にも太閤を祭らせ給ひしところありと言ひ傳へられてあり、醍醐の三寶院庭園にもその祠といふものがある。幕末世情漸く騒しくなつて天下の變亂を思はせるものがあつた文久の頃、江州の勤皇家、板倉槐堂が此の太閤坦に劍術の道場を開き子弟を集めて志操を砥礪したのにもかゝる歴史に隠されてゐる義憤が少しは加はつてゐたのではあるまいか。そして、是は同時にその地主である妙法院の坊官僧侶とも感情の相通するものがあつた事を思はしめる。果して、文久三年八月十八日には、尊皇攘夷の大計を實行すべく、大和行幸、伊勢、關

東への御進發を仰ぎ奉る計畫が遽かに頓挫し、剩へこの派の首領三條中納言以下には謹慎、長州藩主及其の家臣は退京を命ぜられた爲、誠意の不通を歎き國家の將來を慮つた、この派十一卿と眞木和泉、宮部鼎藏以下の志士及び長州の諸隊二千六百餘人は阿波脱藩の土中島錫胤の交渉によつて、一先づ妙法院に落着き今後の方針を會議することになり、同日午後秋雨蕭々たる中を堺町御門から河東を南して薄暮、こゝに着いた。そして正面、北、西の三門を固め數十所の篝火焔々裡、寢殿に於て大協議が行はれた。何しろ毎日天誅のたえぬといふやうな時にこの思ひ掛けない變革に、今迄矢竹心の一筋に奉仕して來た御親兵の聖職と堺町御門警備の大任を解除せられたこと、なかくに諸隊士の心情穩かならず、今にも御所に打入つて君側の奸を切るべしといふ劍幕なので、一切外出を禁止し、諸用を便する爲には妙法院の坊官の子供四人を使つた。この時、かの板倉槐堂は三百兩の大金を持つて來て炊き出しの資に供したといふ。

會議は容易に纏らなかつたが、最後に三條實美以下の七卿は攘夷の實行を立て、朝威の振興を効すまで長州に下向する事に成り、豊岡隨資以下の四卿は京都に止まる事になつて、翌十九日午前四時御親兵の解散式を行ひ、七卿は馴れぬ蓑笠に身を蔽ひ、姓名を變じて、長兵四百餘人に伴はれて曉雨を冒して表門を出で竹田街道を南したのである。その他の諸隊も之に續いて西し、兵庫から海路三田尻に向つた。そしてこれから慶應三年十二月に至るまで五年間の七卿の亡命生活が始まるのであるが、その間澤宜嘉卿は但馬生野の亂に關係して別離し、錦小路頼徳卿は病歿して、五卿が三田尻、山口、豊浦、大宰府と行動を共にして、復古大號令の渙發と共に勅勘を赦され、入京（この時は澤卿も一緒に）して新政府の要職につき、明治の元勳となられたのである。

七卿や長州藩の勅勘より元勳へとの轉化は、豊國廟のそれにも似たものがある。即ち之も徳川氏の私政によつて、長

く勅旨の鎮座も無意義になつてゐたのが、この天日の再照と共に神威を増し、明治元年閏四月六月には豊公が天下の難を定め列聖の偉業を繼述し奉り、皇威を海外に宣べし大勳偉烈を思食され、新に祠宇を造爲してその功勞を表顯し萬世不朽に垂れさせられるから、列侯及び士庶太閤の恩義を受けし者の子孫は合力せよといふ御沙汰があり、引續いて五月十日には豊國山の廟祀は先年廢毀してゐるが、今度御再興を仰せ出されたから、當時恩顧を受けたもの、子孫は勿論天下の衆庶能く此旨を體せよといふ御布告があり、かくて八月十八日には神祇官より掌典が参向して官祭を行つた。然し此時は社殿がないので、新日吉神社の饌殿を假用したのである。次いで十月には豊國廟を妙法院より神祇官に取上げられ、六年八月には別格官幣社に列し、八年十二月には大佛殿跡へ社殿を造營せられた。即ち徳川氏私政の是正といふ意味を以て、護良親王や楠公の祭祀を創め給ひし御美政と相並んで仰せ出されたものであつて、洵によろこばしき限りであつた。其の後明治三十一年の豊太閤三百年祭に當り、阿彌陀峯の墓所も改修し、且つ新日吉神社も少し南に移つてもらつて、あの立派な参道を復活して今のやうな立派なものにしたのである。

### 一〇、日限地藏

清水寺は松原道を東へ上るのが昔からの本道であるが、西大谷の北側から上つてゆく新道の方が便利である。その新道の入口に近く俗稱日限地藏の安祥院がある。天保七、八年の飢饉は關西に甚しく、大阪では大鹽平八郎の亂もあつた位であるが、京都では安政の大獄に引か、つた與力平塚飄齋や香具屋久右衛門即ち熊谷直恭などが三條磔に救小屋を建て數千人の飢民に粥を與へ藥を施した。その時の死者九百七十餘人を洛中洛外の寺七ヶ所に分つて葬つたが、安祥寺も

その一であつた。而してこの救急事業に名高い渡邊華山も關係軼掌し、且つその畫いた救小屋の圖があるのは懐しいことである。

華山は南畫家で、蘭學者で、政治家を兼ねてゐたが、志士の先行者として忘れられぬ人である。ところが、同じくこの安祥寺に墓のある梅田雲濱も醫者で漢學者で、而して志士の魁を成した人である。彼は元來若州小濱の藩士で、蘭齋派の山口管山に學んだのであるが、天保四年十八歳のとき京都に来て醫を學び、同九年から木屋町に塾を開いてをつた。その後大津に移つて同じ山崎派の儒醫上原立齋に教を請ひ、その娘信子を娶つた。その後再び京都に出でて、二條堺町の望楠軒の教授となり、それから或時は洛北高雄村の小寺に移り、又或時は一乘寺村馬頭觀音堂に移つて貧苦をなめつ、國體の本義の究明と學者の職分について研讀を重ねてをつた。嘉永六年木屋町二條下る所に寓居したが、殆んど弟子は居らなかつたと云ふ。然し乍らこの頃から彼の名聲が揚つて、諸國の有志者が訪ねる者多く、その關係から大和の南部に澤山の崇拜者が出來、それ等の人の招きによつて五條十津川のあたりに遊歴を試みるものが屢々であつた。そんなところに米國艦隊が浦賀に來て開國を迫つたと云ふので、彼の慨然驟起安居を許さずといふ考は大に燃えた。それで翌年正月ベルリが再び來たといふ風聞を耳にした時には、直ちに起つて江戸に赴いた。有名な

妻臥病牀兒叫飢 挺身直欲當戎夷

今朝死別與生別 唯有皇天后土知

といふ訣別の詩を詠んだやうであり、病妻は信子で飢兒は竹子と繁太郎の二姉弟であつた。至れば即ち夷艦已に下田に去るとあるから三月末のことであつたが、鳥山義所の宅で吉田松陰とも會つたし、又更に水戸に行つて武田耕雲齋など

に交り、天下の士氣を鼓舞し、攘夷の實行を促さんための計を議したのである。乃ちこれから彼の志士としての活動が本式に始められるのであるが、それには文人社會の先輩で丸太町川東に住む梁川星巖及びその對岸に住んで父山陽の氣質を禀けてゐた頼鴨涯、知恩院宮の儒官池内陶所などとの交誼が先づいろ／＼な便宜になつた。

かくして彼は讀書教授よりも、社會の耳目を避けて反徳川政道を研究宣説する志士に變つたのであるが、此の聖業の首途ともいふべき時にすでに病んでゐた妻信子は、翌安政二年三月二日には二十九歳を以て歿した。彼女が書畫絲竹の技にも勝れた才色双絶の佳人、この米鹽に拙なる夫を助けて毫も憂ふることなく、

拾ふ木葉

樵り置きし軒の爪木も焚きはて、拾ふ木葉の積る間ぞなき

題知らず

事ならぬ住居なれどもすまれけりわれを慰む君あらばこそ

といふ雅懷を遣るやうな賢婦人であつた。だからこの時には雲濱も慟哭してやまなかつたといふ。加之、その後程なく、又その長男五歳の繁太郎も亡つた。が彼の志は屈しないで、諸方の遊説を止めず、又有名な兒島高德傳などを草し、且つ門人にも教授を怠らなかつた。門弟として極めて少數であつたが、而も大高重秋、古高俊太郎、西川耕藏、乾十郎等の尤物があつた。後の京都府知事山田信道の實兄で池田屋騒動の中心人物の一人であつた松田重助もその一人であり、彼は雲濱の人物に敬服してかゝる窮巷におくべき人物にあらずとし、安政三年烏丸御池に轉宅せしめ、和州高田の豪家村島藏之進の女千代を媒介したのである。翌安政四年には彼は速く長門對馬迄も遊説し、吉田松陰とも再會して松

下村塾の標札を書いた。これから政局の進展につれ、彼の大車輪の活動が始まり、安政五年八月、所謂水戸藩への密勅降下事件などには最も奔走したのである。それで、同九月同事件糾明のために老中間部詮勝が大老井伊直弼の命をうけて上洛した時には、その未だ入京せざるに先ち、伏見奉行内藤正繩の手に捕へられたのである。時に九月七日夜半、當時彼の家には妻女三人と周防阿月の門人赤根武人が居つたのみで附近の人は何の故たるやを知らなかつたといふ。とにかくこれが彼の大掛りな疑獄事件のきっかけである。そして同年十二月江戸に護送せられ翌年正月小倉藩邸にお預けとなつたが、苛酷な取扱のため、九月十四日には敢へなく病歿した。年四十五、遺骸は淺草海禪寺に殯したとあり、罪囚の故を以て葬られなかつたのである。

初め雲濱は先妻信子を安祥院に葬つてゐたが、彼自身の墓は罪囚として無かつた。然るに文久二年になると天下の形勢變るところあり、幕府に於て勅旨を奉じ戊午(安政五年)以來國事に死した者の營葬建墓を許したので、彼の實妹富子は西川耕藏や長州人などの助力を得て、亡嫂信子の墳上に亡兄幼時の前髪を埋め碑石も建て、祭つた。三尺に足らぬ小さい石ではあるが、感慨無量涙を誘はではやまぬものである。

その富子は後に兄の同志であつた青蓮院宮の儒臣山田時章に嫁した。また雲濱の後室千代子は竹子と自腹の一男一女を伴ひ、克く自ら守つてゐたが、明治元年には官より扶助米を給せられ、初めて天日を仰ぐ思がした。そして同五年京都女紅場が出来ると生徒取締に任用せられ、その女縫子も英語、裁縫等の助教に採用せられたが、十三年母に先だつて逝き、信子の出高橋竹子のみが大正まで存へて雲濱の血を傳えた。

## 一一、清水寺・清閑寺

四四

札所と塔と庭園と、そして繪馬と忠僕茶屋とで名高い清水寺は、延暦の將軍坂上田村麻呂の發願で、千手千眼觀世音を祭り、その本堂は長岡京の紫宸殿を賜つて造營せしめられたといふ由緒の地、賴朝將軍もその乳母がこゝに開運を祈つて感得した觀音像を戰陣の間にも離さなかつたといふ。末吉家、角倉家などいふ徳川初期の大貿易家もこゝに願をかけて南太平洋を股にかけた。この本堂の掛造りから春は櫻の雲、秋は紅葉の雨を隔て、京の町を俯瞰するのは得もいはれぬ眺めだが、これから手前の石欄に沿うてつゝ、ましく餅や甘酒を囀いてゐる忠僕茶屋と舌切茶屋、或はまたその左手三重塔の東北に造られた月照、信海兩上人及び近藤正愼の記念碑はいつれも無限の感慨を以て遊子の心を惹く。が之等が皆當寺の住持月照上人釋忍向を中心として動いて來る尊い歴史のはたらきであることは言ふまでもない。月照上人は讃岐の醫者玉井宗江の子權中納言園基茂の猶子となつて十四歳の時清水寺に入つた。天保六年こゝの本坊成就院の住職になつた。成就院は記念碑から更に東北の谷の上にあつて、後水尾天皇の勅願所であり、相阿彌の作遠州の修補になる林山を以て有名である。天性聰明な人であつたので夙に京洛の文人社會に名を知られて居つたが、園家のつて、近衛左大臣忠愼の歌道の門人にもなつて、自然政界にもたよりが出来てゐた。彼の弟に信海といふ出來者があり、從順にして道に勵んでゐたので安政元年から之に寺職を譲つて自らは近畿、四國、關東、北國等を遊歴して他日の奉公を期して居つた。併し又その財政的方面は丹波生れの坊官近藤正愼の忠勤に頼る所が大であつたのである。

近衛左府は三條内府と共に 孝明天皇の御篤信を忝くした賢相、而してその側近には當時既に七十の老齡ではあつて

も高邁俊傑世にも勝れてゐた老女村岡があり、その村岡を通じて薩摩の名侯島津齊彬の寵臣西郷吉之助や、この月照上人が知養として控へてゐたのである。それが安政五年の二月には近衛左大臣奉行した高野山碩學中に今上皇帝寶祚萬歲、文武百官忠誠堅固渡來の夷賊改心退去の爲に五大明王護摩祕法を修すべき論旨を、月照、信海の兩僧が捧持して高野山に登る事になつた基である。次いで五月にも信海は又大元明王祕法を修すべき論旨を奉じて上山してゐるが、是等は、四海泰平、夷賊降伏といふ文句ではあつても、その内旨は決して左様な尋常のものではなかつたやうである。この時兩人には御意を賜つて叡感あらせられたが、それに感激した月照の歌

君がため法のためにはつゆの命たゞこの時ぞ捨て所なる

といふのには、さういふ言外の意味の汲まれるのを見る。それかあらぬか、同年九月から起つた志士逮捕の大嵐は彼等の上に最も強く當つて來た。乃ち雲濱が捕へられた翌々九日の夜更けには、西郷は近衛邸の奥から月照を伴つて、其の宿なる御幸町三條上ル竹原好兵衛の家に向つたのである。勿論近衛左府からの切なる頼みがあつたのであつて、翌十日の朝まだき月照とその僕重助及び西郷、有村俊齋(後の海江 田信義)の四人は竹原の家を出で、伏見に出で、晝には三十石船で淀川を下り夕方大阪八軒屋に着いて薩摩屋敷の仲仕幸助の家に潛んだのである。

それから後、博多に下り鹿兒島に行き、そして十一月十五日の夜半、鹿兒島柳町俵屋の河岸から船出して翌十六日の午前三時頃、大隅境の華倉鼻岬(アハノサ)で同船してゐた重助と博多から案内した平野國臣の目を掠めて相擁して投水した二人の運命は餘りにも悲惨な思出が充ち満ちてゐる。

大君のためにはなにか惜しからん薩摩の瀬戸に身は沈むとも

四五



この朝人々の心盡しの一葉火の温りで漸く蘇生した西郷の懐から出て来た濡紙に認められたこの歌こそ何時迄も盡きない恨みを我々に告げてゐる。

上人時に四十六歳、吉之助は三十二歳、重助は二十一歳、その吉之助は幕府には死亡と伴つて大島に流され、平野は退去を命ぜられて歸國したが、そこでも追放せられて、又上國に流浪し、重助は幕吏に引渡されて京都に護送せられ十二月二十日六角の牢に入れられたのである。

これより先正愼は月照の動靜を探知すべく捕へられたが、斷じて白状しない。然し苛酷な拷問は遂に彼をして自ら頭蓋を獄壁に打ちつけて碎くと共に舌を噛み切り自殺するの途を選ばしめた。實に安政五年十月二十四日、四十五歳のときである。信海は月照西竄の時は東北旅行中であつたが、歸ると直に捕へられ、同じく六角の獄舎にゐる時、安政六年正月五日重助と會へて、月照の最後を聞くことが出来た。その後江戸に檻送せられ、苛酷な延訊にも屈せず、尊攘の大義を以て抗辯したが三月十八日には獄中に歿した。享年三十九。

西の海あづまの空とかはれども心は同じ君が代のため  
之がその辭世である。

さて、月照の屍は鹿兒島南林寺に葬つたが、清水寺にも信海のそれと並べて墓あり、正愼のは八坂青龍寺にあるのであるが、明治三十二年西郷従道、海江田信義などが、その記念碑を清水寺境内に建てたのである。同時に二十六年五十六歳で死んだ重助の記念碑もその傍にたてた。その重助は安政六年五月獄舎から追放されると京中を轉々して日蔭者の生活をしてゐるが、元治元年ゆくりなくも馬上の將軍西郷に邂逅し、その援助と清水寺の好意によつて清水寺畔に茶屋

を開くことが出来た。そして月照の碑守として身を終へることが出来たのである。又正愼の遺族も清水寺の好意によつて茶店を営み生活してゐるが、前者を忠僕茶屋、後者を舌切茶屋といつて京名所の數に入つてゐる次第である。

この清水寺から南東すると澁谷峠に出て花山に出る。昔 花山天皇が御悲しい御出家を遊ばされる爲に御車を進められし路、又牛若丸が金賣吉次に伴はれて奥州落をしたのも此の路であらう。而してこの峠に近く歌の中山清閑寺がある。高倉天皇の御陵が無限の感懷を呼ぶが、その境内の茶室郭公亭は、月照と西郷とが倒幕の密議を凝らした所として有名である。近年住職因幡薬師の大釜隆宗師が兩忠臣の顯彰につとめ、此の遺跡の修理にも力をつくしてゐる。

## 二、青蓮院

青蓮院は天台宗の門跡寺院で、昔は御領が千三百三十餘石、幕末には二品尊融法親王が住居されましたのである。親王は伏見宮邦家親王の第二王子で即ち山階宮晃親王の御弟宮にまします。文政七年正月の御誕生であらせられるから、孝明天皇よりは六つの御年配にまします。八歳の時から本能寺の日慈僧正に儒佛の二典を學ばせられ、十三歳の時南都一乗院尊常法親王の弟子になられた。間もなく 仁孝天皇の御養子として親王宣下、一乗院宮に補せられ給ひ、天保九年十五歳の時得度して諱を尊應と號せられた。かくて興福寺の別當も兼ねさせられたが、法務の餘暇には、寶藏院流の槍術を學ばせられ、經學、兵法も究められた。當時奈良奉行には後の勘定奉行として令名のあつた川路聖謨がをつたひ、しばしば御伺したといふことである。

嘉永五年二十九歳の御時、内勅を以て青蓮院に移住せられたが、これは天台座主尊超法親王が御病氣の故に、御跡を

繼がせられるためであつた。乃ち名を尊融と改められ、天台座主を以て陛下の護持僧に補せられ、爾來玉體の加持、中宮女御方御懷妊や皇子皇女方御誕生の際の御祈禱、或は天下蒼生のため風雨順氣の御祈請などの尊き御用をおつとめあり、殊に嘉永六年以來は外寇攘斥について諸社諸寺へ御祈禱あらせらるゝこと多かりしについても、その都度大事な法儀を勤仕せられたのである。

然しかゝる非常の際に親王の廣く且つ深き御修養は自づと顯脱する向があつたとみえて、恰も内外の政務に日夜軫念を勞し給ふ。孝明天皇からしばし御諮問にあづからせられた。安政五年日米通商條約の勅許一件について朝暮の間可否の議が紛糾した際に清水寺の前住月照と現住信海とはひそかに高野山に登つて皇祚長久、天下靜謐を祈禱したことがあるが、それは親王と近衛左大臣とが御内旨を承けさせられて取計らはれたことであるといふ。それ程親王は

孝明天皇の御信任を辱くせられ、朝野に重きをなしてをられたのである。親王の起居まします所は青蓮院の玄關から左手の奥にある質素な御殿で、後に文久年間になつて叢華殿と命名になつた所であるが、こゝには月照、信海、或は梁川星巖、梅田雲濱、頼鴨崖、小林民部、浮田一蕙などの志士がいつも參殿して密議を擬らしたところである。それについては宮家の侍臣で後に梅田雲濱の妹登美子を娶つた山田勘解由と、知恩院宮の侍讀で、宮も時々召して外典の講義を聞召してゐられた池内大學の奔走盡力した所も大きかつた。

よく考へると、此の時の政局は、單に開國の是非といふことでなく、朝威の恢復、幕政の否認といふ空氣が濃厚に動いてゐた。それ故に幕閣は非常な決意を以て志士を逮捕し、延いて公家大臣にも及ぼしたのであつて、それは全く幕威を伸張せしめんとする魂膽からであつたのである。ために、その及ぶ所近衛、鷹司父子、三條の四大臣に迄敢て

し、且つ終に親王にもせまつて病氣の口實を以て座主の任を辭し護持僧を罷められる上表をせしめた。而も亦一方には故らに親王の御内行までも色々探つてこれを穿れ奉る口實を設けんとしたのである。然るに孝明天皇は固く宮を庇はせ給ひ、その辭退を聞召されなかつたが、關東の態度は一層激烈を極め、安政六年九月には、いよいよ宮は壬生寺に御移居然るべしと迫つた。然し同寺の都合ではやめ相國寺内の桂芳軒といふ小屋に入れ奉つたのである。永蟄居といふのであるから、全くの御幽閉であつて、その御取扱の程も察せられるのであるが、宮は決して落膽あらせられず、一層内外の事情と御修學とに努力遊ばされた。

かゝる克己御修養に四年の歲月を過ぎ給ふうちに、世の中は變つて公武全體といふことになつたので、文久二年御年三十九歳の四月には蟄居御赦免、青蓮院に御還住を仰せ出されたが、記録によると、長き謹慎で御頭髮も長いが、そのまゝで御入院も差支ないといふことがある。而してこの頃からまた愈々天下多事、朝廷人材を要せられる事が多いので、改めて御事御相談御扶助のため再々參内遊ばるべきことを命ぜられたのである。翌三年正月には勅命によつて御還俗の内意を仰せ出され、二月には中川宮の稱を賜つた。それより河原町廣小路なる一乘院の里坊に新殿を建て、御移り遊ばされた。御家領は地方にて千五百石、これは幕府が江州神埼郡内で井伊家の采領を上知した内から千石御渡し申したのである。この年八月十八日の政變は親王が深更御參内になつて奏上決行さるゝに至つた事は有名な話であるが、そのため過激の尊攘主義者からは、擾紊とのゝしられて、あらぬ中傷もされたのである。然し孝明天皇の御信任は一層厚きを加へて崩御迄變らせられなかつた。即ちこの年八月二十七日には元服の禮を行ひ、參内して彈正尹に補せられ、名も朝彦と賜はつた。爾後或は尹の宮とも申す。翌元治元年十月には宮號を改めて賀陽宮と賜ひしが、明治八年

にはまた久邇宮と稱すべき令旨があり、二十四年十月二十四日御六十八歳で薨去遊ばされた。

五〇

### 一三、翠紅館址

護國神社の右手麓に高い竹垣を廻した宏壯な邸宅がある。兵庫縣の實業家澤野定七氏の別邸になつてゐるが維新時代には西本願寺大谷家の山莊であつた。當時西本願寺には教明な廣如上人があり、その下に澤山の英納が輩出し、さかんに護法護國の運動に携つて居つた。就中、周防國遠崎なる妙圓寺月性上人が海防僧として有名で、吉田松陰先生の如きも、この人に提擧せられし所多く、松下村塾の書生達も、月性上人が萩に巡錫の砌には、その講筵に列せしめられたものであり、先生が安政六年十月、江戸に獄死する時にも月性の遺稿のみは出版の事を留魂録に細々と遺命されたやうな譯である。以てこの勤皇僧が維新史上に占める位置も推察し得る次第である。

然るに、この月性が出るには又自らよつて來る所があつた。それは彼の叔父にあたる人に大阪市長光寺の龍護道人釋覺應なる人があり、宗學者でもあり詩人でもあり、當時の名流と弘く詩文を唱和して思想界に重きをなして居つたが、この龍護上人の親友に江州高宮覺成寺の虞淵方外史釋超然なる者あり、一派の勸學として學林の棟梁たり、宗乘餘乘に深きは勿論、詩文にも通じて、これ亦藝林に交りは廣かつた。従つてその著、風濤葦響は詩文に關する見識に敬服すべきものあり、同様に龍護の詩集たる觀月臥松樓詩鈔も亦朗々賞すべきものである。ところが、この虞淵に山居餘課なる詩集一卷あり、菅原爲定、梅辻春樵の序と奥野小山、後藤松陰、山田梅東、香川景嗣等の唱和も加へてあるが、要するにこれは嘉永四年、超然が、この山間に籠つて眞宗法要典據の校正に従事してゐる餘暇に得た詩歌數十首の風韻を傳ふ

るものである。その様な關係から月性もこゝに出入してゐたらしいが、弘化三年彼が學林で佛法護國論を講義する時には、此處に宿泊してゐたといふ事である。その後月性が浪華、紀州、伊勢の邊りに遊説するに際し、超然、龍護等がこれを送る状を作り、それに山田梅東、篠崎小竹、後藤松陰、齋藤拙堂、奥野小山、坂井虎山、鈴木茶溪、廣瀬旭莊、時田雁門等の序も合せて安政二年虞淵が、板行したものが、護法小品一卷である。吉田松陰全集、卷之四をみると、同年八月十五日、松陰先生が、此の書を読むの記を作つて居り、門弟の齋藤榮藏の作もある。以て松下村塾の學問と西派勤王僧の一團との思想的交渉の一連を見る事が出来る。

さういふ譯でこの翠紅山館は何となく志士の精神に繋がるものがある事を思はしむるが、果して文久二、三年の尊攘運動酣の時になると、こゝには、長州派の志士等が隠れんこに集つて、その花木影深き茶席、送陽亭に集つて、密談を交へたものであつた。その中でも文久三年六月十七日の夕方には眞木保臣、桂小五郎、平井收二郎、轟武兵衛等を初め所謂、學習院黨の志士等が、此處に集つて、攘夷親政、大和行幸の計畫について徹宵協議し、鶏鳴の頃漸く、意見の一致點に達し、それより直ちに、公卿方に、その方針を以て必死の運動を試みる事にし、これに依つて愈々八月には、その計畫成り、十三日を以て大和行幸の御發令を見るに至つたのである。この事件は、神武天皇山陵に御親拜あらせられ、次いで伊勢に行幸になり、それより兵を箱根に進められて愈々討幕の實動を挙げさせられる内計を含んで居り、攘夷の御手始めに先づ王政復古、天下一新の御大學を執行遊ばされる計畫であつたので、實に尊皇攘夷運動の核心に觸れたものであつた。只これがまだ時機の到らざるものあつた爲に、八月十七日の深更、急に御中止の御勅命があり、翌日には、七卿の都落ちといふ悲劇となつたのであるが、兎に角さういふ意味で翠紅館は維新史の上に忘れてならない意味

をもつてゐる場所である。

#### 一四、池田屋騒動の跡

木造欄干造りに古雅を誇る京の三條大橋は東海道五十三次の發足點、皇國里程の本標地であつたので、あらゆる人にゆかりある所である。特に天明の昔、高山彦九郎正之が、此處から西北御所の方を望んで草莽の微臣云々と下座して遙かに拜し奉つたといふ記憶だけでもなつかしい所であり、現にその東詰南角には、この志士の銅像が無言の説教を續けてゐるのである。そしてこの東詰めを南に疏水に沿うてゐる通が、有名な繩手通で豪商が軒を並べて居つた所、かの天保の頃教化慈善等の公共事業に盡力して有名であつた大黒屋傳兵衛の宅趾も今丁度京津電車の停留所の向ひ側にある。その北隣は淨土宗法輪山三緣寺で、此處には宮部増實、松田範義等有名な池田屋騒動の殉難者七烈士の墓があるのである。池田屋といふのは、この三條大橋の西詰が、有名な高札場で、切支丹邪宗門禁制以下の公告が嚴めしく掲げられてあつた。そして此の場所が文久以後暗殺人梟示の中心地になつたのである。それから少し西すると高瀬川で、これは角倉了以が二條から内濱を経て伏見の方へつけた疏水であるが、これに架したのが三條の小橋である。この橋の西詰北側にあつた宿屋で、當時長州藩の定宿をしてゐたのみならず、場所柄として有名な旅人宿で聞えてをたつたものである。當時の主人は入江惣兵衛といつて元治元年が四十二歳、中々のしつかり者であつた。

元治元年といへば、去年八月御所警衛の任を解かれ歸國を命ぜられた長州藩が全力を盡してその冤罪を訴へ再度入京の許可を得んと繰返して嘆願をしてゐた時である。而も守護職たる會津藩主松平容保を中心とする幕府方の勢力が壓倒

的に強かつた京都に於ては、この嘆願は容れらるゝ様子がないので、長州藩では、澤山の兵士を上洛せしめて最後の嘆願を試みる運動を始めたのである。この計畫には猶京都に潜居して形勢を探つてゐた長州藩士は勿論、かねて彼等と氣脈を通じてゐた尊皇攘夷派の志士達も關係してゐたのである。

宮部、松田の兩人は肥後藩士で實にこの志士達の中心人物であつたのである。増實は嘉永三年以來吉田松陰と無二の親友、松田はその財力を背景に文久初年以來大活躍をなしてゐるもの、かく肥後勤皇黨が活躍するに就いての足場は實に四條小橋の古道具屋枩屋喜右衛門といふ筑前藩の用達、實は古高俊太郎といふ山科毘沙門堂門跡の寺侍であつた。俊太郎は毘沙門堂門跡の家來ではあつても、その父は江州栗太郡物部村の郷士であつたのを文久元年春、兼て知合の丹波國船井郡世木村の豪士湯淺五郎兵衛の求めにより、その分家である枩屋の主人が亡くなつた後を襲うて四條小橋の店を繼いだのである。それには湯淺五郎兵衛は元來勤皇の志厚いものであり、その家柄は肥後藩主細川家と同じ祖先から出たもので、同じ紋所を持ち、財力も豊富であつた爲に細川家が長岡城に居つた頃の舊領地である桂、西岡地方の郷士、大和十津川の郷士等とも氣脈を通じて尊皇攘夷の運動に關係して居つた。随つて在京の肥後藩士及び諸國の志士はこの湯淺家をたよりにしてゐたし、自然その分家である枩屋は彼等の足溜の一つになつてゐたのである。

こんな事情で古高俊太郎が枩屋の主人になつたのは、全く彼が毘沙門堂門跡たる輪王寺宮の家臣として高貴の方々に知遇を得てゐること、かねてより尊皇の精神に燃え、志士の仲間入りをしてをつたといふ事が理由をなしたのである。即ち彼は古道具屋特に鎧具足等の古物を商ふといふのは表面の申譯であつて内實は志士達の連絡係として重要な機密事項を擔當してゐたのである。宮部は當時、繩手三條下ル小川亭に宿つて居つたが、この小川亭は大宮卯兵衛といつ

て肥後藩の用達たる魚屋であつたのが、主人が死んでから宿屋に變つたのであつて、それ故に肥後藩士の恩顧を受けて居つたのである。松田は烏丸二條下ル東側の儒者中沼了三の宅に寄寓してゐたが、中沼が學習院の講師として尊皇の志に厚く且十津川の郷士等に特別の崇拜を受けてゐた事は云ふ迄もない。そんな關係で宮部、松田を中心とする志士等は、殆ど柘屋を足溜りにして連絡を取つて居り、その最も計畫的な運動の一つは元治元年六月の祇園祭の夜を期して中川宮及び會津藩の勢力を中心とする佐幕派の勢力を一掃し、以て尊皇攘夷派の朝廷に復さんとする密計であつた。

然るに、會津藩及び新撰組探索は巧妙綿密を極め、池田屋の如きには、賣藥商人に扮して宿泊し居れるもあり、乞食に化けて窺ふものもあつた。こんな事から六月四日の早晩には柘屋喜右衛門の家が襲はれ、俊太郎は捕縛されたのであるが、その際多數の戎器彈藥と同志の連判狀が発見沒收せられたのである。この事によつて、志士の密計が悉く露見する恐あり、隨つて志士は前後の策を講ずべく先づ宮部、松田等はその身を隠す爲に木屋町三條上ル丹虎即ち四國屋重兵衛方に轉じ、そこで長州の吉田稔麿、播州林田藩の大高重明等と協議して、俊太郎救出の手段を講ずべき密議を開かんとて五日夜參集する事とし、その回狀を同志に廻したのである。かくて六月五日夜には、吉田稔麿、宮部鼎藏、松田重助、土佐の野老山五吉郎、播州大高又次郎、江州人にして京都に本屋を開いてゐた西川耕藏等二十四人が集つて居つた。長州人桂小五郎は最も早く來たが、人々が集つてゐないので再來を期して一度歸つて居つたのである。丁度夜八時頃彼等が二階に集つて酒食を共にしてゐる所に急に會津桑名即ち守護職と所司代及び町奉行配下の者、並びに新撰組の討手の者が踏み込んで之等の志士を慘虐したのである。之が元、藥種商に化けた新撰組の山崎某が、表戸の鍵を態々はづして置いたのと、特に志士の太刀を次の間にかくして置いたからであつて可惜之等有爲の人才而も文武兼備の人々を

悲惨な最後に遇はせたのである。池田屋の主人惣兵衛は漸く逃れてゐたのを翌日、たづね出されて投獄せられ七月十三日には獄中に死んだ。志士の遺骸は翌日、檢證を濟ませて、三條河原の人夫に取捨方を命じたが七人の死骸を四斗樽に入れ三緣寺内に埋めたのである。明治三年七月肥後出身の彈正大忠照幡寛胤之を慨し墓標を建てた。次いで明治二十六年四月には京都府知事たりし山田信道氏が、改めて大きな墓標をつくり碑文を刻したのであるが、山田氏は實に松田重助の弟である。明治三十六年には鷹司侍従を參向せしめ給ひ、昭和八年には七十回忌の大法要を勤めたのである。

### 一五、坂本・中岡二十終焉の地

慶應三年十月二十八日土佐海援隊長坂本龍馬は隊士岡本謙三郎を連れて越前に赴いた。大政返上後組織さるべき新政府首脳部の人選に没頭してゐた彼には、何よりも大切なと思はる、財政執掌者の適任者は、横井小楠門下の三岡八郎(後の子爵由利公正)をおいてなかつた。然し、八郎は當時藩譴にふれて蟄居中であつたので、春嶽公の諒解を得て出掛けたのである。その用談をすまして歸洛したのが十一月の三日、いつもの足溜り、河原町蛤藥師下ルの醬油商近江屋新助宅裏の土藏なる隠れ屋に入った。凡そ慶應元年以來の彼の人間業を離れたとも言ふべき神策奇謀の大活動、北白川に蟠居して土佐藩陸援隊と稱し、彼の長崎なる海援隊と提携して、薩長聯合、大政返上といふ大芝居を打ち成した無二の親友、中岡慎太郎と日々相會しては國家維新の大計畫に我躬あるを全く忘れてゐたのである。

十一月の十五日夕方の事である。龍馬は前日から風邪で、母屋の二階に移つてゐた。そこに中岡が訪ねて來て謙三郎と出入の書店菊屋の悴峰吉が來合せて四人、御馳走をしようと龍馬が峰吉を鶏肉買ひにやり、謙三郎もついて行つた

すぐ後の事、噫何たる恨めしの限りぞ、十津川郷士と名乗る三人の不逞漢、惜しみても惜しみても足らぬ此の二國士の命がそれから消えるのである。

龍馬は時に三十三歳、慎太郎は三十歳、何れも立派な土佐侍、いな日本武士であるが、とりわけ龍馬の人物事業は光つてゐる。蓋し彼は最もよく幕末十五年の動亂を收拾し、新日本建設の大業を遂行するに適する経歴と、識見と、そして才幹とを持つてゐた。それは第一に土佐藩士たること、海舟門下たること、非凡の膽力と洞察力とを持つてゐた事等である。ざつと説明しよう。

土佐藩は英主容堂公を戴いて公武の間に重きをなしてゐた。そして彼は我儘をしながら容堂に信用があつたのである。武市瑞山の生前之に愛せられ、従つて長藩士とよく、その上彼自身元來が尊攘派の志士である。とはいへ夙に郷里の畫家河田小龍に近世文明について教を受けて大いに世界眼が開けてゐた。その後勝海舟に従つて航海術を究め、萬國の形勢、通商の利益を悉く體驗した。加ふるに海舟は齊彬、容堂、春嶽等當年天下の進取的な名侯と善く、そのため福井藩の庇護を受くる身となつてゐたのである。

即ち長崎に於ける海援隊の壯快なる事業は、全く此の経歴の土臺の上に展開した。そしてここで西來の獨に生れ蘭に育ち米に學びたるフルベッキより西洋文明特に立憲代議政體の講義を聴き、新式武器、軍艦、商船を購ひて従つて將來の國家は海軍の建設最も第一の緊要事なる事を痛感してゐる。而已ならず和英通韻、イロハ便覽其の他の出版もしてゐる。萬國公法は計畫のみで終つたが、閑愁録と藩論とを出版した。何れも海援隊書記長岡謙吉の著であるが、閑愁録は基督教の侵入に備へんがために佛教を盛にしなければならぬといふ思想對策論であつて、一體に固陋なる排佛家のみが

横行してゐた當時には、實に異とするに足る高い見識であつた。こんな點が彼の部下には鎖港論者でも一藝一能あれば入れておいたのであつて、この雅量が實に將に將たる大器たるを示すのである。

彼の見識が一等地を抜いてゐたことは、嘗て槍垣清治が長刀をさしてゐるのを誡めて、實用には短刀が勝ると教へたことがあるが、その次に會つたときには短銃を示してこんなものがあると教へ、その次に會つたときには萬國公法を勉強してゐるんだと告げて、將來はこんなものを知つてゐねば駄目だと教へたことでもわかるのであり、かういふ常人の考へ及ばぬ見識が、慶應三年十一月には「藩論」といふ書物を著して、日本現時の封建制度では大名は深宮婦女の手に育ち、愚物たるを免がれず、世襲の武士又虚弱であつて用に立たぬ。こんな人達に指導されては亡國の外ないから、須らく之は廢止して四民平等の世の中にし、民選議院を起し、學校を建て、人材を拔擢することが必要であると主張せしむるに至つたのである。が惜しいことには此の書は現今日本では佚失してゐるが、パークス傳卷二(一一九頁—一三二頁)にその抄譯が載せてあるので、その大意を知ることが出来るのである。

彼は高邁大度、無慾にして群を絶してゐた。此點西郷にちかく、識見と俊敏とに於てや、優れるを覺ゆ。慶應三年十一月大政奉還後、新政府成立後の官吏をいかゞするかについて下相談をしてゐたが、彼には何等の役も振りあて、ないのを大久保が訝つて、貴殿はどうすると聞いたときに、彼は即座に「予は世界の海援隊でもつくらうよ」といつて嘯いてゐたので、西郷、大久保なども全く煙にまかれたといふ話がある。それでも此の巨大漢は、なか／＼涙にもろく感激性が強かつた。慶應三年十月十三日、大政奉還の内諭で二條城に於ける諸藩重役の會議が長びいた時には、如何になり行くかと坐つても居れず心配してゐたが、後藤象二郎より決定の吉報が来るや、「天晴れの慶喜公かな、予は此の人の

爲なら一命を獻ぐるも苦しからず」と矯語したといふが如きその一例である。この純情が、終始一身を忘れて、ひたすら大君の爲め日本のため、新時代の到来を畫策して止まなかつた所以であると見てよい。即ちその純情こそ虚偽を許さぬもの、誠實と同じものであるのである。

彼は無慾であり、膽太であり、向ふ見ずのあばれ坊であり、或る意味では西郷の所謂「始末に終へぬ男」であつた。然しそれ故に、澤山のあばれ者を部下に集めてよく統御した。忌諱も憚らず容堂、春嶽等の名侯に思ふ所をすばく進言して不思議によく採用せしめた。「天下の政權を朝廷に奉還せしめ政令よろしく朝廷より出づべき事。」こんな六ヶ敷しい事を將軍に迫つて承諾せしむるものならば、諸侯に強請する位は何とも思はぬ筈である。だから果して「藩論」といふ書物も出版するといふものである。次に「上下の議政局を設け議員をおき萬機公論に決すべし」とか「外國の交際は至當の規約を立つべし」とか「海軍を擴張すべし」とか「御親兵をおくべし」とかいふ條項は、彼が慶應三年六月長崎から大阪へ航海中、高知藩の軍艦夕顔丸の船室で忽卒に書いた「船中八策」の主なる條項であるが、これこそまことに、後の明治日本の進路を決めたものであると言つてよいのである。

### 一六、大久保利通寓居の跡

大久保利通は維新の元勳の中でも、最も建設的なる方面に功績のあつた忠節の臣である。公は天保元年鹿兒島市加治屋町なる甲突川の邊に生れた。仍つて甲東と號したのである。嘉永二年所謂お由良騒動といふ厄難があつて、正義派の高崎五郎左衛門、山田市郎右衛門一黨が切腹遠島謹慎等を命ぜられた時に、公の父利世も鬼界が島に流された。公はそ

の時十七歳であつたが、記録所の書役を奉じてゐたのが、それも免ぜられて謹慎する事になり、數多い妹を養ひつゝ、母に仕へて苦しい世帯を保ちつゝ、西郷その他の諸友と交つて、密に修養を努めて居つた。嘉永四年島津齊彬公が封を嗣がるゝに及び高崎一黨も許されて公も出仕する事になつた。そして隠然として薩藩正義派青年の頭領に推されて居つたが安政五年齊彬公薨去の後西郷は流され藩の方針が一變した時にも、彼のみは隠忍して密かに時期を窺つて居つた。併し、安政六年の末から、薩藩と水戸、越前との藩士の間には井伊大老暗殺、幕政改革の運動が起るに及んで彼はその首領に推され、薩藩士四十餘人の脱藩東上の計畫の中心であつたが、藩主茂久の懇篤な慰撫に感激して暫らく東上を思ひ止つたのは有名な話である。併しそれ等の關係から彼が井伊大老遭難前後の薩藩勤皇運動の状態を記した萬延日記なるものは非常に貴重な消息を傳へてゐる事である。

かくの如く公は年少ながら大人の如き悠揚迫らざる風格を以て薩藩政廳の間に隠然たる勢力を持つて靜かに時世を轉回させて居つたが、文久元年には愈々天下一變の時期なる事を看破し、久光公に先侯の遺志を奉じて上洛して公武間に周旋すべきを建白し、これには先づ西郷吉之助を召喚すべき事を必要とする旨を建言した。この二つとも容れられて、先づ彼は、藩侯上京の準備的打合せをする命を承けて、文久元年十二月入洛し、近衛右大臣忠房公について打合せを遂げた。その歸路筑後水田に蟄居せる眞木眞臣を訪ねて、此處で志士連中とも連絡を取り、且脱藩して早く公の鶴を奉じて三月には鹿兒島を出發したのである。勿論この時西郷も召喚され、京阪にある志士指導の命を受けて先發したのであるが、その結果は志士等の意氣が餘りに激しく、西郷はこれを宥めつゝあるに拘らず、讒言せられて久光公の怒にふれて急に歸國を命ぜられ、更に沖永良部島に流されたのである。此の時にはさすがの大久保も前後の分別を失ひ、運命の

逼塞を悲んで五月八日の晩、兵庫の海岸に西郷を誘ひ出し、刺違へて死なむことを申出たが、西郷の諫めによつて思ひ止まつたと云ふ話がある。それから大久保は久光を奉じて京都に於ける朝議の轉回に盡力し、更に大原勅使を奉じて東下する久光に従つて江戸に至り、幕閣相手に縦横無盡の活躍をした。井伊歿後の幕閣を支へて兎角彌縫してゐた久世廣周、安藤信睦等に向ふに廻して遂に大原勅使の携行せる三事策を幕府に承諾せしめた。その一つは將軍が上洛して天機を伺ふ事。第二には幕府の制度を改革し、一橋中納言を後見職に、松平大藏大輔を政事總裁職に任ずる事。第三には豊臣氏の五大老制に倣ひ沿海の五大藩主を幕議に參與せしめる事であつたが、第一、第二は之を奉承せしむるに成功したのである。しかも此の事たる、幕府にとつては開府以來未だ曾つてあらざる屈辱であるので、非常に難色があり、その爲に最後には大原勅使の客舎に閑老を招き隣室に數十名の壯士を伏せて、劔櫛の音をさせて貫徹を計つたといふ。かういふ邊の策謀は總て大久保が回らした事であり、その苦心の程が察せられるのである。

云ふまでもなくこの勅使東下の一件は、實に天下の大勢を根本的に變改させた大事件であつた。従つて之が畫策の中心であつた彼の功績は言ふべからざるものあり、已に此の時から天下政局の中心に位して居つた事を忘れてはならない。爾後薩藩は常に朝幕交渉の樞機に參畫し、常に天下の政局に重要な役割を演じて居つたのであるが、最も之れが有力に動いたのは慶應二年長州第二回の征伐の時からであり、その時には、文久三年八月以來國元に謹慎を命ぜられ京都にある事を許されず、殊に元治元年七月の關下奏狀事件以來は朝敵の汚名を押し付けられて追討の苦しみに落されて居つた長州藩士は京都に居られない時であり、専ら薩藩が反幕府的勢力の中心として朝權回復の中にあつた。而も慶應二年以來は薩長の間に同盟が成立したのであるが、この同盟成立には、小松、西郷と並んで彼も薩藩の代表者として、桂小

五郎、山縣有朋等と折衝してをるのである。實に之からは彼等の一舉一動が、盡く皇政復古、大權回收の大事業の進行に寄與して居つたのである。

かくて文久二年夏以來、彼は藩地と京都との間を常に往復してその生活の大部分は京都に於て送つたのである。かくて慶應の初め頃から御所に近く、又相國寺の藩邸にも近き所に一つの邸宅を構へた。そしてその愛妾お勇をこゝに置いて幕府朝廷の動靜を探ると共に、志士等の避難所、集會所として縦横の畫策を試みたのである。故大山元帥の直話によると、元帥はその頃若年の兵兒で、何事が話されるかは伺ひ知り得なかつたが、兎角相國寺の藩邸から、大西郷の御伴をしてこの家に來り門の邊で立番をして居られたものであるといふ。又岩倉村からの便りは岩倉村なる具視寓居の娘お市が物賣りの眞似をして務めて居たさうである。この邸から少し離れた處に裏二階の家があり、其處には長州藩士を薩藩士の名義で密に連れ込み、品川彌二郎、山縣有朋等が潜んで密議を凝らしたものである。又その西側には實相院門跡の里坊があり、岩倉公が變裝して入京すれば此處に居つて密かに志士と畫策して居つた。慶應三年愈々討幕の方針が定まると、大久保公は一日西陣の織屋から、お勇の帶地と稱して錦を取り寄せさせたのであるが、適々潜入上洛して居つた品川彌二郎等が、一つは携へ歸つて山口で故陸軍大臣岡市之助の父君に命じて錦の旗に仕立てさせ、一つは大久保公が密かにこゝで錦旗に作り、そして用意を整へて居つた。之が明治元年正月三日の鳥羽伏見の戦に早速用ひられた有名な「宮さん宮さん御馬の前に」といふあの錦旗であるのである。

その頃公が専ら客と接して居つたのは、座敷の八疊であつたが、然しそこは餘りに陋巷に接してゐるのである。藩家老小松帶刀がその寓居に近衛邸の河原町御殿にあつた茶室を譲り受けて建て、居つたのを貰つて奥に移し、その急造の



茶室で主に密談して居つた。従つて岩倉村の使等は潜戸からそのまゝ奥に通つて裏を抜けて向側から出たのである。この茶室はあつさりした假造ともいふべきものであるが、さういふ意味で尊い所であり、大久保利武侯が後年又買戻されて修理を加へ、大正大典の時に西園寺公に揮毫を請うて望月といふ額を掲げて居られる。全體としてこの家は格子戸があり、潜戸を入つて奥は割合に廣い、如何にも昔の京都の地下の官人の住宅を偲ばせるに充分な氣分がある。ある意味に於て御一新の大事業は此處を中心として進行して行つたとも云へるのである。

### 一七、相國寺林光院

江戸時代に於ける幕府の勢威は、實に今日の常識では考へられない程強いものがあつた。第一、朝廷の實際政務官たる關白より議奏、武家傳奏から幕府の意の儘に進退されたのであり、百四十家許りの公卿方は位は高くても經濟的には極めて貧しく、その方面からすでに關東の勢力に壓縮さるゝ形勢にあり、その他諸大名との交際は勿論、婚嫁より日常の學問修業についての入門等に至るまで幕吏の監視がきびしく、京外の旅行は叶はぬのであつた。同様に諸大名にありても、彦根の井伊家、淀の稻葉家、龜山の松平家等が京都警衛の職務を命ぜられてゐる關係上入洛が叶ふだけで、一年の交替に上下する西國の大名は、一生に一度だけ京都に入る事が出来るといふ慣例になつてゐたのである。にも拘らず、その參勤交代なるものは、甚だ大形なものであつて、不經濟至極の仕業、全く以て諸侯の財政を攪亂し、士風を腐敗せしめ、幕威を滲み込ませんための方略であつた。それ故幕府は、これを勵行する事甚だ嚴であつて、如何に都合のわるい苦しい事情があつても、その延期とか免除とかは決して許さなかつたのである。それでも安政以來天下の形勢が

隱約の間に甚しき變化を來たし、尊皇の素志に燃え、國家の將來を深憂して居つた先覺諸藩、就中、薩州、長州の如きは關ヶ原以來の積憤があつて、何とかして、その實力を蓄へ、機會にあらば蹶起せんとする志望を強く抱いて居つた。それには先づ第一に、京都に接近する事と武力を蓄へる事と、財政に餘裕を持つ事が必要であり、それを先づ最も強く計畫したのが薩州藩であつた。先覺者島津齊彬が内には藩政を改革して開墾の奨励と農村人口の増加をはかると共に、藩士には學問を、武藝をつとめしめ、以て人材の輩出武備の整頓に力をつくし、進んでは軍艦大砲の製造所をつくり、更に綿絲紡績、ガラス器、陶器の製造にも力を入れ、外にはひそかに琉球を通じて外國との貿易を計つて、藩の財政を鞏固にせんことを圖つたのはその下心あつてのことであつた。従つて京都には、ひそかに周旋の家來を派し、近衛家を通じて朝廷にその意見を奉り、以て、他日活動の素地をつくることにも怠りなかつたのである。即ち時至らば大兵を率ゐて、京都に上り、その赤誠を披瀝して御稜威を奉じ、之を以て關東に臨んでその制度を改めしめ、以て尊皇の道を啓かんとする考へを持つてゐたのであるが、如何せん、齊彬公が中途に薨じたので、暫くこの事は頓挫したのである。

併し齊彬が宣明した大義、それは安政五年正月彼が會てといつても三年前の安政二年正月初めて入京した際、近衛左大臣を通じて 孝明天皇より御下け遊ばされし宸筆の御製、「武士も心あはして秋津洲の國は動かさ共に治めむ」といふ色紙を拜しつゝ、一門家老大目付以上の重役に内諭したところであつて、爾來薩藩の藩是となつたものである。そのあとを繼いだ茂久、その父久光も固よりその心であつた。たゞそれを實行するについての緩急遲速は時の情勢に應ずる必要あり、所謂戊午の大獄後の世情では自重するの外なく、隱忍してゐたが、萬延以後には驟然起つことになつた。とは

言へ、その間には密かに準備を整ふべく、再度の参勤交代延期を幕府に請ふため、文久元年春には故らに江戸の藩邸に火を放つて焼き拂ふことまでしたのである。その準備の一つには何よりも京都に於ける朝廷側の理解を得置くこと、及び宿舎運輸等の設備をととのへ置くことがあり、大久保利通、中山忠左衛門等がその爲めに上京奔走したのであった。

けれどもかういふ御所向きの一大事は、所司代、京町奉行、禁裏附武家など幕府側の監視が二重にも三重にもある所では、さう容易く打出せるものではない。だからどうしても先づ隠密の裡に誰もが思付もしない方面から暗渠が通じて間接ながら心と心との領解が出来た上表向きの會見が行はれ、そこでは殆ど以心傳心的に堅き契りがとり行はれるのである。そして此の種の大役を、世外の人たる僧侶や裏面の存在たる婦人が果したことは言ふにも及ばぬ事であり、此の場合には實に禪僧がやつたのである。

それは今も臨濟宗妙心寺派として有名な隅州志布志町の龍興山大慈寺、この寺は吉野朝の忠臣楡井遠江守頼仲の建てしところで室町時代以來遣明船に關する事務に關與してゐたから、常に文筆の材ある高僧が住持する歴史を持つて居つた。當時の住持は柏州玄定といつて薩州出水郡の出身。隱山系玉潤下の龍象として全國に聞えてゐた和尚である。而も大慈寺は島津氏の香華寺なので鶴丸城にも登城が出来る。恰も其頃妙心寺から柏州奉勅住持の請疏が來た。之には莫大な金が要るので師は藩侯に喜捨を仰いだのである。而も此の妙心寺出世なるものは参内して簾前に伺候することの出来るほど重いものである。加ふるに妙心寺は寛永の單傳、東源、或は雲居、愚堂以來皇室に接近して幕府には親密なる感情の流れてゐないところ、こゝに薩藩内部でも目をつけたのである。

こんな譯で文久二年正月柏州は上洛の途についた。久光の近臣伊知地貞馨も之に隨つたのである。さて、妙心寺では

雜華院の印宗や海福院の物先等と密議した。此の兩院は近衛家の關係で法類であるし、殊に物先は葉室家の出、金閣寺の道機とも兄弟である。ところで金閣寺の執事は中路延年、元來は尾州犬山城主成瀬隼人正の家來であるが、近衛家の侍中路家の養子となり、自然薩藩京都留守居本田親雄とも知る。そこに相國寺の林光院には島津義弘の塑像を安んじてゐるが、その住持梵圭は庭田大納言家の雜掌右馬少屬弓削近江介正繼にかねて漢籍を學び、且つその猶子であつた。仍て柏州は三月十一日林光院に参詣し梵圭より正繼を動かす、庭田大納言に通じて聖聽に達する議を擬らしたのである。十六日になると延年から更關けて林光院に來るやうにとの知らせ、柏州は雀躍して親雄を伴つて林光院に行くと、孤燈明滅するところ、雲の上人が臨まれた。思はず恐懼俯伏すると、久光の志、柏州の勞、並びに上聞に達したるに、御満足に思召す。速かに上洛して闕下を守護し奉れよとの御詔を宣べられて、雲の如く消えられた。後で承ると中山忠能、大原重徳の兩卿であつたといふ。實に此の日久光は西郷を先發とし、小松、大久保等一千餘人を従へて鹿兒島を出發し、四月十三日伏見着、十六日入京、感激の心を深くして公武一和、幕政一新の趣意の下に大車輪の活動をはじめ、五月には勅使を奉じて東下し、三事策を幕閣に奉承せしめ、終に天下一變、皇威振張の新機運を招來せしめたのである。柏州、梵圭などはその素地をなすに一働したわけである。

## 一八、藤井九成邸址

寶曆、明和の事件は江戸時代三百年を通じて京搦の間に討幕復政運動の迸り出でた事件として唯一つの重大な意味をもつものである。實にこの事件こそ、維新運動の思想的先驅をなしたものである。而してこの事件には越後生れの浪人

にして山崎派の學問を以て、徳大寺大納言公城卿に仕へ、且卿を中心とする有司の公卿方に尊皇斥霸の學説を注入して居つた竹内式部と、彼よりも八歳の年下で同じく尊皇斥霸の忠志に燃えて居つた地下の官人藤井大和守直明の兩人がその思想的中心の存在であつたのである。

藤井直明は元來、越中の國射水郡小杉町の生れ、その父は藤井又左衛門宗茂と言つて、淺野内匠頭長矩の江戸詰家老であつた。かの内匠頭刃傷一件に流浪して越中の國に匿れ、大手崎村の豪農赤井九郎平の女を娶つて二男一女を生んだが、その長男吉太郎が十六歳の享保二十年に上京して、富山藩主前田正甫の八男民部利寛の知遇を受け、その世話によつて 桃園天皇の皇女八十宮内親王家の諸大夫藤井大和守忠義の養子になつたのである。即ち彼は藤井家から藤井家に養子にゆき、從五位下大和守といふ官に叙し、皇女八十宮の御家司になつた。八十宮は七代將軍家繼に御降嫁遊ばされることに定つてあらせられたが、家繼が早世したため、御一生を寡居遊ばしました御方であらせられる。彼は父宗茂が左門と稱したのに因んで右門と名乗つたから、普通この名を以て稱ばれる。生來筋骨逞しく膽氣群を抜き、且武術の嗜みあり、經學の素養があつた上に、竹内式部と相知りあつてから、その學問に傾倒してゐたので、即ち、かの徳大寺大納言を初め、正親町三條大納言、久我大納言、岩倉中納言、西洞院少納言等、少壯有爲の公卿方の信用を得て、遂に朝權回復の密計を策するに至つたのである。併しこの事が洩れて寶曆八年七月には諸卿は夫々處罰され、式部は逮捕訊問を受け、翌年五月京都追放を命ぜられ、右門は出奔したため位記返上、永の御尋ねの身となつた。前田民部その他の關係した浪人も夫々歸國逼塞を命ぜられたのである。

亡命後の右門は名を藤井政之助、山下大和等と變じて、北陸、九州、關東等を廻り、特に甲州巨摩郡龍王新村では暫

らく止つて醫を業とし、傍ら武を練つたが、此處で知り合ひになつた山縣齋宮の弟が江戸に於て評判の軍學者山縣大貳なる事を知つて江戸に出で、こゝに兩人の間に平生の志である倒幕復政の密謀が話された。併しこれが大貳の門人より洩れて明和三年一月には再び彼等右門も捕へられ翌四年八月二十一日、大貳は死罪、右門は梟首、竹内式部は兩人と交通した事もなかつたけれども八丈島へ流罪に處せられた。正に是、寶曆事件より八年目の事であり、事は極めて隱密の間に斷ぜられたけれども、この事件の思想的影響は非常に重大なものがあつて、寔に明治維新の前驅としての意義が充分にあるのである。

つら／＼歴史の進行を見ると或る一つの事件が、それに携はつた人間の魂によつて裏付けられた場合は、それは何處迄も強い力をもつて消える事なく、流れ／＼して終に大きな力となつて動き出して來るのを見るのである。維新の聖業の如き大事件も、その淵源する所は、遠く寛永の頃、後水尾天皇の御寵愛を受けて、その御悲しき志をひたすら歎き奉つた佛頂國師一絲和尚の血縁の後である岩倉家、この家は式部、右門の寶曆の事件にも關係者として悲憤の涙を絞つたのであるが、その子孫たる具視公がある事と、徳大寺卿が卿の後に徳大寺公純の御曹子に徳大寺實則、西園寺公望兩公のある事、正親町三條卿の後に正親町三條實愛卿のある事も同様な精神の繼續を見るが、この藤井右門の後に藤井多門及び藤井九成なる兩人があつて、岩倉具視公を授けて、その帷幄に參じ以て維新の大業を成す準備運動をなさしめたのは、如何にも祖先の志が子孫を貫いて生きて行く事をまざ／＼見せるものである。

右門が出奔したのは、四十二歳であつたが、彼の幼子忠三郎は時に二歳、且つその母梅子は翌年病歿したので忠三郎は母の弟藤井高方に育てられ、後に藤井家を再興して八十宮家に仕へ直温と稱した。その子に久一があり、彫金の職を

以て紀州藩の御用達を勤めてゐるが、その志を含んで勤皇の精神を深く藏して居つた。その妻歌子亦同様の志あり、子の多門は恰かも、幕末に際して一族の九成と心を合せて志士をかまひ、且是を岩倉公に引き合せて岩倉公の志を成さしめる端緒を開いた。

夫に就いては九成が文久元年和宮親子内親王の關東御降嫁に際し、岩倉公に隨つて供奉の役を勤めた際、深く公の人物才幹に心服して歸つたのに原因がある。即その後間もなく公は尊攘過激派に弾劾される處となり、岩倉村に蟄居する事數年、奸物の名を以て稱せられて誰一人是を見向くものもなかつた時に、藤井九成のみは、屢々訪ねてその不遇を慰めて居つた。多門も亦九成と親戚の故を以てその行を讀し、且その家は藤井右門の邸趾であるので志士の訪ねる處であつて、此處は尊攘過激派の溜りの様なものであつた。自然幕吏につけ纏はれて、屢々檢分に襲はれるのであるが、その度毎に母堂歌子刀自が玄關に續く表の間でこれに接し、その度毎に鐘を叩いて奥に居る志士にその急を告げた。志士は押入の床下を剝いで裏の相國寺の庭に出たのである。かくして慶應の初め水戸の鯉沼伊織は一日この幕吏に追詰められて逃る、術がないので藤井の家に来て、切腹するを許されんことを求めたが、たま／＼居つた九成がこれを止めて洛北にひそむ岩倉公に遇つて、天下一新の計をなさんことをすゝめたが、公を奸物として公に遇ふ事を屑としないのを強いて連れて行つた處一回にして公の赤心に感じ平生の世間にあやまらされてゐる事を覺り、翻然として公の傘下に參じた。この鯉沼は後の皇后宮の大輔香川敬三で當時太宰府に奔竄中の三條實美公の隨從であつたのである。是より岩倉公の許に澤山の志士が集る様になり、又公と三條公との間に橋渡も出來て、これによつて維新の大業が成功の運に向つたのである。かうすると藤井右門の精神はその子孫に耿々として傳つて居り、それが右門が常に勤皇の志を練つたかの家

で天下の爲に貢獻する機會を得た譯である。大正十一年京都の都市計畫實施により、市電烏丸線が延長される爲にこの敷地も買收せられた爲に家も立ち除かざるを得なくなつた。乃ち由緒ある史蹟の湮滅を恐れて下郷傳平氏が買取り、之をその山科毘沙門堂裏春秋山莊に移して原型の儘保存する事にせられた。今その處を訪ねて見ると、庭先の植込みから群書類従の系譜部の用紙を以て貼つてあつた障子の貼紙から、部屋の姿からそのまゝ保存してある。殊にその座敷である書齋には、かの寛政の學號一件に忠節を盡された中山大納言愛親卿の勤王といふ二字を書かれた額が掲げられてある處なので、そゝろに胸を打つものがある。蓋し、先祖右門の志を思つて久一が中山卿に書いて貰つたものと思はれる。尙この邸址には、大正十二年有志の手で、記念碑が建てられ、それは藤波子爵の篆額、西村天囚博士の撰文、木村得善氏の書になる堂々たるものであるが、その土地が或る人に買取られ店舗となつたので、その西側に碑を移して尙當年の忠芬を物語らしめて居る。

## 一九、尊攘堂

明治維新は、孝明天皇、明治天皇の御稜威によつて興り且成つたのである事は申す迄もないが、その御稜威の精神を最もよく感承し奉つて天下に率先して身を水火の中に置き、國民の指導者となつてこの光榮ある事業を翼賛し奉つたのは所謂志士の人達である。この志士の名を以て呼ばるべき人々は、全國津々浦々に至るまで、當時の政治、經濟、社會、貫屬等の關係より云へば、皇室御領といはず、幕府直轄地といはず、譜代大名地といはず、外様大名の領地及び公卿社寺の諸領に至る迄苟くも國體の本義を覺り、大義の爲に奮前せんとするもの總てに及び、殆ど數千百指を屈するに

遠ない程多數に上つてゐるのである。然り而してこの中でも、萩藩士吉田寅次郎藤原矩方即ち松陰先生の如きは代表的な偉人である。この松陰先生が僅かに三十年の生涯、而も萩の城下松本村に幽囚中、安政三年八月頃より同五年十二月迄二年半ばかりの間、松下村塾で漢籍兵書を講じ詩文を教へつゝ、尊皇攘夷の大旗をかざして多數の有爲なる青年を養はれた事と、その青年達の奮闘努力によつて維新の事業が達成せらるゝ上に非常なる功績のあつた事はいふ迄もない。固に是、歴史上の一つの奇蹟ともいふべく、松下陋村と雖も誓つて神州の幹と成らんとし、高邁至重の精神が如實に現はれた譯である。

この松陰先生が安政六年十月二十日、將にその刑せられんとする一週間前に當つて、郷里なる萩の岩倉嶽中にあつた門弟入江九一に宛てられた手紙、それは明治になつて水戸に於て発見されたのであるが、その中に先生が尊攘堂を建てんとする素願を断念せざるを得ざるより入江兄弟の中一人に遺囑し、且それに就いて、尊攘堂の内容は京師に大學校を起し、上は天子、親王、公卿より下は武家市民に至る迄入寮、寄宿等も出来る様にし、天朝の御學風を起し、天下の英才を教育せば、以て天下の人心を一定する事を得べし。乃ち今の學習院を擴張興隆し、神道を中心とし本居學、水戸學、朱子學、陽明學、仁齋學、徂徠學、如何なる學問にてもその長を採り、尊攘の精神の下に筋目を糺さむ事の必要を詳しく書き残された。九一はその後、元治元年蛤御門の亂に斃れたが、明治になり同じく先生の相弟子品川彌二郎子は計らずもこの書を水戸に於て発見してより、その心願抑へ難く、明治二十年海外漫遊より歸朝するや、嘗ての同學にして入江の實弟なる野村靖子、全通寺提山が還俗して和歌山縣知事に登り居りし松本鼎等と協り、京都高倉通錦小路なる本典藥三角氏の別邸を購つて此處に松陰先生の靈を祀り、その遺墨を始め、廣く維新志士の殉難の跡の事に關する史料を

蒐めて先生殉難の日たる十月二十七日に祭典を營み、一般公衆にも參拜を許し、且、所藏品を縦覽せしめる事にした。仍ち四萬の有志も是の舉を賛して寄贈のもの相繼ぎ藏壘千餘點に達した。然るに明治三十三年二月品川子が薨去せられし後保存委員の意により、所藏品を京都帝國大學に寄贈、且、同學内に尊攘堂を新築して以て松陰先生の京都に大學を興し、尊攘堂を以てその意とする遺志を實現する事となり、翌三十四年文部大臣の許容を得、爾來京都帝大總長を祭主として毎年十月二十七日の松陰忌及び二月二十六日の品川忌に祭典を行ひ、藏品を展觀し、且、時々來訪する篤志家には、之を閱覽せしめて國民精神の作興に資し、思想傳道に裨輔あらしめて來てゐるのである。

かういふ次第で、尊攘堂は小さい建物ではあるが、中には松陰先生の木像が祀つてあり、且その藏品の中には、先生が、安政六年十月十一日、江戸の獄中にて、同囚水戸の堀江克之助に宛てられた有名な水火和合の書、その中には「天照の神勅に日嗣之隆與天壤無窮と有之候所、神勅相違なければ日本は未だ亡びず、日本未だ亡びざれば正氣重て發生の時はある也。」といふ感激措く能はざる文字あるものや、先生が、安政六年五月二十一日萩より江戸に送られんとするに際し、門弟松浦松洞に肖像を畫かしめ、是にその平生の志を述べられたる長詩の贊を加へて品川氏に與へられたるものや、文久元年十二月一日久坂玄瑞、寺嶋忠三郎、前原一誠、品川彌二郎、山縣有明、高杉晋作、伊藤博文、木戸孝允、野村靖、舊門下の英才二十餘人が、先生が嘗て爲された事に倣ひ、各々毎日二枚宛寫本をなし、その筆料を積み合はせて同社中のもの、若し牢獄に投ぜられ、又は飢渴にせまられたる場合には相助け、義士烈婦あればその碑を建て、墓を築く等の如き盟約を結んだ一燈錢申合せと題する長卷の連名書を初め、高山彦九郎の在京日記、騎兵隊の日記、久坂玄瑞の江戸滞在日記等を初め山縣有朋の慶應三年五月、薩長連合討幕計策の件につき京都に潜入した時の藩侯

への復命書案、或は大久保利通筆の三藩連名の約定案、或は佐久間象山、坂本龍馬、西郷隆盛、眞木保臣、その他維新の遺墨遺物等が多数あつて、苟くも維新史を研究せんとするもの、必ず一度訪ひ、以て彼等志士の精神に觸れ、感激を深くすべき所である。

## 二〇、岩倉公隱栖の跡

岩倉公は維新第一の功臣である。その五十九年の生涯は實に誠忠恪勤の權化であつた。元來岩倉家は村上源氏で鼻祖具堯は、後水尾天皇の寵臣であり、その三男一縉和尚は丹波の法常寺及び洛北靈源寺の開山であり、三十九の若年で亡くなつたが、その一生は實に誠忠硬骨の傑僧として世に知られてゐるのである。従つてこの岩倉家はその創立の初めから皇室に特別な事情を以て反幕の傳統的精神を強く持つた家柄である。寶曆明和の事件には、六代尙具が中堅として參加して居り一刑に處せられんとしたのをわづかに二十四の若年を以て剃髮し慰水と號して三十六年の間日陰の生活を送つた。尙具の孫は具選で尊皇慷慨の血を享け、かの志士高山彦九郎を蔭になり日向になり庇護して彦九郎が京都に來た場合には毎にその家に入居寓せしめて居られた。寛政五年六月二十七日彦九郎が久留米に自刃してからは、具選も家を避けて姓名を變じ、關東に遊んで幕府の形勢を探つた。而し之が洩れて亦蟄居を命ぜられた。その子に具集あり、海榮園と號し墨竹に巧みである。大徳寺黃梅院の大綱宗彦和尚と善くて、かの反幕の歌會である以文會の幹部であつた。具視公は具集卿に育てられたのであつて、先祖以來の忠節、朝暮の關係等に就き、細々と教へられたものである。隨つて岩倉公の勤皇はその仍つて來る所、實に深く強いものがあるとしなければならぬものがある。

岩倉公は文政八年九月十五日、同列堀河康親の次男に生れた。十四歳の時、岩倉具慶の養子となつた。幼時洛北岩倉村花園の百姓久兵衛の宅で大きくなつたが、京都に歸つてからは岩垣月洲の遼古堂に學び、又山本實政の家塾にも通つて讀書を學んだ。だが元來、利かぬ氣の人で、餘り學問に深く窮むる所がなかつた様である。併しその高邁なる識見と貫徹せずんばおかざる意志とは幼時より同輩の推す所となつてゐた。嘉永六年、ペルリが浦賀に來り幕府その外交交渉の顛末を奏上した時には、公は二十九歳で侍從であつたけれども、時局の重大なるを感じて黙するに忍びざるものあり、鷹司關白に上書して、學習院を改革し、文武を問はずその才器に應じて實用の修業を朝臣に爲さしむべき事を進言した。この一事を見ても公の眼識が時流を抜いてゐる事が解る。

孝明天皇は、帝王としての御器量、仰ぎ奉るも長い程英明にましくつたが、又御歌にも御堪能にゐらせられ、公は侍従たりしを以て特に和歌の道と、その識見とを以て御眷寵を忝くした。安政四年三十三歳の時、近臣に拔擢せられてから、政治上の樞機にも通ずるやうになり、翌安政五年春、江戸條約締結後の勅許問題に關して、老中堀田正篤が上京し、是に關聯して、水戸家、越前家、島津家等の密使も入京し、朝儀の紛々を來した時には、公は弱年乍ら硬骨卓見の士として朝臣中に最も重きをなし、かの三月十二日の有志の公卿八十八人の連署建言、是によつて鷹司關白の態度が一變し、必死の運動をした堀田老中も遂に勅許を得ずして意氣消沈して江戸に歸る事になつた大事件であるが、この事件の中心人物となつたのは、公とその叔父大原三位重徳卿とであつたのである。つまり、幕末維新運動の展開については、公はその當初より已に指導者の地位にあつたのである。隨つてその後、所謂安政の大獄が起り、孝明天皇が、なみ／＼ならぬ御苦心を遊ばした時には、公は常にその左右にあつて肝膽を砕いて御輔佐申し上げた。その一に、和宮御降嫁の

一件があり、この事が關東の非常に熱心なる嘆願によつて、京都に勢を得、天皇も亦、國政の大局の上より勅許遊ばさる、御心にならせ給ひし時に、是を圓滑に運ばしむべく奔走努力したのは實に公と久我建通、千種有文等の諸卿であつた。かくて文久元年十月、和宮御東下の際には公は是に扈從し、孝明天皇の御直命を受けて關東に於ける御入興の事件を取り計らひ、且宮の御待遇及び當時の國策に關する重要な問題を幕閣に示し、悉く是を奉承せしめ、特に將軍家茂自筆の奉命書を認めしめて、奏上復命する所があつた。孝明天皇は是に付いて非常に御歡感あらせられたといふことである。

併し乍ら、この頃から天下の諸藩が並び立ち、且外交關係の逼迫するものあつて、天下の形勢が一變し、その爲に公等と宮降嫁一件に盡力した人々は非常な誤解を受けて、志士の弾劾する所となり、脅迫暗殺の憂が甚しくなつたので、文久二年八月二十日には蟄居を命ぜられ、九月十三日には聖護院なる永陽庵に隠れ、翌十四日には洛北靈源寺に到り、翌十五日靖翁禪師を戒師として、龔祖具堯の墓前に落飾したのである。然るに、此處も潜むに都合が悪くて、その夜、松尾の西芳寺に移り、かの茶室湘南亭に入つたが、此處も遊覽客の出入が絶えないので又靈源寺に歸り、更に岩倉村に家を賃して實相院の坊官林道賢の家に潜み、後藤屋藤五郎の離なる荒屋を購ひて移り、西川與三といふ十四歳の少年を雇うて薪炊の事も二人で俱にして、佻しい生活をせられたのである。

元來、岩倉村に移られたのは、かの村の農夫三四郎が公の長子周丸即ち後の宮内大臣具定公の里親であつたからであつて、三四郎の妻菊、娘いつ等が心から親切に世話し、且公の祕密の使をも務めたからである。又實相院は當時無住であつたが、その坊官芝坊澄昇及び入谷駿河守昌長等が公に非常に同情して陰となり、陽となり、周旋する所があつた。

且公の姉婿に當る中御門經之卿の山莊も近くにあつて、彼此都合が良かった。併し乍ら、彼等過激の志士は公をなきものにせんとて、屢々この邊に出沒するので或は藤屋を通じて三つの出口より後を韜まし或は山上にある妙見堂に終日潜んで三四郎が食を運び、又は東の方約半里なる花園の久兵衛の宅に往來してわづかに虎口を脱して居られたのである。併し、かゝる危険な状態も元治元年七月十九日の變よりは緩和せられて、稍一身の安全が感ぜられるやうになつた。この頃より、京の奥方、公達息女方も來訪されるやうになつたのである。公はこの蟄居の間にも、常に讀書修養を怠らず、只同志の公卿等密かに意見を交換し、特に宮廷には特別な方法を以て事情を交換して鋭意識見の培養に努められ、従つてその人格は彌々練磨され、その政見は彌々磨かれて行つた。随つて慶應元年の頃になると天下の形勢が非常な展開をしたのにつれ、公の意見は何時しか開國進取、幕府を倒して王政を復古し、公卿諸卿一致團結の上、全國合同して外國に當り、國運を切り開くべき事を第一とする立派な意見になられた。かういふ事が實に公の英邁にして進歩的であり、而も確固として保つべきものを充分に保持する優れた點が見えるのであり、それは實に百數十公卿中の公を指してその人がなかつたのである。即ち公が嘗て公武合體の爲に奔走し、和宮に従つて東下された時、是に従つて藤井九成、松尾但馬等の志士が時局に感じて、公を水戸の志士鯉沼伊織即ち後の宮内大臣香川敬三に紹介し、之が縁となつて薩長士の志士が公の所に入入する様になつた。即ち、この頃から岩倉村が事實倒幕派の中心地となつた譯である。且又公は千種有任、富小路敬直、六條有容等の侍従を通じて、孝明天皇に屢々密書を奏上するの便宜を持つて居り、天皇もこの忠誠變らざる志を嘉し、且その不遇なるを常に御哀れみあらせられし事として、公の優れた識見を愛でて喜んで之を嘉納してあらせられた。孝明天皇が、かの幕末多難、天下の形勢が日に／＼變化してゐる際に、常に確固泰然として一貫し

た識見を持たせられ、その優れた先見の明察に基く中心を得たる御政見を以て大局を掴み、幕府を初め朝臣、諸侯を率ゐて悖る所なき大道をふませられたのは、實に公の如き明察、赤誠の忠臣があつた事が一つの原因である。當時公が密奏された意見書の中には叢裡鳴蟲、續叢裡鳴蟲、全國合同策等の如く、堂々數萬言、長さ丈餘に及ぶ雄篇もあり、その草案が今日尙岩倉村の公の蟄居の跡對岳文庫に残つてゐるのである。

この對岳文庫の名は公が入道して友山と號し、又對岳と稱せられたからであつて、それはこの地が東窓近く比叡の峰の英姿を見るからである。初め、この家は六疊、四疊半、三疊の茅屋であり、公は此處で農具堆積してゐる間にあつて自から炊飯汲水をした。その間にも澤山の上書、消息等もせられたのであるが、慶應の頃より香川敬三、坂本龍馬、中岡慎太郎、大久保市藏、西郷吉之助、桂小五郎、品川彌二郎、玉松操等の志士が出入するに及び、甚だ狹隘を感じられたので別に離一軒を造築された。それを後に隣雲軒と言はれたやうであつて、現に東伏見宮大妃殿下の御揮毫を仰ぎ掲げてあるのがそれである。初め公はさゝやかな生活をして謹慎してゐたのであるが、後には、かくしてこの家に來訪する志士等に與へられる食糧だけで大變な數に上つた。且又、この頃慶應から幕府が再び非常な干渉を始めて門の傍に監視所を造り、七八人の偵吏が毎につめて居つた。公はこの人達とも隔てなく交つて居られたので、巧みにその倒幕の密計を匿す事が出來た。その爲には近くの中御門卿の山莊或は實相院、又は花園の久兵衛の宅等も志士との對面所に使はれ、三四郎の娘みつが在京志士大久保等との間の密使を勤めたものである。而してこの頃の生活費は非常な多額を要し、その爲には高叔母の知光院尼、側室榎山が奔走し入谷駿河守、朝廷の御典醫曲直瀨亭徳院等は非常な後援者であつた。その爲であらうか、曲直瀨亭徳院は慶應三年八月大阪に於いて暗殺の厄に遇ひ未だにその顛末が明かでないのである。

る。

とまれ、公はこの岩倉村に蟄居される事足掛五年、非常な苦心の末にわづかに身を全うして而も國家の爲に修養研鑽を怠らず、遂にその誠忠が、先づ薩長の志士に領解せられて、彼等より首領に仰がれ、隨つて公がそれ等志士の進言を取捨し、統一して立案、手書せられた所の王政復古、新政創始の方策がその儘に、明治新政府の實行要綱になつたのであつて、その點でこの岩倉村の蟄居の跡は新日本誕生の聖胎の地である。而も又それ以來明治日本が不安動搖の間にもその健全なる歩みを續けて、遂に萬古不動、旭日昇天の光榮の道を歩み、堂々たる大日本を濟すに至る迄、複雑困難なる政局の中心に位し、上は 明治大帝の御信任を忝うし、下は全國民の信頼を博して、薨去に及んでは、畏多くも二回の行幸を辱うし、國民の哀惜を受け、太政大臣、大勳位の待遇を給ひ、公爵を贈られたのであつて、如何にも思ひ出の深い、又光榮の場所である。

## 二、飯田忠彦隱栖の跡

明治維新の思想的原因をなしたものは、色々な學說、著述があるが、中でも水戸義公が畢生の心血を濺ぎ、その子孫相承けて二百餘年を通じて完成せしめられた大日本史が非常な有力な原因をなした一つである事は云ふまでもない。實にこの水戸の大日本史の主張に刺戟され啓蒙されて、我が國の思想界は皇室を中心とし、之に歸向するのが臣子の分である事を悟つたのである。然るに、この大日本史は 神武天皇より筆を始めて 後小松天皇に終つてゐる。つまり吉野朝廷迄を記述して、その後の室町時代、安土・桃山時代、江戸時代には説き及んではゐないのである。これは徳川家の血



を受け、三家の一つに在る義公としては説き及ほし難い所のあつたのは一つの原因でもあらう。併し凡そ歴史が現實の歴史の問題が、現實の生活に最後の重點が在る以上、今日に近い是等の時代程幕末維新に際して、國體を考へ國民社會を考へる人にとつては重要な研究題目であつた筈である。頼山陽の日本外史は武家政治の興亡を論じたのであるが、豊臣秀吉に筆を絶ち、之も御當代には説き及び得なかつた。従つてこの近世の事を知らんとする當時の人々にとつては、京都の史家安田照矩の十三朝紀聞があつて、之は實際洛陽の紙價を高める程、京都に集つて來た志士連に愛讀されたものである。この時に大日本史の計畫を繼いで、その後の歴史を大規模に編纂した飯田忠彦の如きは、その一事のみでも記憶せらるべき學者である。實際大日本史二百七十卷が三十五萬石の富力と天下の副將軍たる御威光を以て、大規模な編纂を數百年に亘つた事でもこの事業の大きさを知るのであるが、その後を繼いだ忠彦の野史は彼が言ふやうに、一貧儒が孤獨無縁の境涯を以て三十八年間の苦心の末、本記、列傳合せて二百九十一卷の大部なものを完成した事は寧ろ人力以上の仕事である。彼は自ら世間の人から見ては狂人と見え候由それ位丹精候ても著述の淨書が中々進まない。夜を日に繼いで心を勵し努力する旨を告げてゐるのであつて、要するにその一生を修史の爲に獻けたのである。而も彼はそれ以外にその該博な知識と高潔な心情とを以て竹の園生に仕へ奉り、獻替宜しきを得て名を竹帛に垂れるに至つた。飯田忠彦は周防の國徳山藩士生田兼門の子として寛政十一年に生れたやうである。幼時より歴史の學問を好み、系譜家傳の類を盛んに寫した。十四歳の時同藩の松尾家の養子となり、十八歳の時から江戸屋敷に務める事になつて四年程在府し文武の修業をした。文政二年二十二の時歸國し養家を去り志を改めて京都に上つた。その志す所、皇室に仕へて忠節を盡さんとするにあつたといふ。その後二年して河内國八尾の郷士飯田忠直の女きほの婿となり飯田氏を冒した。飯田

氏は近在十三ヶ村の大庄屋であつたので、彼は充分に勉學する事が出来、殆ど二階から降りないで讀書生活に没頭したと言はれてゐる。然るに天保四年になつて事業の失敗から家事を義弟に譲り、京都に上り翌五年十一月には有栖川宮家に家來として仕へる事になつた。尤も未だ無籍の家來で定つた職務は無く、御繁多の折に祇候する程の事であつた。それ丈また彼の修史の志を達するには都合がよかつた譯である。

有栖川宮家は四親王家の首班であらせられたので、その御縁故は非常に擴がつてあらせられた。そんなわけで忠彦は知恩院宮、日光宮、中宮寺宮等の御用を依頼せられる事あり、また公家では二條家、武家では水戸家等とも交渉のある身分となつた。さういふ所に彼の先例を好み、眞理を愛する性格は自らその事業の完成に熱中せしむる事となつて、天保十四年九月から病氣靜養を名として當分休暇を願出で、主に江戸に在つて野史の著述に全力を注いだのである。尤も東奔西走して大寺、大社或は諸家の記録を探り、澤山の材料を寫す事もしたが、大體この間に野史の稿本を大半仕上げ、而も東叡山寛永寺の勸學林へ入つて、その所藏の木活字を使用して三十二卷を刷つたのである。嘉永元年再び京都へ歸つて宮家に再勤を願出で、御別邸なる夷川御殿に勤める事になつた。この東叡山での印刷本は宮様の御所望により、鷹司關白政通公を経て、仁孝天皇の天覽に供し奉つたのであつて、彼はこれを冥加の至りとして喜んで居る。その頃から彼の名が世の中に高く、當時の諸侯で之を所望せられる人も多く彼としては最も得意な時代であつた。かくて嘉永四年迄には殆どその原稿を作り上げ、五年の春には淨書も終つたので、同年五月二十九日知己親友を招いて竟宴の會を催す。その卷の名を取つて各々が詩歌を詠み、之を一冊に繼めて百部印行した。この竟宴詩歌を作つた人々の名簿を見ると、當時の京都に於ける文雅の士、中でも志ある人々の大方が参加して居られるのである。彼が平生如何なる事を

考へ如何なる社會に住んでゐるか、解るのである。

この事は間もなくベルリの渡來と、これに續く開鎖の論より、特に安政五年の公武間の纏れの時に、彼が如何なる態度を以て處したかといふ事を物語るのである。そしてその結果が所謂安政の大獄の際に彼も遭難者の一人として苦杯を嘗めた。その後安政五年十二月六日、彼は町奉行の命によつて逮捕され、その年の末には江戸に護送せられて小笠原家に預けられた。爾來幾度か訊問あり、安政六年十月七日には京都に歸り、謹慎すべきを命ぜられて百ヶ日の禁錮の後自由の身となつたのである。

この時彼と同様に學者にして厄に罹つた者は知恩院宮の侍讀池内大學と鷹司家の三國大學とであつたが、兩人とも京都に歸り、池内は慶應元年大阪で暗殺されたが、御國は明治まで存らへて興正寺の攝信上人の顧問として活躍した。忠彦のこの厄に罹つたのは、安政五年三月堀田老中が條約の勅許を得る爲に上洛して非常に苦境に陥つた頃の事、有栖川宮の御建白が幕府の開國主義を非とし、鎖國に取計はるべき事を主張せしめたのは彼の建議によるものといふ爲であつた。實際彼は當年の熾仁親王と世子で坐す熾仁親王の厚き御信任を得て居り、彼が江戸へ下る朝の如きは熾仁親王が態々御殿の御屋根に登らせられて涙を以て目送せられたといふ事である。彼も後に之を聞いて非常に感激してゐる。大體彼の嫌疑は宮様を幕府反對に御導き申したといふ點にあり、彼亦宮様の御身代りとして生還は到底覺束ないと覺悟を決めて下つた。實際幕府は宮様に手を下す事が出来ないで止むなくその心を彼に當てる事に於て甘心したやうである。

彼は安政七年正月再勤を願出て許されたけれども、尙宮家の御計ひで深草大龜谷の谷口なる天台宗の寺院淨蓮華院に隠栖する事になり、三月二十二日其處に移つた。淨蓮華院は文政四年有栖川宮詔仁親王が 光格天皇の御内勅を奉じて、

比叡山知福院の堯覺僧正に 桓武天皇陵前の御堂を建てさせられたのが起りて、安政四年には 孝明天皇から 桓武天皇御陵の別當寺たる資格を與へられた。當時は堯覺僧正の弟子の堯雄、亮嚴僧正で中々氣概のある人であつた。忠彦はこの寺の長屋の六疊一間を與へられて讀書工夫、著述三昧に耽つて居つたが、亮嚴僧正を戒師として剃髮し、默叟と號したのを見てもその決心が解るのであり、併し彼が國許に送つた手紙の中に、この後は隠居するが又若様即ち熾仁親王の御代にもなれば出勤致す事もあるべく、若様より仰下され候事もあると言つてゐる所を見ると、君臣の間他人の忖度を許さない了解があつたと思はれるのである。

彼は此處で行ひすましてゐる中に、櫻田事變の探索が又彼にも及んで萬延元年五月十四日には再び伏見城に召喚された。尤も奉行所では非常に立派な待遇であつたのであるが、この事件は痛く彼の心を打つたものがあると思へて、同月二十二日の夕方脇差を以て咽喉を突き翌日その爲に卒去した。宮家では彼の隠退中も御扶持を下されてゐたのであり、死去に就いても死體を引き取つて厚く葬られた。今河原町二條高田別院内にある墓がそれである。忠彦の著述は野史二百九十一卷、この中二卷が缺けてゐるが、一卷は最近この淨蓮華院にあることが解つた。即ち 仁孝天皇の御本紀であり、次の一卷は將軍家齊の列傳であるが、之は未に出て來ない。その他毫埃五十卷、これは野史編纂について参考にした日記、覺書、軍記、系圖等二百十四種より拔萃したものである。次に謚號考十卷、門跡傳二十二卷、御黒御所傳二卷、之は尼門跡の緣起と系圖とを記したものである。その外諸家系圖六十二卷、諸系譜八十卷、有栖川宮系譜一冊等であつて、六十三年の生涯の中に歴史家として皇室を中心に、そして御由緒ある有栖川宮の輔弼の臣として維新歴史の進行的上に非常な貢獻をして一生を終つたのである。淨蓮華院は彼が僅かに三ヶ月足らずの隠栖の處であるが、この人の

心血を濺いだ著書が澤山に残つてゐる點に於て特に意味があり、その潜んでゐたといふ部屋も今尚残つてゐるのである。京阪電車藤の森停留所から東行し、十二帝陵を拜して間もなく達することが出来る。

### 二二、寺田屋騒動の跡

江戸時代に於ける京阪の交通は京都から伏見街道を出て伏見京橋に至りこゝから所謂三十石船で大阪の八軒屋迄船で往復するのが常であつた。この船は大抵六人又は八人の船頭を以て朝三艘晝四艘夜四五艘位出たものである。下りは早くして夜出れば早朝大阪に着き上りは綱で引くので長くかゝるが、それでも朝八軒屋を出ると夕方には、伏見に着いた。その舟賃は天保錢で一枚、然しそれは一人分の座席で寝る時は三人前後の席が要つた。兎角この三十石船は非常に便利で利用されたものである。その伏見の船宿十數軒の中で南濱町にあつた寺田屋といふのは薩摩藩の御用元を勤めてゐる中々派手に商賣して榮えてゐた。

こゝの當主は伊助、なか／＼鷹揚な人で店の一切は女將おとせが切廻してゐた。おとせは大津の船宿大本重兵衛の次女で、十八歳の時伊助に嫁したのであるが喧し屋の姑をよく介抱し、二人の娘をしつかり躰け、澤山の使用人を使つて店を切廻すのみならず、非常に情深い質で孤兒を五人も育て上げてやつた程の仁者であつた。加之此の女甚だ義侠心強く、特に勤皇の精神に燃えてゐて、尊攘運動に奔走してゐる志士を見ては、あらゆる便宜を計つて居つた。その爲にこゝで衣食を給せられたり、匿まはれたり、非常に恩義になつた人達で明治政府の顯官となつた方も多いのである。

文久二年三月十六日、薩摩の國父島津和泉守久光は衛兵一千餘名を率ゐて鹿兒島城を出發し、四月十日大阪の藩邸に

着いた。當時久光の上洛を以て、王政復興運動の魁をなす決心であると、解釋して居つた尊皇攘夷の志士等は、大に之に望を囑して或は江戸から或は長州から或は豊後岡藩から皆大阪に集つて、その同盟烈士約二百五十人許りの者が動員される計畫が成り、是が規律を定めて京都に討入り、所司代若狹守忠義を襲ひ、且關白近衛尙忠を退け、相國寺獅子王院に押籠められて御在します前青蓮院宮尊融法親王を救ひ奉り、宮を擁して參内して久光に賜ふ勅語を申受け奉つて、檄を天下に飛ばし諸侯を闕下に集めて以て國是を定める手段を講ずる策を建てた。久光は四月十三日大阪を發して伏見に着き、十六日又伏見を發して京都の東洞院錦小路に買入れた藩邸に入った。そして即日近衛家に參殿して中山忠能、正親町眞愛、岩倉具視諸卿も立會ひの上で國事意見九ヶ條についてつぶさに申上げた。これから島津近衛兩家の意見を中心として政治の局面が動き、間もなく九條關白も辭職して近衛忠熙公がその後を襲はれ、大原重徳卿が勅使として江戸に下られるといふ彼の大事件、即ち天下の政局が全く一變して、京都の國政の樞機を實際的にをさめ幕府の權威が京都に抑へ付けられるといふ新しい機運を作り出したのであり、これ程久光の上洛は幕末史の進行の上に劃期的な意義を持つてゐるのである。隨つて薩摩藩の聲望は天下を壓し、志士等が之に頼つて平素の願望を急遽達せんとした事も無理からぬ事である。然るに薩摩要路の意見は志士等の考へる如き過激早急な直接行動によつて目的を達せんとするのでなく、表面は何處までも公武の一和合體して朝廷尊崇の實をあげ、且幕府の政治就中外様大名の地位を高めて幕政に參與する例を開き、以て外國に對し國家を強烈に高めんとするのであつたから、志士等の策する事に就いては甚だ警戒してゐたのである。この上京について大島の配流三年餘の生活から特に呼び返されて、京都に於ける周施役輔佐の爲に先發を命ぜられた大島三右衛門、即ち西郷隆盛が下關に待つべく命を受けながら、かゝる志士の策謀を聞いてそれを宥め

鎮めんが爲に、急ぎ上京した廉を以て久光の激怒に觸れ、四月八日久光の兵庫滞在中歸國を命ぜられ、更に大島に再度流される厄運に遭うたのもこの事情をよく物語るものである。だが志士等は着々その計畫を進め、最初二十一日に事を擧げる積りで大阪に集つてゐたのが、二十三日になつて愈々大阪の薩摩藩邸と、その隣の魚屋とに集つた連中が伏見に上つて、同夜午後五時頃勢揃ひし、方に夕食を終へて京都に打出しようとする評議の最中、久光から命を受けて之を宥め止め、且若し聞かざれば、臨機の所置を取るべき権限を與へられてゐた奈良原喜八郎、道島五郎兵衛、大山格之助等八人はこゝに寺田屋に着いたのである。そして交渉の結果、「暫らく時機を待て」といふ慰撫使と「國家の爲には此の好機を逸することは出来ぬ」と固くとつて應じなかつた志士達との間に血の雨が降つて、遂に志士九人の遭難を見たのである。併し奈良原喜八郎の機轉と眞木和泉の度量によつて残りの人達は打連れて京都なる薩摩藩邸に赴き、久光に陳謝し、その意見によつて後事を計る事になつて居たが、藩邸に行くと夫々本藩に引き渡されて幽閉の厄に遭ひ、引き渡す所なき田中河内介とその子礎磨介及び河内介の甥千葉郁太郎、五條坂の陶工中村主計とは薩藩の志士達と鹿兒島に送られる事となつた。秋月藩士海賀宮門は望んで之に加へられたのである。

この一行は四月二十八日大阪河口から二艘の船で出發したのであるが、途中小豆島沖で河内介父子は切られ礎磨介の屍は五月二日小豆島福田濱に打上げられ襟に縫ひ込める中山家臣田中礎磨介と云ふ氏名で判つた。千葉、海賀、中村の三氏は日向の細島で殺されたといひ同地金ヶ濱に墓がある。河内介父子死骸の事は福田浦の大庄屋三木權左衛門などより倉敷代官に届け出で臨検を受けて是を葬つたのであるが、後に生前の友西村敬藏氏が島民に金を寄せて石碑を建てた。その後明治二十三年に至り、品川彌二郎子が之を尋ねて、贈位官祭に預るやう奏請して、翌年その恩典を賜ひ、二

十八年には氏と小豆島の人々とが追悼碑建設の計畫を立て三十二年に出来上つた。

寺田屋で今一つ有名な事件は慶應二年正月二十三日夜の坂本龍馬遭難の一件である。海援隊を率ゐて長崎を根城に大阪上海迄も乗り廻して武器輸入分配の爲に互利を博し、それを以て京都大阪から長州薩摩に至る討幕佐幕の政渦中に踏み込んで大車輪の活動をしてゐた坂本龍馬は慶應元年十二月には長州藩の代表者桂小五郎等を京都なる西郷等の處に送つて、薩長兩藩の和解血盟をなさしめる處まで漕ぎつけた。然るに入京した桂等を小松、西郷、大久保等は非常に優遇しつゝ、も更に同盟の要談をしないので、桂等は心中甚だ平でなかつた所に、翌年正月二十一日には坂本が京都に來たので事態を直ちに收拾して即日兩藩の間に密約六ヶ條が結ばれたのである。この六ヶ條を書いた裏には彼坂本が之を證明するの文句が認めてあるのが今に残つて居り、之が實に大政返上、王政復古の盛事を引き出す最大の原因となつたのである。元來この頃坂本は長州から支藩長府の士三好慎藏を伴つて來たのであり。正月十八日大阪に着くと、城代土屋采女正の用人大久保越中守より兩人の身邊に危険が迫つてゐる事を告げられ短銃と手槍とを用意して來たので、三好は寺田屋に居つて坂本の指命を待つてゐた。二十三日夕方坂本が京都の上首尾を傳へて來たので、明朝更に三好を伴ひ入京の準備を整へ、小酌を汲んで歡談して居つた處が、急に捕吏が踏み込んで來たので、明朝更に三好を伴ひ入京の準備を整へ、小酌を汲んで歡談して居つた處が、急に捕吏が踏み込んで來たので、暫く應戦した後、闇に乗じて裏口から逃れ、川端の材木裏に忍び込んで漸く薩藩邸に知らせ、そこから留守居大山彦八が迎へに來て安全なるを得たのである。この時龍馬は微傷を負うたが、幸に事なく、翌日は西郷が一小隊の兵を遣はして兩人を京都二本松の藩邸に迎え取つた。伏見の薩藩邸には屬々伏見奉行から兩人の引渡を逼つたけれども、さる者は知らずといふ大山の白々しい返事に、何とも手が着けられなかつたのである。寺田屋の女將おとせは、この時も嚴重な取調を受けたが、知らず存せずで押通

し兩人に事無からしめた。當時寺田屋にお龍といふ女中あり、元富小路三條上ル東側醫師檜崎將作の長女であつたが、將作は夙に勤皇に志あり、安政の大獄に坐して牢死したので、その遺族は離れんくになり、お龍は寺田屋に預けられてあつたのである。元來氣丈な女で才智もあり、この夜も直ちに坂本等に内報して危きを助けた。その後、西郷隆盛の媒介によつて龍馬に嫁し、龍馬は之を下關、長崎を経て鹿兒島にも伴つて行つた事がある。龍馬横死後は遺言により三好慎藏の家に寓し、長府藩より扶助料を給せられて居つたが、その後龍馬の姉乙女の所に身を寄せ、後には横濱に行つて明治十四年十一月八日、こゝに身を終つた。時に四十一であつたといふ。兎に角おとせといひお龍といひ、寺田屋に女丈夫があつて志士の活動を援けたのである。

### 三、天王山

天王山は東海道線山崎驛の直ぐ西側に聳えてゐる標高二百七十米の松山であるが、古來京都から神崎、大物を経て西國に通ずる山崎街道の要地で屢々戦亂の場合の古戰場となつた所である。この山上に式内酒解神社あり、素盞鳴尊とそこの御子神八王子を祀るので天王山の名が起つた。元治元年七月十九日の禁門の變で長州方の軍勢は、利を失ひ、西國街道に雪崩打つて走つて退いたのであるけれども、時の浪士軍の總帥眞木和泉守保臣以下十六人の烈士は、已に尊皇のために盡せるだけ盡した氣持で、尙も死後の魂を駈つてその赤心を運ぶ積りで、こゝに立籠り、最後の戦を交へて屑く花と散つたのである。これ實に元治元年七月廿一日の事、この時保臣は天王社の拜殿に、「甲子秋七月出師討會賊、大不利、引還、我輩不忍徒去京師、屠腹干營天王山、欲隱護至尊也。」と記して十七同志の氏名を記し、また、「大山の

峰のいはほにうづめけり、我が年月のやまと魂」と云ふ辭世とを添へて置いたといふ事である。

眞木和泉守は久留米水天宮の神官で、文化十年に生れ若くして父を失ひ、弟妹三人を愛育して、具さに辛酸を嘗めた。天保十四年、水戸に遊んで會澤憩齋に學び、水戸學の眞髓を體得した。かくて久留米に歸つてから同志を率ゐて、古典を究め、忠孝の義をすゝめ、毎年五月廿五日には、楠公の祭典を舉げてその忠烈を慕うてをつた。弘化四年、孝明天皇の御即位の大禮を舉げさせ給ふや、自ら上京してその御跡を拜禮し、先哲高山彦九郎のなした志を緣つた。然るに彼はその志望を成さんが爲に久留米藩制の改革運動を起したが爲に、却つて幽囚の憂目に遭ひ、下妻郡水田村天満宮の神官なる實弟大島井信臣の家に謹慎を命ぜられた。爾來十一年の間、彼四十歳から五十歳に至る迄、こゝで讀書に耽り詩歌を樂しみ且子弟を教へて他日の飛躍に備へてゐたのである。文久の初めより天下の形勢大いに動き、尊皇攘夷の志士が薩長二藩に志を寄せて、その力によつて事を舉げん事を計り初めた頃から、彼の許には、清川八郎、伊牟田尙平、田中河内介、小河彌右衛門、宮部鼎藏、有馬新七、平野二郎等が盛んに來訪してその意見を聞き、血氣を促してをつた。この志士等の運動が、京都に於て酒井所司代を襲ひ、九條關白を退け、以て朝廷の政治を改革し、大阪を中心とする近畿の勢力を固め、以て討幕の義軍を舉げ、王政復古の盛世を招來せんとしたものであつた事は言ふ迄もない。そして等の運動の指導原理となつたものは彼が幽囚中に著した何傷錄、國體策、天命論、大夢記等であつた。即ち志士等が先づ薩州藩に望を囑したのであつたのと、偶々薩州藩でも先侯齊彬の遺志を繼いで國父久光が兵を率ゐて京都に上り、朝旨を受けて關東に下り、以て公武の一和を計り、且國政の一新をなさん事を計つてをつたので、是が準備の爲に往來してをつた薩藩要路の人々も彼を訪ねてをつた。殊に文久二年二月大久保利通が京都への歸るさ、彼を訪ねた事は彌々彼の

決心を促すに力があつたと見え、同十六日、彼はその一族子弟を引き連れ、脱走して薩摩に向つたのである。即ち二十一日には阿久根に至り、二十七日鹿兒島に入り、久光にその意見書を奉つたが要領を得なかつたので、日向路から大阪に上り、四月廿一日薩州藩邸の西隣松屋に入つた。然るに已に薩州藩邸には田中河内介の同志、有馬新七等の諸藩士と集つて居つたので、總勢二百數十人の一味が兼ねての計畫を實行する段取りになつてをたつた。廿三日には愈々三十石船で伏見に上り、その夜を以て大事を決行する事になつてをたつたのが寺田屋の騒動なる不惧の變によつて蹉跎し、眞木和泉守一黨は京都の薩藩邸に至り次いで諸藩に預けられたるは別に説くが如くである。

この時和泉守は久留米に歸つて幽囚されたのであるけれども、その後勅使の降下によつて幕制の改革、隨つて幕府の朝廷に對する態度、並に勤皇志士に對する取扱ひに變化があつたので、翌年二月になると彼も出獄を許され、久留米藩主より時務を聞かれるやうになつた。殊に彼は、藩使となつて薩摩に何かの交渉に使されたのである。然るに、その後又、久留米藩政に變化があり、薩摩より歸つて見ると、彼は三度幽囚される事になつたのである。所が當時長州藩は攘夷の火蓋を下關に於て切り、それを朝廷にては嘉納され、攘夷監察使が下るといふ程評判がよかつた。その爲彼は朝廷より使があつて、久留米藩にその幽囚を解かしめられたのみならず、御親兵組織の際には、却つて朝廷より召されたのである。即ちその六月八日上京すると間もなく、學習院の徴士に任せられ、爾來、平野二郎、桂小五郎、平井收二郎、轟武兵衛等と日々出勤して三條實美、姉小路公卿等の顧問として盛に經綸を行つてゐたのである。その頃の彼は實に志士の長老として、且知囊として最も重きをなし、朝廷の政策は總て彼の立案した所によつて行はれて居つた。急務三十條及び勢斷勞三條といふ秘策を作つて、長き邊に奉つたり、經緯愚説といふ王政復興、萬里開拓の國策を明らかにし

たのもこの頃である。かくて大和行幸の議となつたのであるが、それが遂に、一頓挫して八月十八日の七卿落ちといふ事件に變り、彼もその行を共にして長州に下り、こゝで種々畫策する所あり、それが翌年六月の長州の嘆願の爲の上京となりし時には、彼も義勇浪士軍の旗頭としてこれに参加してをたつたのである。當時長州の尊皇主義と薩摩のそれ、或幕府會津等の方針とは非常な差があり、その事が遂にかの不幸な蛤御門の戰爭を招來したのであつて洵に遺憾な事である。そしてこの千古の英雄を、あたらその志にあらざる干戈の爲に朝敵の立場に立たせて空しく天王山上に自刃せしめる事になつたのは残念であるが、天運循環して後にはその忠節が嘉せられ、贈位の恩典に預り志士の龜鑑として人々の敬慕を受けてゐるのは洵に喜ばしき事である。

尙この時、彼の本陣は山の中腹なる寶積寺にあつたのであるが、この寺は俗に寶寺といひ、聖武天皇の勅願によつて行基菩薩が開いたといふ傳へになつてゐる。本尊は十一面觀音で、寺寶に打出の小槌があり、山門の内側に三重の塔もある。尙近年平安末期の摺經寫經が澤山出た事を以ても有名であり、幕末には多嘉羅探玄といふ住職があつたが、この僧、なか／＼勤皇の志に篤く身出家なるを利用して志士の片腕になりその行動を助けた爲に、幕吏に捕へられて投獄四年の辛酸も嘗めたのである。この時も和泉守等を攻めた近藤勇の部下に捕へられて京都に引かれたのであるが、歸つた後には、志士の屍を塔の前に葬つた。是を知つた遠近の人達が常に參拜して香華を供へるので幕府ではその墓を發いて附近の竹藪に移したのであるが、明治六年には又探玄が、改葬したのである。その後、師が死んで明治十九年東山の靈山に合祀せられたけれども、明治卅二年になつて、大山崎村の人々が天王山尙武義會といふものを結び、墓地を美しく建設して年々招魂の祭典を行つてゐる事である。

## 二四、淀城址

九〇

淀藩は春日局ゆかりの家柄たる關係上徳川譜代の最も親密な藩として十萬石を領し、代々老中若年寄の如き幕政の樞機に列する家柄であつた關係上、その城地たる淀城は専ら京都制への任務を帯びてゐたものであつた。かの彦根藩と共にその點で重大な意味をもつて居るものである。淀の大橋、小橋を控へて水車に有名な城はその場所柄、西國制への要地であつた。幕末に際しては美濃守正邦が幕府の老中或は陸軍總裁として樞機に參じてゐた爲に最も重要な關係にあつたのである。

併し正邦は元來聰明な人で大局に目が付き天下人心の赴く處、朝廷を尊び幕府を輕しとする空氣をよく飲み込んで居つた。それが水戸派や一橋等の溫和方針が専ら幕政の動向を決定してゐた文久以後の政界に何時も重要な位置を與へられてゐた理由である。

文久三年といへば尊皇攘夷の勢力が當るべからざるものあり、將軍は百數十年振に上洛し、夷狄征伐といふ方針での御祈願の爲に、三月には賀茂下上社に行幸あらせられ、四月には實に石清水八幡へ行幸あらせられるのみならず、五月には彌々攘夷決行といふ觸れ出し迄あつて天下多事不安な時であつた。然るに當時の外國の勢力は已に支那を屈服せしめ非常な鼻息である黒船に強力な大砲を備へ付けた彼等の威力は到底我國の幼稚な軍備では敵すべくもない事であつたのみならず、幕府及び諸藩の財政は到底戰爭に堪へ得べくもない時であつたので、關東に於ける幕府當局者の考と京都に於ける志士浪人を中心とする尊攘過激派の政見の間に非常な距があつた。然るに京都の將軍の左右、一橋慶喜及び

その左右の幕府首腦者の態度はかゝる過激派の勢力を善導する事が不可能なりしのみならず、之を壓服する威信も持たなかつた。即ち彼等は心なすも攘夷の朝命を受け之を奉ぜざるを得なくなる状態であり、且又將軍はつとめて早く東歸して關東民心の望みに順すべき筈であるのに、朝廷に於ては攘夷の決行及びその督促の責任を負はせん爲に、之を許されざるを以て久しく京阪の地に滞り、世の中では將軍は京都の虜になつたといふ評判をして居つた。その上去年八月武藏生麥村に於て島津三郎の従士が英人リチャードソンを殺傷した一件について英國公使は非常な劍幕でその償金を要求し、今にも最後の實力に訴へんとする強談を申かけて居た。然し國內の狀勢は攘夷決行の聲が斷然強いので償金を拂ふどころでない。だから幕府は板挟みになつて困つて居つた。この場合到底御勝算はあらせられんけれども、何れ戰爭をせねばならんから、皆夫々準備するやうにといふ御觸を出した無見識さには笑ふべきものがある。さうしてゐる間に英國代理公使のジョン・ニールは、提督クーパー指揮の大艦隊を寄せて無謀な要求を兵火の中に決せんとの態度を示した。この場合幕府の外交事務掛老中小笠原圖書頭長行は、已むなく獨斷を以て神奈川沖に船をはせて英艦上で償金を支拂ひ、僅に局面を彌縫した。然も彼は精銳の幕兵一大隊を率ゐて軍艦に乗つて大阪より京都に出で攘夷の到底行はれざる事を説いて朝議を一變し、且將軍を連返す目的を以て上洛して來た。之を聞いた京都では大變な騒ぎである。朝臣の一派には、承久の亂が今にも起るやうに危ぶむ者もあり、幕府側ではかゝる際に兵力を以て京に臨む事の不臣の責を免れんとして大いに之を憂ふる意見が多く、従つて何處迄も途中より宥め歸す必要があるとした。この使命を命ぜられたのは當時京都にあつた稻葉正邦である。正邦はその老臣田邊權大夫信尙を召して、如何にもして圖書頭の一行を引とめ、若し聞かすんば成否に關せず圖書頭を討止めよと命じた。權大夫は乃ち馳歸つて先づ小橋の東に櫓を造り、城櫓

に大砲を設けし首を懐中にして小笠原圖書頭の參謀水野筑後守に遇つた。そして強硬な意志を通じた爲に、幕兵は施すに術なく引返して江戸に歸つたので事無きを得たが、將軍は之によつて圖書頭が償金を支拂つた名義を得て東に歸る事が出来たのである。圖書頭は自然逼塞謹慎を命ぜられたのであるが、この償金一件は幕閣との間に内密通ずる所があつた腹藝であつたといふ事である。

淀城が天下の大勢に眞實關係した第一の事件は是であり、次には慶應四年正月の鳥羽伏見戦争後の事である。時に東軍は陸軍奉行竹中丹後守を先軍、老中大河内豊前守を本軍として三日の朝乗込んで來たのであるが、淀藩では絶対に中立の態度を執りその城門を固めて幕軍の入るのを許さない。唯城外の藩學明親館を使用を許したので豊前守はこゝに館したといふ。然るに五日になると、東軍の形勢危くして伏見鳥羽を支へ切れないので退却する事になる。藩では全軍が通過するまで城門を固めてゐた。時に門衛の大將は田邊權大夫の弟治之助であつたが、彼が所用あつて本丸へ行つてゐる留守に、數人の東兵が城門を侵して入つたので急いで之を退けたけれども、その爲に嫌疑を負ひ、御咎めを受けたので責を負うて自刃したのである。

然るにそれより程なく八時半頃には、薩州の隊長益満仁太郎が城内見届の御使者として來たので、番頭松田典禮が應對し幕軍は一人も居らざる事を申開いた。その翌日には烏丸光徳卿が勅使として乗込まれたので、斷然城門を開き薩長の官軍が入城した。そしてその夜は征東將軍仁和寺宮も御宿泊になつて是から八幡、橋本と戦争が南に移つて行つたのである。當時正邦は老中として江戸に在り、家臣が機宜の處置をとつて過なからしめたのである。

967  
86

昭和十八年六月五日印刷  
昭和十八年六月十日發行

非賣品

編輯者 京都市教育局文化課

右代表者 中村 隆太郎

京都市下京區西洞院七條南入

印刷所 西京七内外出版印刷株式會社

代表者 宮崎 勇治



に大砲を設け七首を懐中にして小笠原圖書頭の參謀水野筑後守に過つた。そして強硬な意志を述べた後、幕兵は施すに術なく引返して江戸に歸つたので事無きを得たが、將軍は之によつて圖書頭が賞金を支拂つた名義を得て東に歸る事が出来たのである。圖書頭は自然退塞謹慎を命ぜられたのであるが、この賞金一件は幕閣との間に内密通ずる所があつた腹藝であつたといふ事である。

淀城が天下の大勢に運賃關係した第一の事件は是であり、次には慶應四年正月の鳥羽伏見戦後の事である。時に東軍は陸軍奉行竹中丹後守を先軍、甲中大河内豊前守を本軍として三日の朝乗込を求たのであるが、淀藩では絶対に中立の態度を執りその城門を固めて幕軍の入るのを許さない。唯城外の藩政明細が使用を許したので豊前守はこゝに籠りしといふ。然るに五日になると、東軍の形勢危くして伏見鳥羽を支へ切れないので退却する事になる。藩では全軍が通過するまで城門を固めてゐた。時に門衛の大將は田邊權大夫の弟治之助であつたが、彼が所用あつて本丸へ行つてゐる留守に、數人の東兵が城門を侵して入つたので急いで之を退けたけれども、その爲に嫌疑を負ひ、御咎めを受けたので責を負うて自刃したのである。

然るにそれより程なく八時半頃には、薩州の隊長谷満仁太郎が城内見届の御使者として來たので、番頭松田典禮が應對し幕軍は一人も居らざる事を申開いた。その翌日には鳥丸光徳卿が勅使として來込まれたので、断然城門を開き薩長の官軍が入城した。そしてその夜は征東將軍仁和寺宮も御宿泊になつて是から八幡、橋本と戦軍が南に移つて行つたのである。當時正邦は老中として江戸に在り、家臣が機宜の處置をとつて過なからしめたのである。

昭和十八年六月五日印刷  
昭和十八年六月十日發行

非賣品

編輯者 京都市教育局文化課

右代表者 中村隆太郎

京都市下京區西洞院通七條南人

印刷所(西京七)内外出版印刷株式會社

代表者 宮崎勇治

967

86

に大砲を設けし首を懐中にして小笠原圖書頭の參謀水野筑後守に遇つた。そして強硬な意志を通じた爲に、幕兵は施すに術なく引返して江戸に歸つたので事無きを得たが、將軍は之によつて圖書頭が償金を支拂つた名義を得て東に歸る事が出来たのである。圖書頭は自然運塞謹慎を命ぜられたのであるが、この償金一件は幕閣との間に内密通ずる所があつた腹藝であつたといふ事である。

淀城が天下の大勢に眞實關係した第一の事件は是であり、次には慶應四年正月の鳥羽伏見戦争後の事である。時に東軍は陸軍奉行竹中丹後守を先軍、老中大河内豊前守を本軍として三日の朝乗込んで來たのであるが、淀藩では絶対に中立の態度を執りその城門を固めて幕軍の入るのを許さない。唯城外の藩學明親館を使用を許したので豊前守はこゝに館したといふ。然るに五日になると、東軍の形勢危くして伏見鳥羽を支へ切れないので退却する事になる。藩では全軍が通過するまで城門を固めてゐた。時に門衛の大將は田邊權大夫の弟治之助であつたが、彼が所用あつて本丸へ行つてゐる留守に、數人の東兵が城門を侵して入つたので急いで之を退けたけれども、その爲に嫌疑を負ひ、御咎めを受けたので責を負うて自刃したのである。

然るにそれより程なく八時半頃には、薩州の隊長益満仁太郎が城内見届の御使者として來たので、番頭松田典禮が應對し幕軍は一人も居らざる事を申開いた。その翌日には烏丸光徳卿が勅使として乗込まれたので、斷然城門を開き薩長の官軍が入城した。そしてその夜は征東將軍仁和寺宮も御宿泊になつて是から八幡、橋本と戦争が南に移つて行つたのである。當時正邦は老中として江戸に在り、家臣が機宜の處置をとつて過なからしめたのである。

967

86

製本控

967	面	86	號	年	月	日
著者	京都の歴史					
著者	京都府文化課					
受入	年	月	日			
備考						

京都府文化課  
製本部

終